

来住・久米地区の遺跡VI

久米才歩行遺跡

— 3次・4次・5次調査地 —

2005

松山市教育委員会

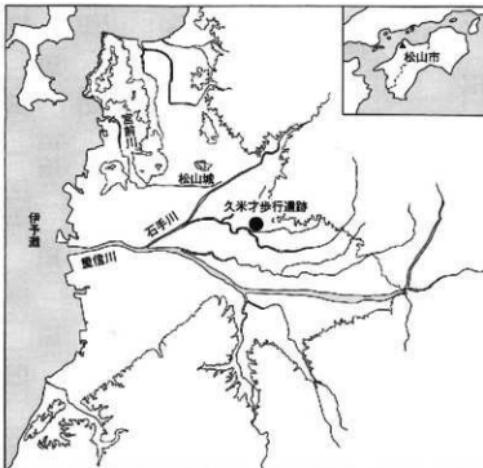
財団法人松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター

来住・久米地区の遺跡VI

久米才歩行遺跡

—3次・4次・5次調査地—



2005

松山市教育委員会
財團法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

序

本書は、平成9年度～平成11年度に松山市東部の来住・久米地区で実施した宅地造成に伴う緊急発掘調査の報告書です。

来住・久米地区には、国指定史跡「来住廃寺跡」、平成15年度に追加指定された「久米高畠官衙遺跡群」があり、全国的にも重要な古代遺跡が展開する地域として知られています。

今回報告します久米才歩行遺跡3・4・5次調査地では古墳時代後期～古代の建物址が検出され、久米高畠官衙遺跡群の北方地域の集落構造を解明する貴重な資料を得ることができ、また、4次調査地では弥生時代の石鎚の定着時期が推定されるなど、重要な成果が得られました。

このような成果をあげることができたのは、埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力を賜った関係者のお陰であり、感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご援助を賜りますよう、お願い致します。

本書が文化財保護、生涯教育、埋蔵文化財調査研究の一助となり、各方面にご活用いただければ幸いに存じます。

平成17年3月31日

財団法人松山市生涯学習振興財団
理事長 中村時広

例　　言

1. 本書は、財団法人松山市埋蔵文化財センターが平成9年度～平成11年度に、松山市南久米町3ヶ所で宅地開発に伴う事前の緊急調査として実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺構は呼称を略号で記述した。竪穴住居址：S B、掘立柱建物址：掘立、溝：S D、土坑：S K、柱穴：S Pとし、遺跡ごとに通し番号を付記した。
3. 遺構の測量は、担当調査員指示のもと補助員・作業員が実施した。
4. 遺物の実測及び掲載図の製作は、調査担当者指示のもと整理作業員が行った。
5. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
6. 写真図版は、遺構の撮影は担当者と大西朋子が、遺物の撮影は大西が担当し、図版作成は担当者と協議のうえ大西が行った。
7. 本書に使用した方位は、磁北と真北である。
8. 本書に掲載した遺物及び写真・図版等の記録類は、すべて松山市立埋蔵文化財センターにて収蔵保管している。
9. 本書の執筆は梅木謙一・宮内慎一・加島次郎・小笠原善治が行い、編集は梅木が担当し、水口あをいが補助をした。
10. 製版 白黒図版-175線
印刷 オフセット印刷
用紙 白黒図版-ニューVマット菊版 93.5kg使用

本 文 目 次

第1章 はじめに.....	[梅木]	1	
第2章 久米才歩行遺跡3次調査地.....	[宮内]	7	
1. 調査の経緯	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第3章 久米才歩行遺跡4次調査地.....	[加島]	35	
1. 調査の経緯	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第4章 久米才歩行遺跡5次調査地.....	[小笠原]	93	
1. 調査の経緯	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第5章 おわりに.....	[梅木]	125	

挿 図 目 次

第1章 はじめに	
第1図 久米才歩行遺跡調査地位置図（縮尺1：2,500）	1
第2図 調査地周辺の遺跡分布図（縮尺1：25,000）	3
第2章 久米才歩行遺跡3次調査地	
第3図 調査地位置図(1)（縮尺1：25,000）	7
第4図 調査地位置図(2)（縮尺1：3,000）	8
第5図 調査地測量図（縮尺1：500）	9
第6図 調査地区割図（縮尺1：200）	10
第7図 東壁土層図（縮尺1：30）	11
第8図 西壁土層図（縮尺1：30）	13
第9図 北壁土層図（縮尺1：30）	15
第10図 南壁土層図（縮尺1：30）	
第11図 造構配置図（縮尺1：100）	17
第12図 堀立1測量図（縮尺1：80）	18
第13図 堀立1出土遺物実測図（縮尺1：3）	19
第14図 堀立2測量図（縮尺1：80）	20
第15図 SK1測量図・出土遺物実測図（縮尺1：30・1：3）	
第16図 堀立4測量図・出土遺物実測図（縮尺1：80・1：3）	22
第17図 堀立3測量図・出土遺物実測図（縮尺1：80・1：3）	23
第18図 SD1断面図・出土遺物実測図（縮尺1：10・1：3）	24
第19図 SK2測量図・出土遺物実測図（縮尺1：30・1：3）	25
第20図 ピット出土遺物実測図(1)（縮尺1：3）	26
第21図 ピット出土遺物実測図(2)（縮尺1：3）	27
第22図 第Ⅲ層・地点不明出土遺物実測図（縮尺1：3）	28
第3章 久米才歩行遺跡4次調査地	
第23図 調査地位置図（縮尺1：2,000）	35
第24図 調査地区割図（縮尺1：300）	36
第25図 調査区北壁・東壁土層図（縮尺1：20・1：50）	37
第26図 造構配置図（縮尺1：200）	40
第27図 S R 201測量図・S R 201埋土④出土遺物実測図(1)（縮尺1：100・1：4・1：2）	41
第28図 S R 201埋土④出土遺物実測図(2)（縮尺2：3）	42
第29図 S R 201埋土③出土遺物実測図(1)（縮尺1：4）	43

第30図	S R201埋土③出土遺物実測図(2) (縮尺1:4)	44
第31図	S R201埋土③出土遺物実測図(3) (縮尺1:3)	45
第32図	S R201埋土③出土遺物実測図(4) (縮尺2:3・1:2)	46
第33図	S R201埋土②出土遺物実測図(1) (縮尺1:4)	47
第34図	S R201埋土②出土遺物実測図(2) (縮尺1:4)	48
第35図	S R201埋土②出土遺物実測図(3) (縮尺1:4)	49
第36図	S R201埋土②出土遺物実測図(4) (縮尺1:2)	50
第37図	S R201埋土②出土遺物実測図(5) (縮尺2:3)	51
第38図	S R201埋土①出土遺物実測図(1) (縮尺1:4)	53
第39図	S R201埋土①出土遺物実測図(2) (縮尺1:4)	54
第40図	S R201埋土①出土遺物実測図(3) (縮尺1:4・2:3)	55
第41図	S R201埋土①出土遺物実測図(4) (縮尺2:3)	56
第42図	S R201埋土①出土遺物実測図(5) (縮尺2:3)	57
第43図	S R201埋土①出土遺物実測図(6) (縮尺1:3)	58
第44図	S R201埋土①出土遺物実測図(7) (縮尺1:3)	60
第45図	S X101~104測量図 (縮尺1:80・1:60)	61
第46図	S X101・104出土遺物実測図 (縮尺1:4・1:3)	63
第47図	S R101測量図 (縮尺1:80・1:60)	64
第48図	S R101出土遺物実測図 (縮尺1:3)	65
第49図	掘立1測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:80・1:3)	66
第50図	S E101測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:40・1:3)	67
第51図	S K102測量図 (縮尺1:40)	
第52図	S K103・S D102・103測量図 (縮尺1:80)	68
第53図	S A101測量図 (縮尺1:80)	69
第54図	I区包含層出土遺物実測図(1) (縮尺1:3)	70
第55図	I区包含層出土遺物実測図(2) (縮尺1:3)	71

第4章 久米才歩行遺跡5次調査地

第56図	調査地及び周辺遺跡 (縮尺1:1,000)	94
第57図	調査地位置図 (縮尺1:1,000)	95
第58図	調査地区割図 (縮尺1:300)	96
第59図	遺構配置図 (縮尺1:200)	97
第60図	南壁・西壁土層図 (縮尺1:30)	99
第61図	北壁・東壁土層図 (縮尺1:30)	101
第62図	S K4測量図 (縮尺1:40)	103
第63図	S D6(北側)・S D7測量図 (縮尺1:40)	104
第64図	S X1測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:50・1:3)	105
第65図	S B1・S B2測量図・S B1出土遺物実測図 (縮尺1:50・1:3)	107

第66図 挖立1測量図・出土遺物実測図(縮尺1:50・1:3).....	108
第67図 挖立2・SA1測量図・SA1出土遺物実測図(縮尺1:40・1:3).....	110
第68図 挖立3測量図・出土遺物実測図(縮尺1:60・1:3).....	111
第69図 挖立4測量図(縮尺1:40).....	112
第70図 SD1・SD2測量図(縮尺1:100・1:40)	113
第71図 SD1出土遺物実測図(縮尺1:3).....	114
第72図 SD2出土遺物実測図(縮尺1:3)	
第73図 SD3測量図(縮尺1:40).....	115
第74図 SD4出土遺物実測図(縮尺1:3).....	116
第75図 SD4測量図(縮尺1:60・1:40).....	117
第76図 SD5測量図・出土遺物実測図(縮尺1:40・1:3).....	118
第77図 SK1測量図・出土遺物実測図(縮尺1:40・1:3).....	120
第78図 SK2・SK3測量図(縮尺1:40).....	
第79図 柱穴及び出土地点不明遺物実測図(縮尺1:3).....	121

表 目 次

第1章 はじめに

表1 調査地一覧	1
----------------	---

第2章 久米才歩行遺跡3次調査地

表2 挖立柱建物址一覧	30
表3 溝一覧	
表4 土坑一覧	
表5 挖立1出土遺物観察表 土製品	
表6 SK1出土遺物観察表 土製品	
表7 挖立4出土遺物観察表 土製品	31
表8 挖立3出土遺物観察表 土製品	
表9 SD1出土遺物観察表 土製品	
表10 SK2出土遺物観察表 土製品	
表11 ピット出土遺物観察表 土製品	
表12 包含層・地点不明出土遺物観察表 土製品	32

第3章 久米才歩行遺跡4次調査地

表13 愛媛県松山市石鎚出土遺跡一覧	74
--------------------------	----

表14	自然路一覧	75
表15	性格不明遺構一覧	
表16	掘立柱建物址一覧	
表17	井戸一覧	
表18	土坑一覧	
表19	溝一覧	
表20	樹列一覧	
表21	S R201埋土④出土遺物観察表 土製品	76
表22	S R201埋土④出土遺物観察表 石製品	
表23	S R201埋土③出土遺物観察表 土製品	
表24	S R201埋土③出土遺物観察表 石製品	78
表25	S R201埋土②出土遺物観察表 土製品	79
表26	S R201埋土②出土遺物観察表 石製品	81
表27	S R201埋土①出土遺物観察表 土製品	
表28	S R201埋土①出土遺物観察表 石製品	85
表29	S R201埋土①出土遺物観察表 土製品	
表30	S X101出土遺物観察表 土製品	87
表31	S X104出土遺物観察表 土製品	88
表32	S R101出土遺物観察表 土製品	
表33	掘立1出土遺物観察表 土製品	
表34	S E101出土遺物観察表 土製品	
表35	I区包含層出土遺物観察表 土製品	89

第4章 久米才歩行遺跡5次調査地

表36	竪穴式住居址一覧	122
表37	掘立柱建物址一覧	
表38	溝一覧	
表39	土坑一覧	
表40	性格不明遺構一覧	
表41	S X 1出土遺物観察表 石製品	123
表42	S B 1出土遺物観察表 土製品	
表43	掘立1出土遺物観察表 土製品	
表44	S A 1出土遺物観察表 土製品	
表45	掘立3出土遺物観察表 土製品	
表46	S D出土遺物観察表 土製品	
表47	S K 1出土遺物観察表 土製品	124
表48	S K 1出土遺物観察表 石製品	
表49	柱穴及び出土地点不明遺物観察表 土製品	

写 真 目 次

第2章 久米才歩行遺跡3次調査地

- | | | |
|-----|--|----------------------|
| 図版1 | 1 調査前の全景（北より） | 2 西壁土層（北東より） |
| 図版2 | 1 調査地全景（南より） | |
| 図版3 | 1 掘立1検出状況（北より） | 2 掘立2検出状況（西より） |
| 図版4 | 1 S K 1 完掘状況（北より） | 2 掘立4完掘状況（北より） |
| 図版5 | 1 掘立3完掘状況（北より） | 2 S P 94 遺物出土状況（北より） |
| 図版6 | 1 S D 1 検出状況（南より） | 2 S D 1 遺物出土状況（北西より） |
| 図版7 | 1 出土遺物（S D 1・S P 94・S P 4・S P 345・S P 256・第Ⅲ層） | |

第3章 久米才歩行遺跡4次調査地

- | | | |
|------|--|---------------------------|
| 図版8 | 1 調査前の全景（南西より） | 2 南壁土層（北より） |
| 図版9 | 1 I 区遺構検出状況（西より） | 2 I 区遺構完掘状況(1)（西より） |
| 図版10 | 1 I 区遺構完掘状況(2)（北西より） | 2 II 区 S R 201 完掘状況（北東より） |
| 図版11 | 1 S R 201 墓土④石鎌出土状況（東より）
2 S R 201 墓土③両刃石斧出土状況（北より）
3 遺構完掘状況（北西より） | |
| 図版12 | 1 S R 201 出土遺物（墓土④・墓土③(1)） | |
| 図版13 | 1 S R 201 墓土③出土遺物(2) | |
| 図版14 | 1 S R 201 墓土②出土遺物(1) | |
| 図版15 | 1 S R 201 墓土②出土遺物(2) | |
| 図版16 | 1 S R 201 墓土①出土遺物(1) | |
| 図版17 | 1 S R 201 墓土①出土遺物(2) | |
| 図版18 | 1 S R 201 墓土①出土遺物(3)・S X 101 出土遺物・包含層出土遺物 | |

第4章 久米才歩行遺跡5次調査地

- | | | |
|------|-----------------------|-----------------------|
| 図版19 | 1 調査区西部遺構検出状況（東より） | 2 S B 1・2 検出状況（北西より） |
| 図版20 | 1 S D 1・2 完掘状況（西より） | 2 調査区西部完掘状況（東より） |
| 図版21 | 1 調査区東部遺構検出状況(1)（東より） | 2 調査区東部遺構検出状況(2)（東より） |
| 図版22 | 1 調査区東部遺構完掘状況（東より） | 2 S B 1 出土遺物 |

第1章 はじめに

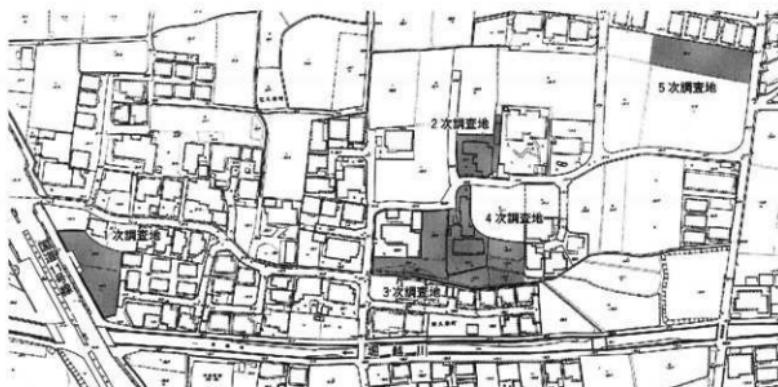
1. 調査・刊行に至る経緯

財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターは、平成9年9月に市内南久米町484-1、平成10年10月に南久米町485-1外、平成11年4月に南久米町468-1で宅地開発に伴う事前の発掘調査を実施した。調査した3ヶ所は松山市が指定した埋蔵文化財包蔵地「126 高畠遺物包含地」内にあり、周辺地の既存の遺跡調査から、遺跡名を久米才歩行遺跡とした。発掘調査に至るまでの詳細は、第2章以降の各調査報告で行うものとする。

発掘作業以降は、各調査担当者が整理作業を行い、平成16年度には本格的な報告書作成作業を実施した。

表1 調査地一覧

遺跡名	現住所	面積(m ²)	調査期間
久米才歩行3次	南久米町484-1	496.32	1997年9月1日～1997年10月31日
久米才歩行4次	南久米町485-1外	1,095.00	1998年10月1日～1998年12月31日
久米才歩行5次	南久米町468-1	790.31	1999年4月8日～1999年6月30日



第1図 久米才歩行遺跡調査地位置図 (S=1:2,500)

2. 刊行組織（平成17年3月31日現在）

松山市教育委員会	教 育 長	土居 貴美
事 務 局	教 育 長	久保 浩三
	企 画 官	石丸 修
	企 画 官	丹生谷博一
	企 画 官	仙波 和典
文化財課	課 長	猿原 忠人
財松山市生涯学習振興財団	理 事 長	中村 時広
	事 務 局 長	三宅 泰生
	事 務 局 次 長	石丸 尤良
	事 勿 局 次 長	池田 政勝
埋蔵文化財センター	所 長	杉田 久憲
	専門監兼学芸係長	早瀬 忠幸
	次長兼調査係長	西尾 幸則
	管 理 係 長	岸本 照修
	調 査 員	梅木 謙一
	調 査 員	宮内 慎一
	調 査 員	相原 秀仁
	調 査 員	加島 次郎
	調 査 員	高尾 和長
	調 査 員	小笠原善治
	調 査 員	河野 史知
	調 査 員	大西 朋子（写真担当）

3. 環 境（第2図）

本書で報告する遺跡は、松山平野を代表する古代遺跡の来住廃寺や久米高畠官衙遺跡群が含まれる「来住・久米地区」に属している。この地区には多くの遺跡があり、報告書も刊行したものが幾つかある。したがって、各遺跡の歴史的・自然地理的環境や久米高畠遺跡の内容は、以下の報告書を参照していただきたい。

【報告書一覧】

- 『来住廃寺』松山市文化財調査報告書 第12集、1979年。
- 『来住廃寺－平成2年度調査概報－』松山市文化財調査報告書 第23集、1991年。
- 『来住・久米地区的遺跡』松山市文化財調査報告書 第27集、1992年。
- 『来住廃寺遺跡－第15次調査－』松山市文化財調査報告書 第34集、1993年。
- 『来住・久米地区的遺跡 II』松山市文化財調査報告書 第44集、1994年。
- 『来住廃寺－第19次調査－』松山市文化財調査報告書 第56集、1996年。
- 『小野川流域の遺跡』松山市文化財調査報告書 第57集、1996年。



- Ⓐ 久米才歩行遺跡 3次
- Ⓑ 久米才歩行遺跡 4次
- Ⓒ 久米才歩行遺跡 5次
- 来住庵寺
- 久米高畠遺跡群
- 福音小学校構内遺跡
- 天山神社遺跡
- 東山古墳群

第2図 調査地周辺の遺跡分布図 (S=1:25,000)

- 『小野川流域の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書 第66集、1998年。
『来住・久米地区的遺跡Ⅲ』松山市文化財調査報告書 第76集、2000年。
『小野地区的遺跡』松山市文化財調査報告書 第81集、2001年。
『久米高畠遺跡-25次調査-』松山市文化財調査報告書 第93集、2003年。
『来住・久米地区的遺跡Ⅳ』松山市文化財調査報告書 第100集、2004年。
『来住・久米地区的遺跡Ⅴ』松山市文化財調査報告書 第101集、2004年。

【概要報告一覧】

- 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』1987年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』1989年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』1991年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』1992年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』1993年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ』1994年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』1995年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』1996年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』1997年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』1998年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅺ』1999年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅻ』2000年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅼ』2001年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅽ』2003年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅾ』2004年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅿ』2004年。

第2章

久米才歩行遺跡

3次調査地

第2章 久米才歩行遺跡3次調査地

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯(第3図)

1997(平成9)年3月4日、田中和彦氏より松山市南久米町484番地1内における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

当地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「No126 高畠遺物包含地」内にあたり、周知の遺跡地帯として知られている。同包含地内では、当地の西方140mの地点に久米才歩行遺跡1次調査地があり、弥生時代中期から中世までの遺構や遺物が確認されている。また、当地に隣接して久米才歩行遺跡2次調査地があり、弥生時代前期の土坑や古墳時代の竪穴式住居址などが検出されている。周辺地域では南久米町番地1・2次調査地)や北久米町屋敷遺跡(1・2次調査地)、南久米町遺跡(1・2・3次調査地)などがあり、縄文時代から中世までの集落関連遺構や遺物が多数確認されている。また、当地の南西100mの地点に『久米評』線刻の須恵器が出土した久米高畠遺跡7次調査地が存在する。

これらのことから、当該地の埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、1997(平成9)年3月14日、文化教育課と財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)は試掘調査を実施した。その結果、地表下20cmの地点にピット数基と土師器、須恵器を検出し、当地に集落関連遺構があることを確認した。

この結果を受け、申請者と文化教育課・埋文センターの両者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構・遺物に対して、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。



第3図 調査位置図(1) (S = 1 : 25,000)

調査は、古墳時代から中世における当地や周辺地域の集落の広がりや構造解明を主目的とし、埋文センターが主体となり、申請者の協力のもと、1997（平成9）年9月1日に開始した。

（2）調査の経緯（第4回）

調査地は、松山平野北東部、平井谷地域を水源とする堀越川の北岸に立地する。調査以前は耕作地であった。調査対象面積は496.32m²であるが、調査事務所や排土置き場の都合上、最終の発掘面積は230m²余りである。1997（平成9）年9月1日、調査事務所を設置し、調査用具の搬入をする。9月4日、重機により表土の剥ぎ取り作業を行い、9月8日より作業員を増員し本格的な発掘調査を開始する。遺構は掘立柱建物址や溝、土坑のほか多数のピットがあり、遺構内や包含層中からは主に古代から中世までの遺物が出土した。10月28日、遺構の掘り下げをすべて終了し、完掘状況写真を撮影する。31日遺構図の測量を完了し、発掘調査を終了する。出土遺物や記録類、調査用具を撤去し、松山市立埋蔵文化財センターに保管する。

（3）調査組織

調査地 松山市南久米町484番地1

調査委託 田中和彦

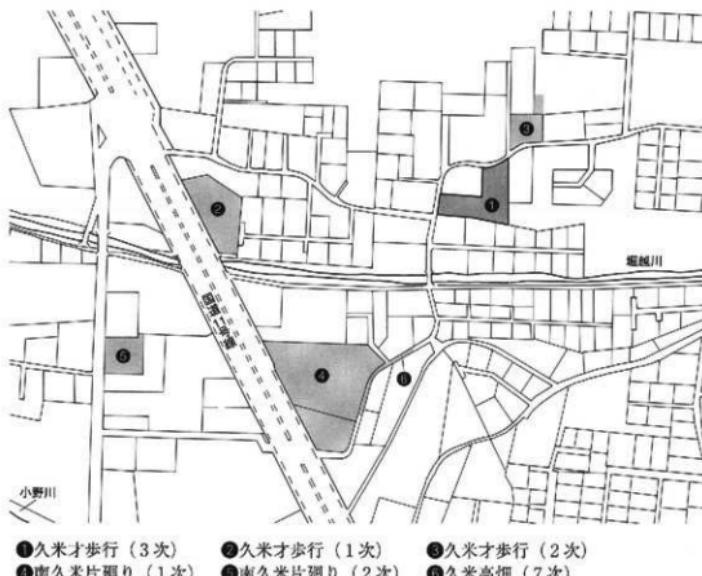
遺跡名 久米才歩行遺跡3次調査地

調査協力 株式会社 中岡組

調査期間 1997（平成9）年9月1日～同年10月31日

調査担当 宮内慎一・相原秀仁

調査面積 496.32m²



第4図 調査位置図(2) (S = 1 : 3,000)



第5図 調査地測量図

2. 層位 (第7~10図、図版1)

調査地は、重信川中流右岸の小野川扇状地と石手川扇状地との間に形成された洪積台地上、標高33.2m前後に立地する。調査地の基本層位は、第I層表土、第II層灰色土、第III層淡茶褐色土、第IV層暗灰褐色土、第V層黄褐色土である。

第I層—近現代の農耕に伴う客土である。地表下20~30cmまで開発が行われている。

第II層—農耕に伴う床上である。厚さ5~10cmである。

第III層—第I・II層による削平により部分的な検出である。調査地西半部に多くみられ、北から南に向けて傾斜堆積をなす。厚さ5~15cmを測り、中世の土師器・陶磁器を包含する。

第IV層—調査地中央部から南側にて検出された。第III層と同様に部分的な検出であり、厚さ5~10cmである。遺物は土師器・須恵器が出土している。

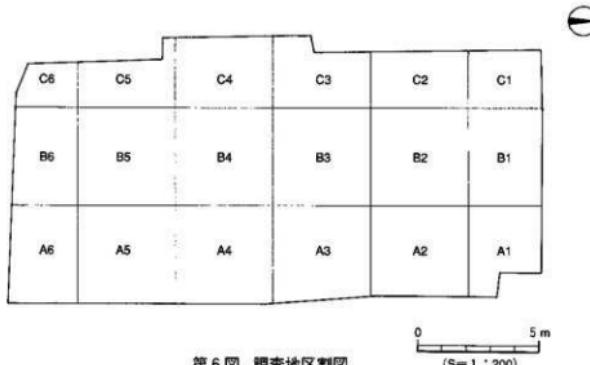
第V層—本層上面が調査における最終の遺構検出面である。調査地北半部は粘性の強い土壌であるが、南半分では本層中に拳大の礫が混入する状況である。

遺構はすべて第V層上面での検出である。掘立柱建物址4棟（掘立柱1・2：古代、掘立柱3・4：中世）、溝3条（SD1：中世、SD2・3：不明）、土坑（SK1：古代、SK2：中世）、ピット411基である。ただし、遺構の遺存状況から判断すると、本来は第IV層以上の層から掘り込まれた可能性が高いものが多い。検出遺構や出土遺物から判断すると、第III層は古代、第IV層は中世までに堆積したものと推測される。

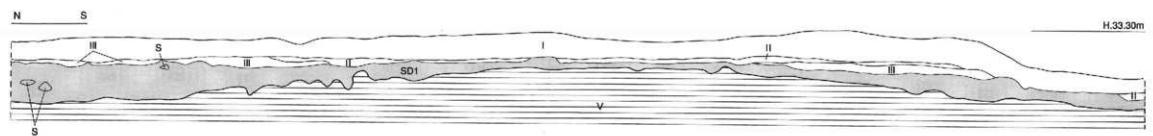
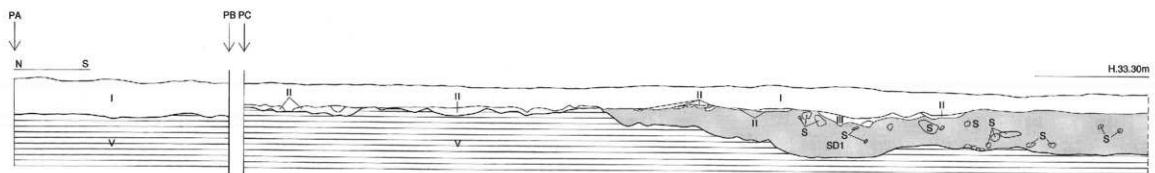
第V層上面の標高を測量すると、調査地北東部が最も高く、南西部に向けて傾斜をなす（比高差40cm）。なお、調査にあたり調査区内を4m四方のグリッドに分けた。各グリッドの呼称名は第6図、土層図のポイント位置P A・P B…P Jは遺構配置図（第11図）に記載している。

本調査において、弥生時代から中世までの遺構と遺物を検出した。弥生時代・古墳時代の遺構は未検出であるが、古代は掘立柱建物址や土坑、中世では掘立柱建物址や溝、土坑をそれぞれ検出した。

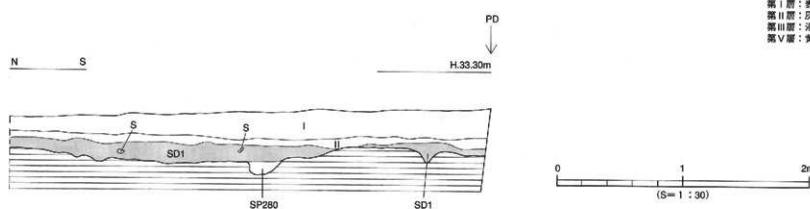
本稿では、① 遺構と遺物 [1] 古代、[2] 中世、[3] 時期不明として、時代別にこれらの遺構・遺物の説明を行うこととする。ただし、ピットや包含層出土遺物などは、[4] その他として掲載している。



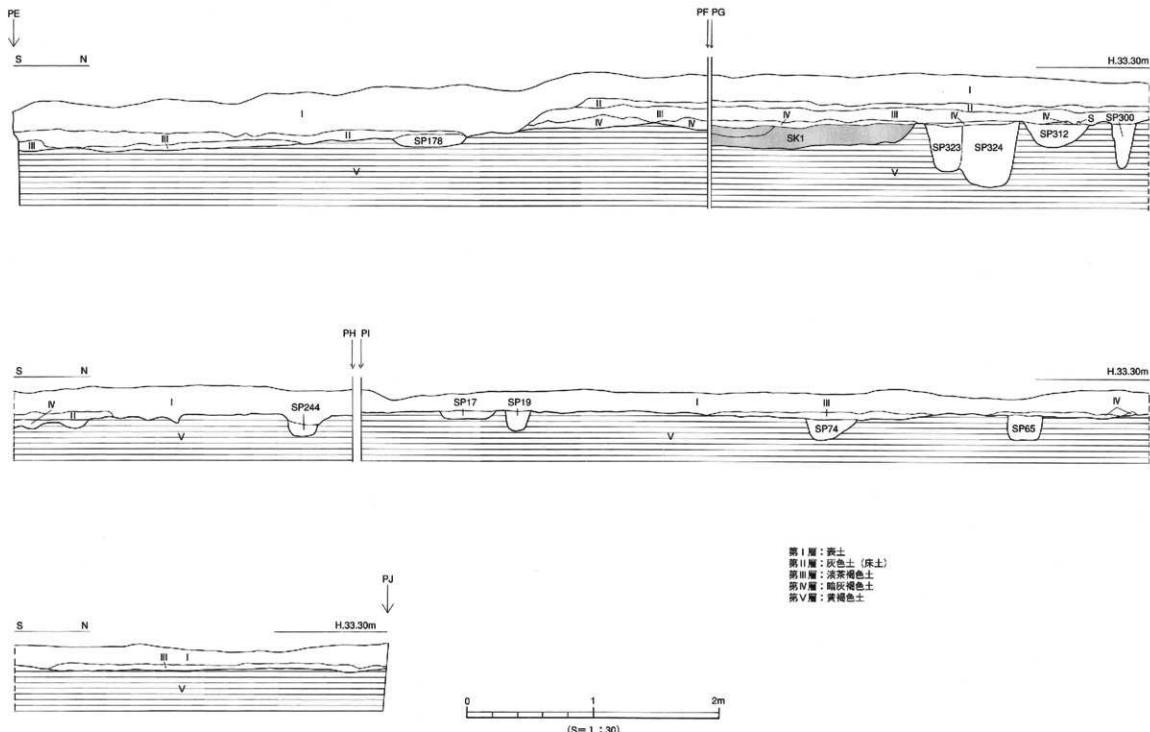
第6図 調査地区割図



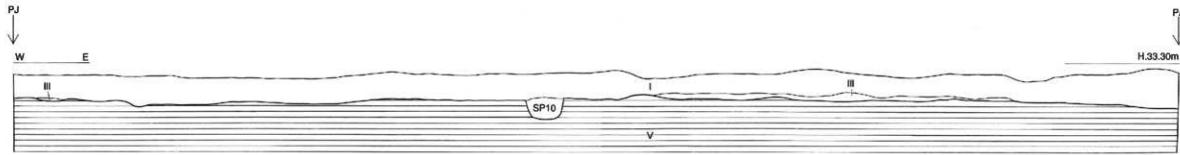
第Ⅰ層：表土
第Ⅱ層：灰色土（床土）
第Ⅲ層：淡茶褐色土
第Ⅴ層：黃褐色土



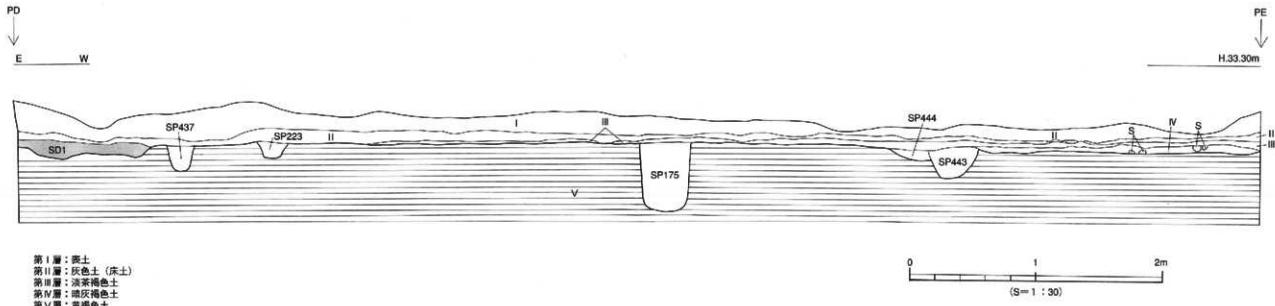
第7図 東壁土層図



第8図 西壁土層図

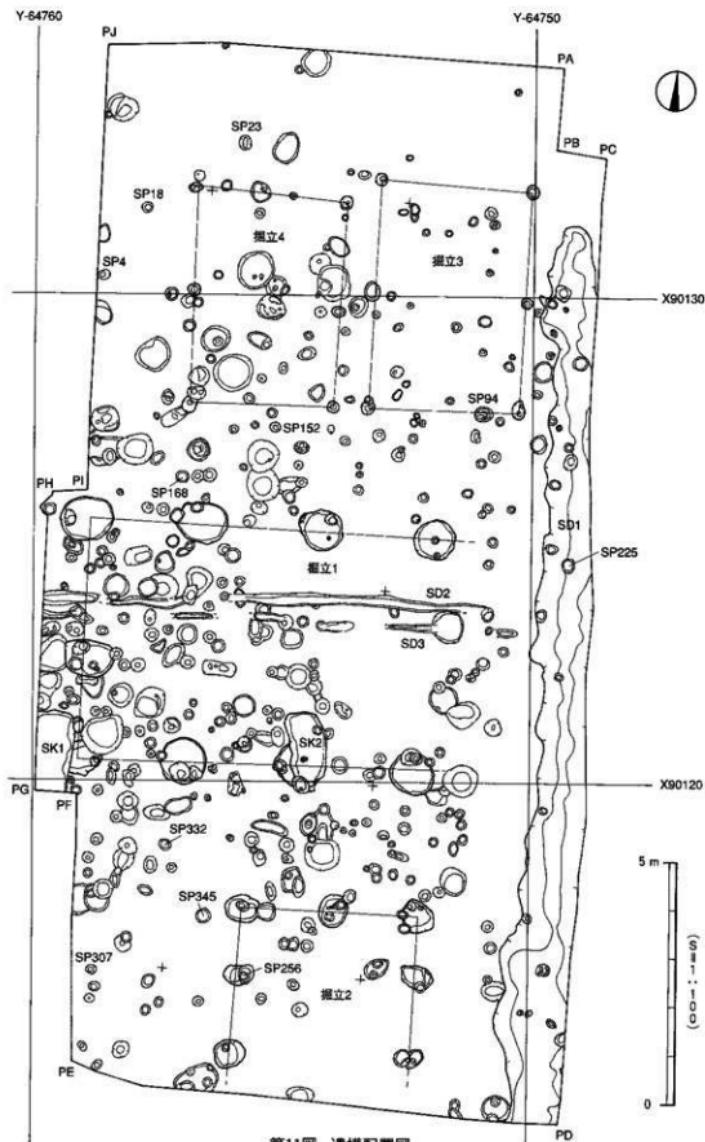


第9図 北壁土層図



第10図 南壁土層図

層位



第11図 遺構配置図

3. 遺構と遺物

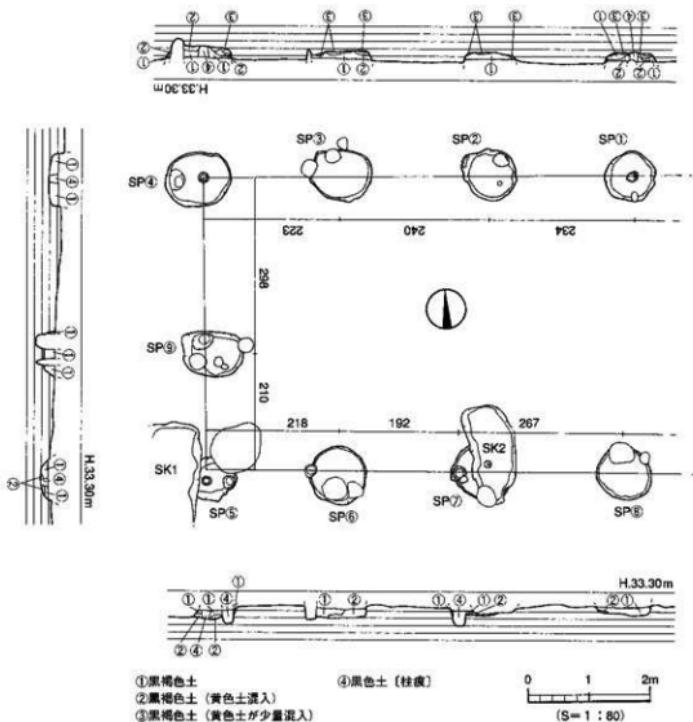
[1] 古代

古代の遺構は掘立柱建物址2棟、土坑1基である。すべて第V層上面での検出である。

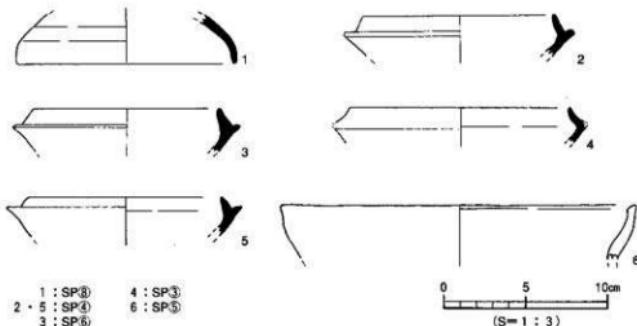
(1) 掘立柱建物址（掘立）

掘立1（第11・12図、図版3）

調査区中央部、A 3～C 4区に位置する。9基の柱穴を検出した。建物東側は、建物柱穴の配置から溝SD1（中世）に削平されたものと考えられ、南西隅柱穴（SP⑤）及び中央部柱穴（SP⑦）は土坑SK1、SK2にそれぞれ部分的に削平されている。梁行2間、桁行3間以上の東西棟で、真北よりわずかに東側に建物方位を振っており、主軸方位はN-2°-Eである。規模は梁行長5.08m、桁行長6.77mである。柱穴間隔は梁間2.1～2.9m、桁間1.9～2.7mである。柱穴掘り方は円～楕円形を



第12図 掘立1測量図



第13図 掘立1出土遺物実測図

呈し、径80~104cm、深さ16~24cmを測る。掘り方埋土は黒褐色土を基調とし、黄色土が部分的に混入するものである。柱痕はSP①・④・⑤・⑦の4基の柱穴で検出され、径16~20cm、深さ16~22cmを測る。柱痕埋土は粘性の強い黒色土である。

遺物は埋土中より、土師器、須恵器小片が少量出土した。そのうち図化しうるもの6点掲載した。

出土遺物（第13図）

1はSP⑧、2・5はSP④、3はSP⑥、4はSP③、6はSP⑤出土品である。1は須恵器坏蓋、2~5は坏身である。坏身は、たちあがりは低く内傾する形態をなす。6は土師器の壺の口縁部である。口縁部は内渕し、口縁端部は内傾する面をもつ。

時期：出土した遺物は7世紀前半頃の特徴を示している。よって、掘立1の造営時期は古代、7世紀前半頃とする。

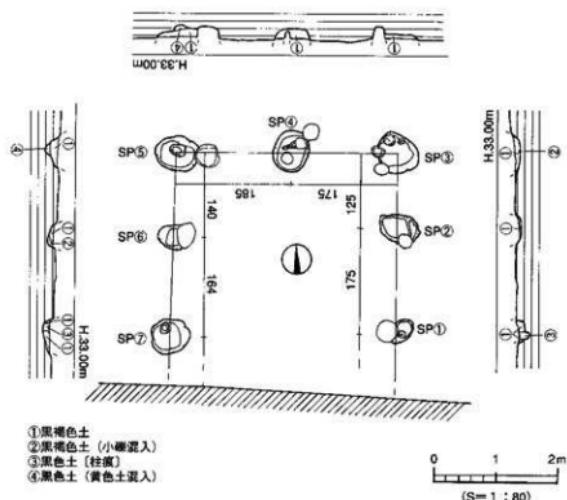
掘立2（第11・14図、図版3）

調査区南側、A5~B6区に位置する。7基の柱穴を検出した。建物南側は、調査区外に続くものと考えられる。梁行2間、桁行2間以上の建物址で、主軸方位はN-2°-Eである。規模は梁行長3.04m、桁行長3.59m、柱穴間隔は梁間1.4~1.6m、桁間1.7~1.8mである。

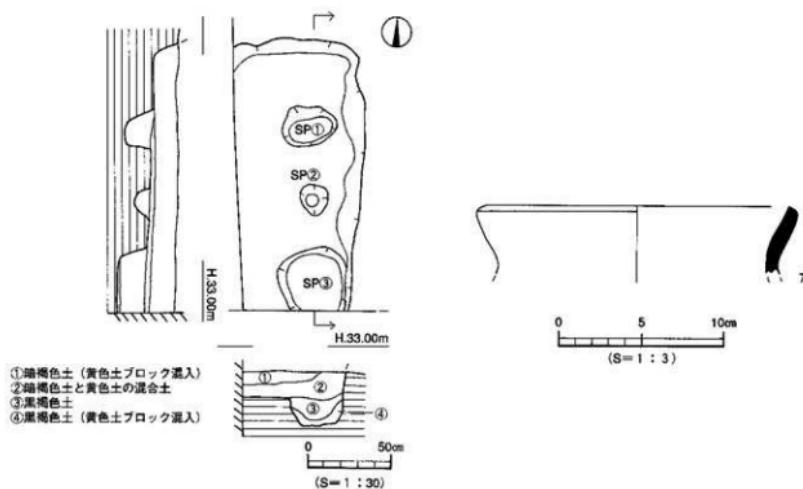
柱穴掘り方は円~楕円形を呈し、径30~60cm、深さ15~20cmを測る。掘り方埋土は黒褐色土を基調とし、黄色土が部分的に混入するものである。柱痕はSP①・⑦の2基の柱穴で検出され、径16~20cm、深さ16~24cmを測る。柱痕埋土は粘性の強い黒色土である。

遺物はSP⑤より須恵器坏身片が出土したが、小片のため図化できず未掲載である。

時期：出土遺物がわずかであり明確な時期判断はしかねる。柱穴の掘り方埋土や建物方位が掘立1に酷似することや、出土遺物の特徴から、掘立1と同時期の建物址と考えられる。よって、掘立2も古代、7世紀前半頃の建物址と考えておく。



第14図 振立 2 測量図



第15図 SK 1 測量図・出土遺物実測図

(2) 土坑

S K 1 (第11・15図、図版4)

調査区西壁中央部、C 4・5区に位置する。掘立1柱穴を切り、造構西侧及び南側は調査区外に続く。平面形態は方形もしくは長方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長0.77m、南北検出長1.66m、深さは検出面下15cmを測る。断面形態は逆台形状をなす。基底面は平坦であり、壁体は垂直に近く立ち上がる。

埋土は暗褐色土を基調とし、黄色土の混入度合いで2層(①・②層)に分層される。①層に比べて②層が黄色土の混入量が多い。

基底面にて大小3基(S P ①～③)のビットを検出した。このうち、S P ①・②の埋土は土坑埋土と同じであることから、S K 1に伴う可能性がある。S P ③は埋土が黒褐色土であり、土坑埋土が異なることや土層断面観察からS K 1構築以前の造構と考えられる。

遺物は、埋土中より土師器・須恵器片が数点出土した。そのうち図化しうるもの1点掲載した。

出土遺物 (第15図)

7は須恵器甕の口縁部である。口縁端部は面取りされ、口唇部はやや内側につまみ出されている。推定口径18.0cm、色調は内外面共に灰色を呈する。

時期：出土遺物は僅少で明確な時期判断は困難である。掘立1に後出することや、遺物の特徴からS K 1は7世紀後半の造構とする。

[2] 中世

中世の造構は掘立柱建物址2棟、溝1条、土坑1基がある。すべて第V層上面での検出である。

(1) 掘立柱建物址

掘立4 (第11・16図、図版4)

調査区北西部、B 1～C 3区に位置する。建物は6基の柱穴から構成される。梁行1間、桁行2間の南北棟で、建物方位をN-2°-Eにとる。規模は梁行長3.04m、桁行長4.48m、柱穴間隔は桁間2.1～2.3mを測る。柱穴掘り方は円～楕円形を呈し、径24～30cm、深さ20～44cmを測る。掘り方埋土は褐色土単層である。柱痕はS P ③・④の2基の柱穴で検出され、径15～20cm、深さ26～30cmを測る。柱痕埋土は粘性の強い褐色土である。

遺物はS P ⑥から土師器土釜の口縁部片が出土したほか、S P ⑥の基底面にて径20cm、厚さ5cmの扁平な石を1個検出した。

出土遺物 (第16図)

8は土師器土釜の口縁部片である。口縁部はやや内傾し、口縁端部は面をもつ。口唇部よりやや下がった位置に断面三角形状の凸帯が付く。

時期：柱穴内から出土した遺物が僅少で、明確な時期決定はしかねる。出土した土釜の特徴から、掘立4は15～16世紀の建物址とする。

掘立3 (第11・17図、図版5)

調査区北東部、A 1～B 3区に位置する。建物は6基の柱穴から構成される。梁行1間、桁行2間

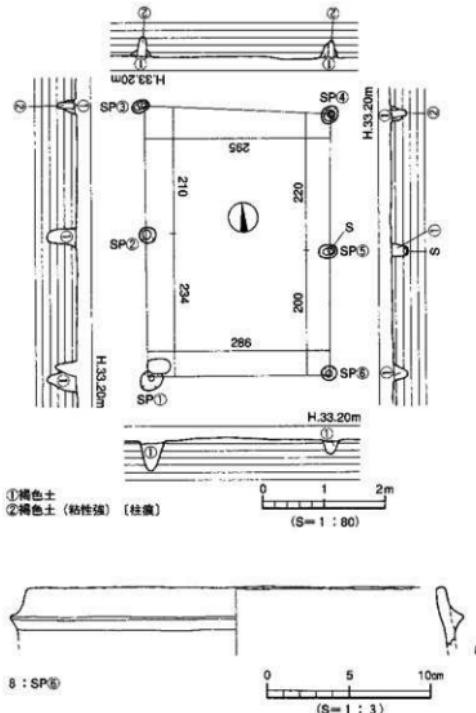
の南北棟で、建物方位をN-2°-Eにとり、ほぼ、掘立4と同じ建物方位をなす。規模は梁行長3.04m、桁行長4.77m、柱穴間隔は桁間2.3~2.5mである。柱穴掘り方は円~楕円形を呈し、径20~40cm、深さ30~45cmを測る。掘り方埋土は暗灰褐色土層である。柱痕は未検出である。

遺物はSP③より土釜、または土鍋の脚部片が出土したほか、SP②の基底面にて径20cm、厚さ5cmの扁平な石が1個出土した。

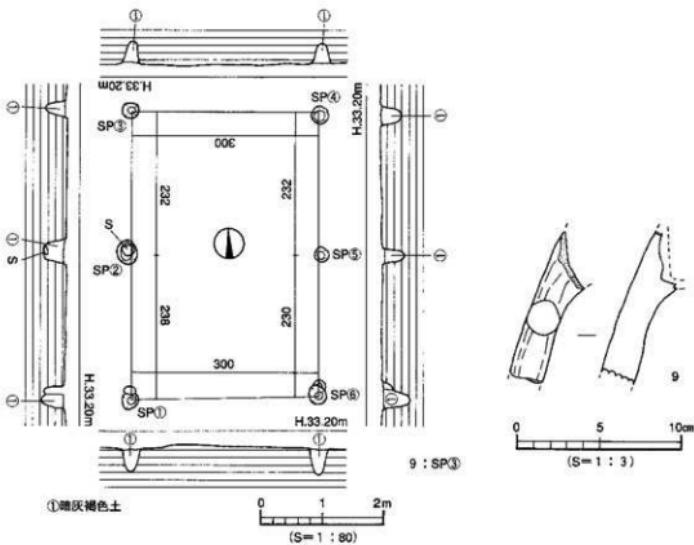
出土遺物（第17図）

9は土釜、または土鍋の脚部片である。最大厚は2cmを測る。脚部の接合方法が看取されるもので、胴部に粘土板を捻るように貼り付け、脚柱部分を絞って成形し、指頭で細かな整形を施している。

時期：柱穴内から出土した遺物が僅少で、明確な時期決定は困難である。あえて時期を求めるならば、掘立3は15~16世紀代の建物址と考えられよう。



第16図 挖立4測量図・出土遺物実測図



第17図 挖立3測量図・出土遺物実測図

(2) 溝

S D1 (第11・18図、図版6)

調査区東側、A 2～6区に位置する。第V層上面での検出であり、第II・IV層が覆う。溝北端は消滅し、南端及び東側は調査区外に続く。溝中央部は掘立1柱穴を削平したものと推測される。南北方向に延びる溝で、ほぼ真北に等しい方位をとる。規模は検出長18.4m、最大幅1.4m、深さは最大で30cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は褐灰色土單層である。

溝基底面は北側から南側に向けて傾斜をなす（比高差30cm）。調査区中央部やや南寄りの地点では、溝基底面に10cm大の礫が露出する状況であった。このほか、溝を完掘後、基底面にて大小20基のピットを検出した。いずれのピットも、埋土が褐灰色土もしくは暗灰褐色土であるため、溝に先行する時期の遺構と推測される。溝内には水の流れた様子はなく、溝の性格は土地割りのためのものではないかと考えられる。

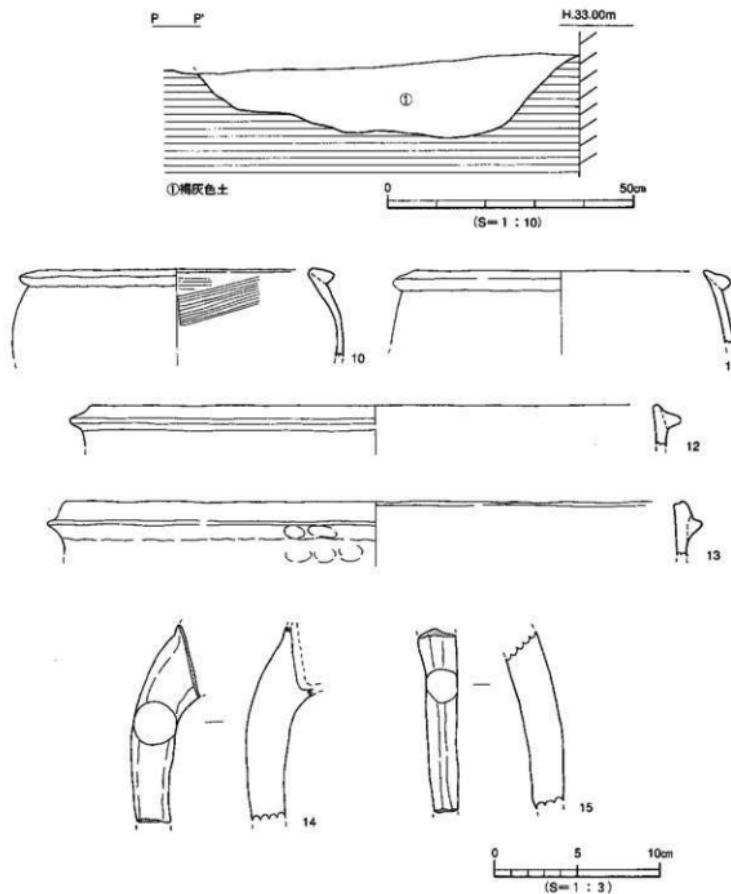
遺物は、埋土中にて土師器片が散在して出土した。

出土遺物 (第18図、図版7)

10～13は土師器土釜である。10・11は口縁部は内湾し、口縁端部に下膨れの断面三角形状の凸帯が付く。10は凸帯下の胴部外面に煤が付着する。内外面共に口縁部はヨコナデ調整、胴部は、10は刷毛目調整、11はナデ調整を施す。12・13は口縁部は直立し、口縁端部より下がった位置に断面三角形状

の凸帯が付く。13の口縁部はやや凹む。13の外面には指頭痕を残す。内外面共に口縁部はヨコナデ調整、胴部はナデ調整を施す。14・15は土釜または土鍋の脚部である。最大厚は14が2.6cm、15は1.9cmを測る。

時期：出土した遺物が15～16世紀の特徴を示している。掘立1に後出することや、出土遺物の特徴から、SD1は15～16世紀代の遺構とする。



第18図 SD1断面図・出土遺物実測図

(3) 土坑

SK 2 (第11・19図)

調査区中央部南寄り、B 4・5 区に位置する。遺構北東部及び南側は、それぞれ灰色土を埋土にもつ SP253、SP214 に切られ、掘立 1 柱穴 (SP⑦) を切っている。平面形態は不整の梢円形を呈し、規模は長径 1.63m、短径 0.80m、深さ約 7cm を測る。基底面はわずかに北から南に向けて傾斜をなす (比高差 4cm)。断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は暗灰色土・単層である。

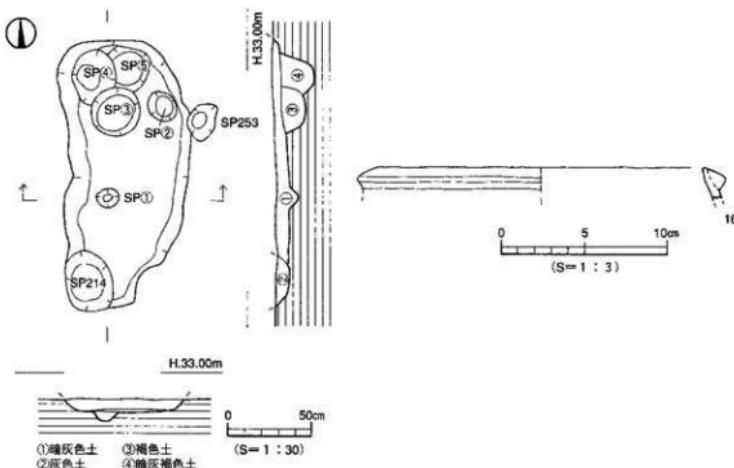
基底面にて大小 5 基のビットを検出した。SP①は径 10~15cm、深さ 5cm 程度のもので、埋土は SK 2 と同様の暗灰色土であることから、本土坑に伴うものと考えられる。そのほか、SP②・⑤は暗灰褐色土、SP③は褐色土、SP④は黒褐色土を埋土にもつことから、これら 4 基のビットは本土坑構築以前の遺構の可能性が高い。

遺物は埋土中にて土師器小片が数点出土したほか、基底面付近からは鉄片 (魂) が数点出土している。出土遺物のうち、國化しうるもの 1 点掲載した。

出土遺物 (第19図)

16 は土師器土釜の口縁部である。口縁端部に接して、丸味のある断面三角形状の凸唇が付く。推定口径 19.4cm、色調は茶褐色を呈する。

時期：出土した遺物が僅少で、明確な時期判断はしかねる。あえて時期を求めるならば、出土した土釜の特徴から、SK 2 は 15~16世紀の遺構とする。また、鉄片が出土したことから、SK 2 は工房的な性格をもつ遺構の可能性もある。



第19図 SK 2 測量図・出土遺物実測図

[3] 時期不明

本調査では、時期特定の困難な遺構として溝2条があげられる。

S D 2 (第11図)

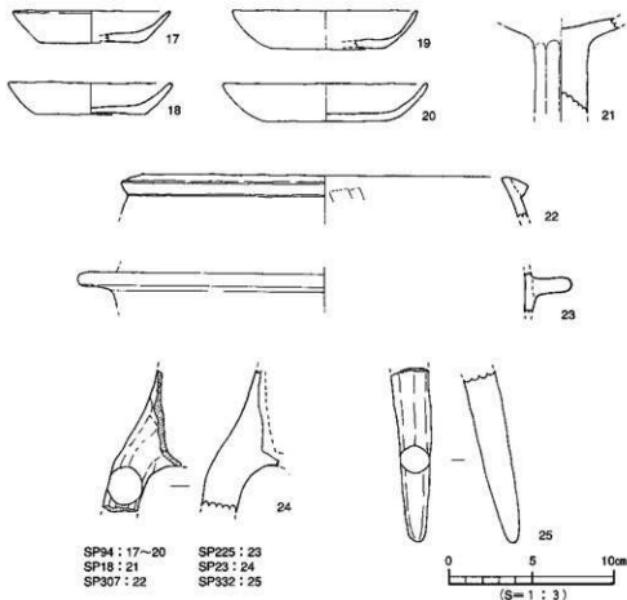
調査区中央部やや南寄り、A 4～C 4区に位置する。東西方向の溝で、規模は検出長8.92m、幅14cm、深さ6cmを測る。断面形態は浅い「U」字状を呈し、埋土は灰色土単層である。溝基底面はほぼ平坦である。溝内からの遺物はなく、他の遺構との切り合いもないことから時期は不明である。

S D 3 (第11図)

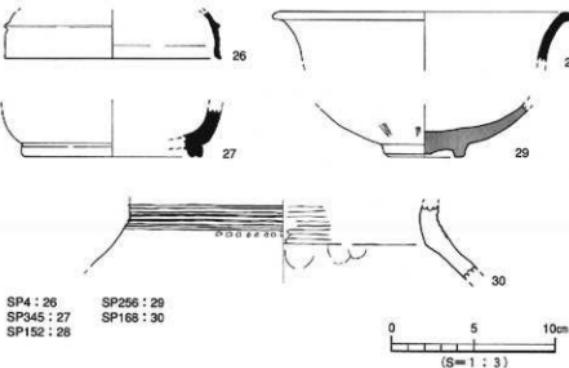
調査区中央部やや南寄り、A 4～C 4区に位置する。S D 2とほぼ平行に走る溝であるが、部分的に削平されている。規模は検出長9.56m、幅12cm、深さ5cmを測る。断面形態は浅い「U」字状を呈し、埋土は灰色土単層である。溝基底面はほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はなく、時期は不明である。

[4] その他

本調査では、掘立柱建物址や溝、土坑のほかにピット411基を検出している。また、包含層である第Ⅲ層中からは、少量ではあるが遺物が出土している。



第20図 ピット出土遺物実測図(1)



第21図 ピット出土遺物実測図(2)

(1) ピット

本調査では411基のピットを検出した。埋土の違いにより以下の5種類に分類される（埋土①—灰色土、埋土②—暗灰色土、埋土③—褐色土、埋土④—暗灰褐色土、埋土⑤—黒褐色土）。

埋土①のピットは91基あり、調査区ほぼ全域に点在する。埋土②のピットは、掘立3を含め89基ある。調査区中央部西寄り付近に集中して分布する。ピット内からは、中世段階の土師器片が出土している。埋土③のピットは掘立4を含め48基あり、調査区北東部に多く分布する。埋土④のピットは117基あり、調査区ほぼ全域に散在する。埋土⑤のピットは掘立1・2を含め66基あり、調査区全域に点在する。ピット内からは弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

これらピットのうち、埋土②のSP94からは、4枚の割れた土師器皿や壺が、ピット中心部付近に斜め方向に埋められていた。そのほか、ピット内から出土した遺物のうち固化しうるものを第20・21図に掲載した。

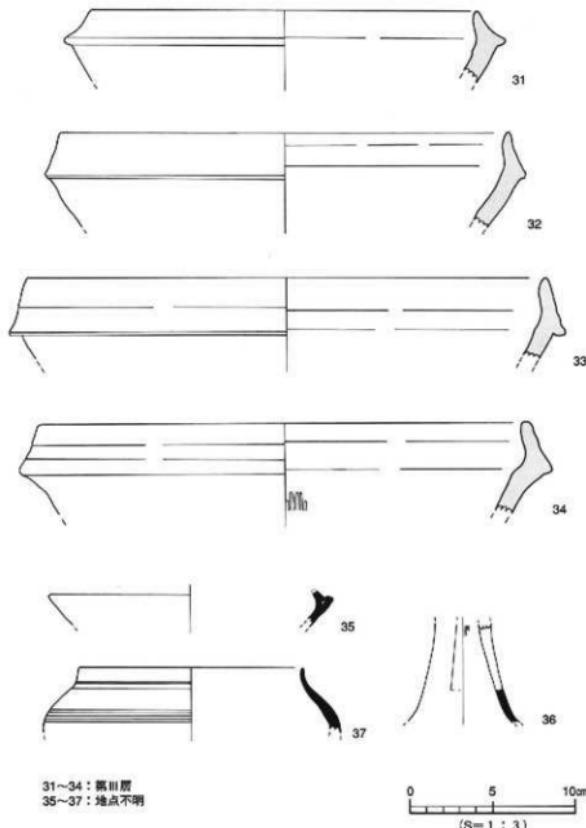
出土遺物（第20・21図、図版7）

17~20はSP94出土品。21・27・28は埋土③、26・30は埋土⑤、その他は埋土②のピット出土品である。17~20は土師器皿である。体部はやや内湾し、口縁端部は丸く仕上げられている。すべて底部の切り離しは回転糸切り技法による。17・18は口径9.2cm、9.9cm、器高は1.9cmである。19・20はやや大型で、口径11.0cmと12.0cm、器高は両者共に2.3cmである。内外面共にヨコナデ調整を施す。21はSP18出土の土師器の高壺である。外面に面取り痕を僅かに残す。22はSP307、23はSP225、24はSP23、25はSP332出土品。22は土師器土釜の口縁部である。口縁端部に接して断面三角形状の凸帯が付く。23は瓦質土器の羽釜である。やや上向きの比較的長い鉗が付く。24・25は土釜または土鍋の脚部である。24は外面にわずかに煤が付着する。26はSP4、27はSP345、28はSP152、29はSP256、30はSP168出土品。26は須恵器壺蓋で、断面三角形の鋭い稜をもつ。27は須恵器壺で、幅広の短い高台をもち、高台接地面はやや凹む。28は須恵器壺である。29は龍泉窯系青磁碗で、体部外面

に細身の蓮弁文を施す。釉は薄緑色で、高台壘付部分は露呈のままである。30は弥生土器の壺である。頸部にヘラ描き沈線文5条と刺突文を施す。

(2) 包含層・地点不明出土遺物 (第22図、図版7)

本調査では、第Ⅲ層中から遺物が出土した。また、出土地点の不明な遺物が数点ある。31~34は第Ⅲ層、35~37は地点不明出土遺物である。31~34は備前焼の擂鉢である。口縁部は上下方に拡張し、端面は31・32は凹み、33・34は凹線が巡る。34の内面には平行条線を5条以上施している。15~16世紀。35は須恵器の坏身、36は高坏、37は短頸壺である。6~7世紀。



第22図 第Ⅲ層・地点不明出土遺物実測図

4. 小 結

本調査において、弥生時代から中世までの遺構・遺物を確認することができた。

弥生時代と古墳時代は、確実に時期比定される遺構は未検出であるが、ピットや表探資料に弥生時代前期や古墳時代後期の土器片が出土している。これは久米才歩行遺跡2次調査において、同時期の遺構や遺物が検出されていることから、近隣に存在する弥生時代や古墳時代集落に関連して、これらの遺物が存在するものと考えられる。

ついで、7・8世紀の古代の遺構・遺物が認められる。7世紀前半頃、掘立柱建物が当地に出現する。掘立1は7mを超える比較的大型の建物址で、建物方位をほぼ真北に等しくとる。柱穴掘り方は円～楕円形を呈している。来住台地上で検出される掘立柱建物址の場合、方向性や柱穴掘り方プランなどで概ね時期判断が可能である。真北方向をとる建物址は古代のもので、掘り方プランにより、円形プランでは7世紀代、方形プランになると8世紀代と考えられている。この観点からも、本調査検出の建物址は7世紀代の建物址であるといえよう。しかも、古代7世紀における集落が、確実に当地や近隣地域に存在することを示す貴重な資料である。

引き続き、9～13世紀の遺構・遺物を有しないまま、久米才歩行遺跡3次調査地は15・16世紀の遺構や包含層を有している。掘立3・4は1×2間の規模の建物址で、真北方向に建物方位をとる。また、南北に延びる溝SD1は検出状況から、土地を区画するための溝ではないかと推測される。このほか、土坑SK2からは基底面付近にて鉄片が数点出土し、工房的な性格の遺構の可能性がある。

このように、掘立柱建物址や地境を示すと考えられる溝、鍛冶工房的性格の土坑などの存在は、当地や周辺地域に中世集落が存在するものとみて間違いないであろう。さらに破片ながら輸入陶磁器の出土は、集落の中心となる大型建物が営まれた屋敷址が、周辺に存在している可能性も高い。

今後は、調査地や周辺地域の遺跡を検討し、各時代における集落の広がりや構造を、来住台地に展開する遺跡との関係をも考慮して考えていかなければならないであろう。

遺構・遺物觀察表 一凡例一

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び觀察一覧である。

(2) 遺構一覧表の出土遺物欄は遺物を略記した。

例) 土師→土師器、須恵→須恵器

(3) 遺物觀察表の記載について

法 量 欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土製品の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、頸→頸部、胴→胴部、底→底部。

胎 土 欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

() 内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1～3)→「1～3mm大の石英・長石を含む」

焼 成 欄 焼成欄は焼成具合を略記した。

例) ○→良好、○→良、△→不良。

表2 挖立柱建物址一覧

掘立	方位	規模(周)	横 行		垂 行		床面積 (m ²)	備 考	時 期
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)			
1	東西	3+α×2	6.77	2.18・1.92・2.67	5.08	2.98・2.10	34.39+α	SK1・SK2に 切られる。	7世紀前半
2	南北	2+α×2	3.04	1.40・1.64	3.59	1.84・1.75	10.91+α		7世紀前半
3	南北	2×1	4.77	2.32・2.45	3.04	3.04	14.50		15~16世紀
4	南北	2×1	4.48	2.13・2.35	3.04	3.04	13.62		15~16世紀

表3 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	A2~A6	レンズ状	18.40×1.40+α×0.30	褐色土	土師	15~16世紀	
2	A4~C4	U字状	8.92×0.14×0.06	灰色土		不明	
3	A4~C4	U字状	9.56×0.12×0.05	灰色土		不明	

表4 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	C4・5	方形	逆台形状	1.66+α×0.77+α×0.15	暗褐色土 +黄色土	須恵	7世紀後半	掘立1を切る
2	B4・5	不規格円形	皿状	1.63×0.80×0.07	暗褐色土	土師・鉄	15~16世紀	掘立1を切る

表5 掘立1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	壺蓋	口径 (13.1) 残高 3.0	天井部からなだらかなカーブを 描き口縁部に至る。口縁端部は 丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	素 ○	SP ⑤	
2	壺身	口径 (11.6) 残高 2.5	たちあがりは内傾し、腹部は丸い。 受部は比較的太く丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	素 ○	SP ④	
3	壺身	口径 (13.2) 残高 2.1	たちあがりは内傾し、腹部は尖る。 受部は欠損。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	素 ○	SP ⑥	
4	壺身	口径 (11.1) 残高 2.6	たちあがりはなく内傾し、腹部は尖る。 受部は水平に短くのびる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	素 ○	SP ③	
5	壺身	口径 (11.5) 残高 2.4	たちあがりは鋭く内傾し、腹部は尖る。 受部は上外方に短くのび、受部端に沈線状の凹みあり。 小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	素 ○	SP ④	
6	甕	口径 (21.2) 残高 3.0	内湾する口縁部。口縁端部は内 傾する。小片。	マメフ	マメフ	橙褐色 橙褐色	素 ○	SP ⑤	

表6 SK1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
7	甕	口径 (18.0) 残高 4.1	須恵器窓の口縁部。わずかに内 傾し、口縁端部は上方にややつま み上げる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	素 ○		

遺物観察表

表7 摂立4出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)(内面)	胎 烧	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
8	土釜	口径(24.8) 残高 3.7	口縁端部よりやや下がった部分に断面三角形の凸部が付く。口唇部は内傾する。小片。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	乳褐色 乳褐色	青 ○	胎焼成	SP⑥	

表8 摂立3出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)(内面)	胎 烧	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
9	土釜	残高 9.3	土釜の脚部。接合痕あり。	ナデ		褐色	石・長(1~3) ○	胎焼成	SP③	

表9 SD1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)(内面)	胎 烧	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
10	土釜	口径(16.6) 残高 5.6	内溝する口縁部。口縁端部に下垂する断面三角形の凸部が巡る。脚部外面に焼付痕。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ハケ(10 本/cm)	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ○	胎焼成	煤	7
11	土釜	口径(17.2) 残高 4.0	土釜の口縁部。口縁端部に下垂する断面三角形状の凸部が付く。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	乳褐色 乳褐色	青 ○	胎焼成		7
12	土釜	口径(34.0) 残高 2.6	土釜の口縁部。口縁端部にはば接して、断面三角形状の凸部が巡る。小片。	ヨコナデ ナデ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~3) ○	胎焼成		7
13	土釜	口径(36.0) 残高 3.3	直立する口縁部。口縁端部より下がった位置に断面三角形状の凸部が付く。口唇部はやや凹む。	ヨコナデ ナデ(指頭痕)	ヨコナデ ナデ(指頭痕)	乳黃褐色 乳黃褐色	石・長(1~3) ○	胎焼成		7
14	土釜	残高 11.5	三足付き土釜の脚部。粘土接合痕あり。	ナデ		褐色	石・長(1~3) 全 ○	胎焼成		7
15	土釜	残高 10.8	三足付き土釜の脚部。縫合。	ナデ(指頭痕)		茶褐色	石・長(1~3) ○	胎焼成		

表10 SK2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)(内面)	胎 烧	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
16	土釜	口径(19.4) 残高 1.9	土釜の口縁部。口縁端部に接して断面三角形の凸部が付く。小片。	ヨコナデ ナデ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ○	胎焼成		

表11 ピット出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)(内面)	胎 烧	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
17	皿	口径 9.2 底径 6.0 器高 1.9	やや内溝する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面に回転系切り痕あり。3/4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黃色 乳黃色	青 ○	胎焼成	SP94	
18	皿	口径 9.9 底径 6.6 器高 1.9	内溝する口縁部。底部に凹凸あり。底盤は回転系切り離し技法。4/5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黃褐色 乳黃褐色	石・長(1~3) ○	胎焼成	SP94	7
19	皿	口径(11.0) 底径(6.6) 器高 2.3	大型の皿。口縁部は内溝し、口縁端部は丸い。底盤外面に回転系切り痕あり。1/2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黃白色 乳黃白色	青 ○	胎焼成	SP94	7
20	皿	口径 12.0 底径 7.2 器高 2.3	ほぼ完形品。大型で口縁部は内溝する。底盤は平底で回転系切り離し技法を施す。	マメツ	マメツ	乳黃白色 乳黃白色	青 ○	胎焼成	SP94	

ピット出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)(内面)	胎 土 烧 成	備考	図版
				外 面	内 面				
21	高环	残高 5.6	外面に面取りの痕跡を看板。中実。	マツツ		赤褐色	密○	SP18	
22	土釜	口径 (21.6) 残高 2.5	内湾する口縁部。口縁端部に接して断面三角形の凸部が付く。	①ヨコナデ ②ヨコナデ ③ナデ	④ヨコナデ ⑤ナデ	乳白色 乳褐色	密○	SP307	
23	羽釜	口径 (30.5) 残高 2.5	瓦質土器。やや上向きの比較的長い鶴。小片。	ナデ	ナデ	灰褐色 乳質褐色	密○	SP225	
24	土釜	残高 8.7	土釜の脚部。わずかに縁付着。接合痕が残る。	ナデ(指頭状)		褐色	密○	SP23 蒸	
25	土釜	残高 10.6	土釜の真部。無身。脚端部は丸い。	ナデ		褐色	石・長(1~3)○	SP332	
26	坏蓋	口径 (13.1) 残高 2.8	断面三角形の鋭い棱をもつ。口縁部はやや内湾し、端部は内傾する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密○	SP4	7
27	坏	底径 (11.8) 残高 3.0	高台付坏。高台は太く底体部境付附近に付く。高台接地面は凹む。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密○	SP345	7
28	壺	口径 (17.0) 残高 3.1	外反する口縁部。口縁端部はやや下方に垂下する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密○	SP152	
29	瓶	高台径 (4.3) 残高 3.3	龍泉窯系青磁碗。腹身の蓮瓣文あり。薄緑の釉を挂し、高台量付部分は露呈のまま。	④回転ナデ ⑤回転ヘラ 切り	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	密○	SP256	7
30	壺	残高 4.5	壺の頸部断面。颈部にヘラ描き 汱紋文5条と刻文を施す。沸生前期。	ナデ	⑥ミガキ ⑦ナデ	赤褐色 赤褐色	密○	SP168	

表12 包含層・地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)(内面)	胎 土 烧 成	備考	図版
				外 面	内 面				
31	擂鉢	口径 (23.0) 残高 4.4	側前焼。口縁部は上下方に拉張り。端面はやや凹む。口唇部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰褐色	密○	Ⅲ層	
32	擂鉢	口径 (27.0) 残高 5.2	側前焼。口縁部は上下方に拉張。口縁端部はわずかに内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 赤褐色	密○	Ⅲ層	7
33	擂鉢	口径 (31.4) 残高 4.9	側前焼。口縁部は上下方に拉張。端面に凹凸あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 赤褐色	密○	Ⅲ層	
34	擂鉢	口径 (28.5) 残高 5.2	側前焼。口縁部は上下方に拉張。側壁の平行条痕5本あり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 暗灰色	密○	Ⅲ層	7
35	坏身	残高 2.1	たちあがりは欠損。受部は短く水平に付く。小片。	マツツ	回転ナデ	乳白色 乳黃白色	密○	地点不明	
36	高环	残高 6.1	外反する脚部。3方向の透かしあり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密○	地点不明	
37	壺	口径 (13.3) 残高 4.3	粗頭壺。口縁部は直立し、壺部は尖り気味に丸い。腹部に回転カキメ調整を施す。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密○	地点不明	

第3章

久米才歩行遺跡

4次調査地

第3章 久米才歩行遺跡4次調査地

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯（第23図）

平成10年4月27日、川田和代氏より、松山市南久米町485-1・3・4の住宅建設にあたり、埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課と呼称する）に提出された。

当該地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「126 久米高畠遺物包含地」内にある。さらに、久米才歩行遺跡として過去に3次の本格調査が実施されている地域内にあたる。このうち、平成8年度に実施された久米才歩行遺跡3次調査地は本調査地の西20mの地点になる。

よって、文化教育課は申請地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲やその性格を確認するため平成10年5月に試掘調査を実施した。調査の結果、当該地に遺跡が存在していることが明らかとなつた。この結果を受け、申請者、文化教育課、財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター（以下、埋文センターと呼称する）の三者は、確認された遺跡の取り扱いについて協議を行つた。住宅建設に伴つて消失する遺跡に対して、記録保存のための本格調査を実施することになった。埋文センターは申請者の協力のもと、平成10年10月～11月の間に発掘調査を実施した。調査は、申請地を含めた周辺地域における集落構造の解明を主目的としたものである。

(2) 調査組織

調査地 松山市南久米町485-1・3・4

調査面積 1,095m²

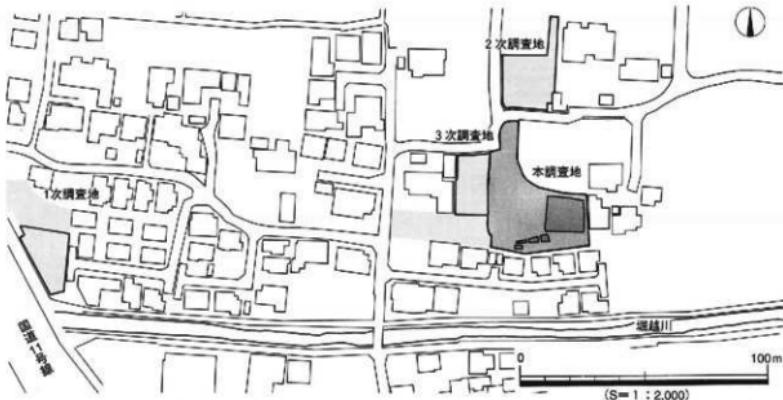
遺跡名 久米才歩行遺跡4次調査地

調査委託 川田和代

調査期間 屋外調査 平成10年10月1日～同年11月30日

調査担当 高尾和長、加島次郎

屋内調査 平成10年12月1日～同年12月31日



第23図 調査位置図

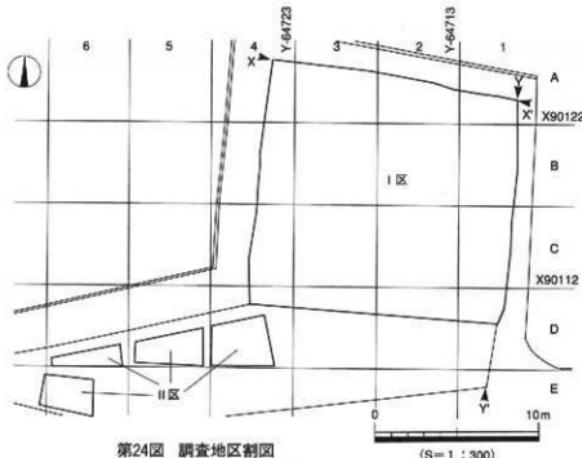
2. 層位 (第25図、図版8)

久米才歩行遺跡4次調査地は、現在の堀越川下流域の右岸に位置し、標高32~33mを測る。調査前は畑であった。

層位は、第I層が灰白色土 (N7/0) で、現代の耕作土である。調査区の全域に分布し、南東部では厚く堆積し、層厚70cmを測る。第II層がにぶい橙色土 (5YR7/4) で、床土である。調査区の全域に分布する。層厚5~10cmを測る。第III層は二層に分けられる。①層が灰白色土 (10YR7/1) で、調査区北半部に分布し、層厚5~20cmを測る。②層がオリーブ黄色土 (5Y6/3) で、調査区南西半部に分布する。層厚5cmを測り、ほぼ水平に堆積する。第IV層は二層に分けられる。①層が黄色粘質土 (2.5Y8/8) で調査区北東部に局部的に分布する。②層が灰色土 (N6/0) で、調査区南西部に分布し、層厚5cmを測る。第V層は灰白色土 (N7/0) である。層厚8cmを測り、ほぼ水平に堆積する。本層以下、Ⅷ層までは調査区北半部のみ分布する。第VI層は明褐灰色土 (5YR7/2) で、層厚5~10cmを測る。第VII層は灰白色土 (2.5Y7/1) である。層厚35~70cmを測る。黄色土 (2.5YR7/2) ブロックが互層となって堆積していることから、二次堆積層と考えられる。第VIII層は二層に分けられる。①層が灰白色土 (2.5Y7/1)、②層が灰白色土 (2.5Y7/1) で①層と比べて粒が細かく、硬い質感である。いずれも調査区北東部にのみ分布する。第IX層は黄色土 (2.5Y8/6) である。調査区の全域でみられ、3~5cm大の川原礫を多量に含み、ガチガチした質感である。本層上面が遺構検出面になる。

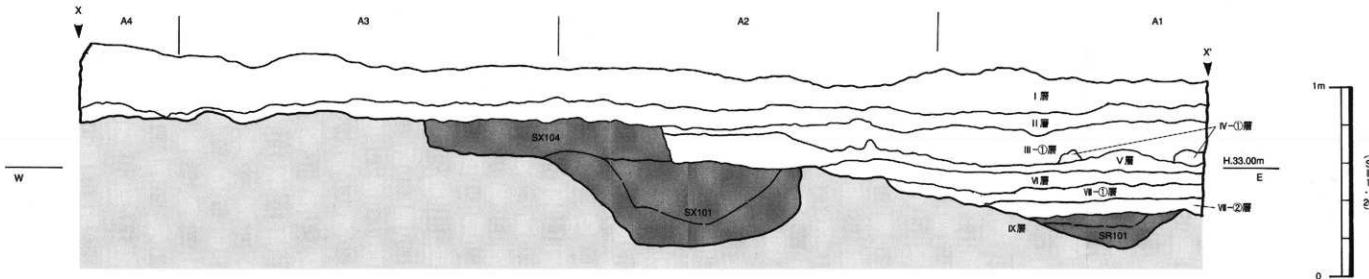
調査地は既に近現代の土地開発を受け(第I~Ⅶ層)、大きく改変されている。これらの土層から出土した遺物の多くが、器面の磨滅した小破片である。第VIII層は最も多くの遺物が出土した遺物包含層であり、遺物は6~8世紀代である。第IX層は20cm程深掘りを行ったが遺物は出土しなかった。

なお、土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の新版標準土色帖(1989)を準拠した。調査にあたり、真北方向を軸として調査地に5m方眼区画を設定した。方眼区画は北から南へ向かってA・B・C…、東から西へ向かって1・2・3…とし、呼称はこれらを組み合わせることとした。調査の進行上、便宜的に調査区を2つに区分し、北半部をI区、南半部をII区とした(第24図)。

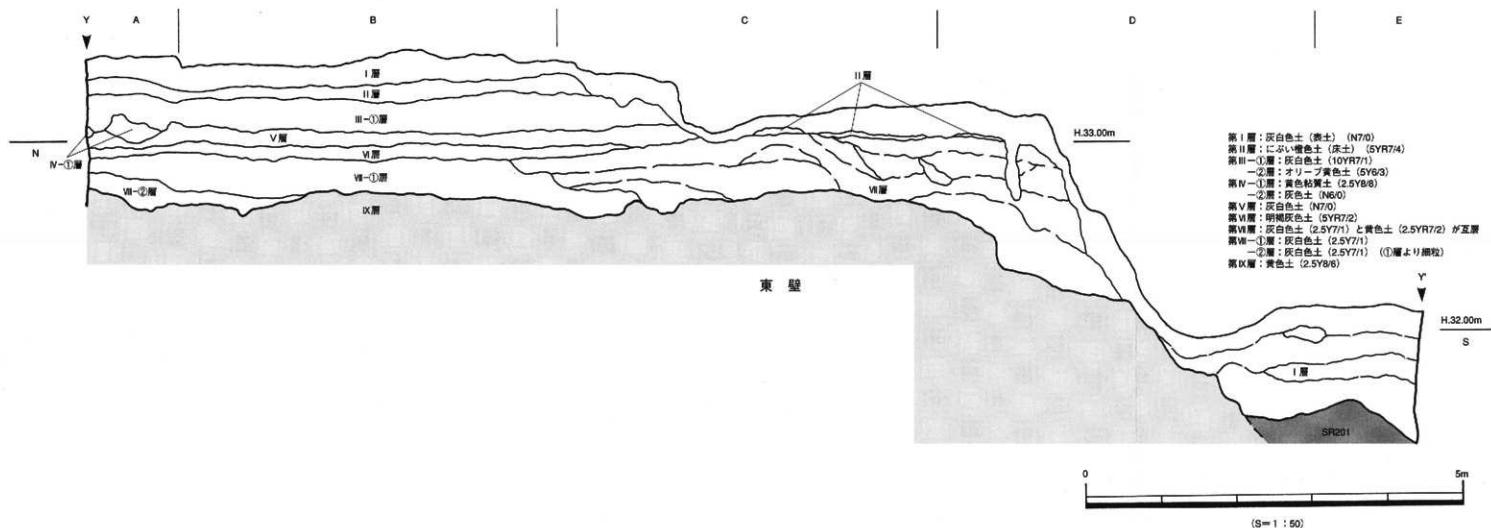


第24図 調査地区割図

(S=1:300)



北壁



第25回 調査区北壁・東壁土層図

3. 遺構と遺物

本調査では、弥生時代、古墳時代～古代、中世の遺構と遺物を確認した。時代別の遺構の種類と基數は次のとおりである（第26図）。

弥生時代	自然流路	(S R 201)	1
古墳時代～古代	性格不明遺構	(S X 101～104)	4
	自然流路	(S R 101)	1
中世	掘立柱建物址	(掘立 1)	1
	井戸	(S E 101)	1
	溝	(S D 101・102)	2
	柵列	(S A 101)	1
	土坑	(S K 102・103)	2
	柱穴	(S P 1～32)	32

出土遺物は、遺構と包含層に大別できる。

遺構出土遺物は縄文時代晩期、弥生時代前期・中期、古墳時代後期、古代、中世に帰属するものがあり、弥生時代前期と古墳時代後期～古代の遺物が多い。これらの多くは S R 201からの出土である。他の遺構からの出土遺物は少なかったことから、遺構の帰属時期については、遺構埋土と配置から判断した。

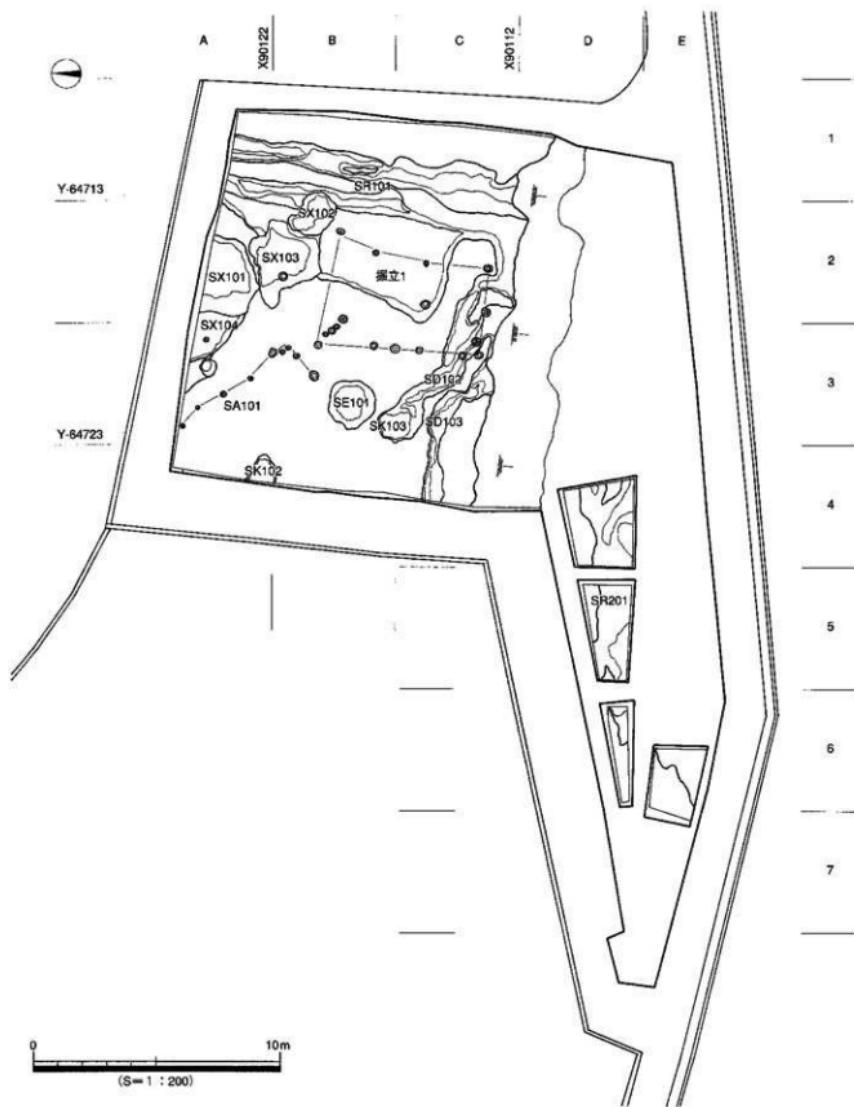
包含層出土遺物は第Ⅲ層が多く、古墳時代後期～古代が主体を占める。

(1) 弥生時代

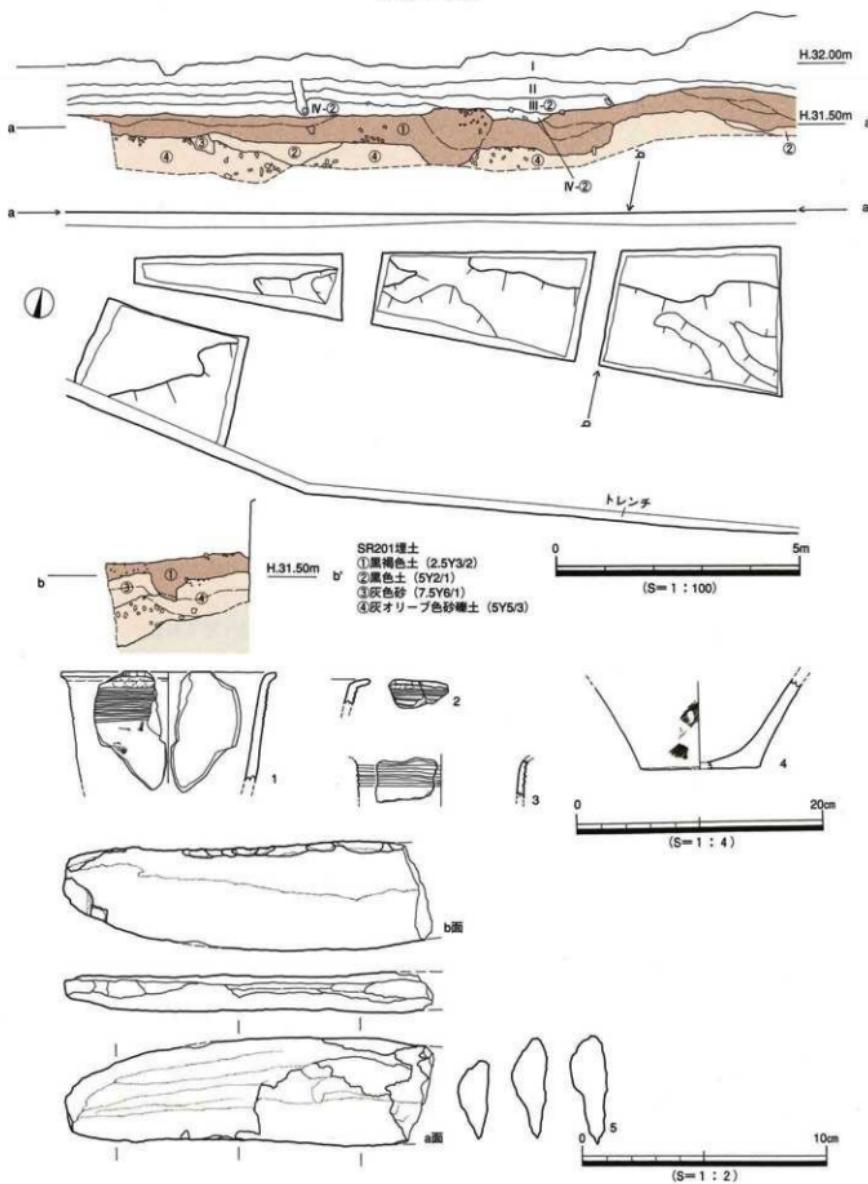
S R 201（第26・27図、図版9）

II区に位置し、流路の東・西・南は調査区外に続く。調査の工程上、D 4～6区とE 6区を調査した。規模は、検出長14m、幅5m、深さ0.8～1.3mである。埋土は4層に分層され、上から埋土①～④とした。埋土①は黒褐色土（2.5Y3/2）である。層厚30～40cmを測る。本層は硬くしまっており、鉄分の碎ブロックを含む。上部に比して下部は黒色が強い傾向にある。遺物は弥生前期土器・中期上器、石製品、土師器、須恵器、磁器、陶器が出土した。遺物の量が最も多く、種類も豊富で多時期にわたる。埋土②は黒色土（5 Y2/1）である。層厚10～30cmを測る。本層は非常に硬くしまっている。遺物は弥生前期土器と石製品が出土した。埋土③は灰色砂（7.5Y6/1）である。層厚10～20cmを測る。本層は粒の揃った砂で構成されており礫は含まない。遺物は縄文晩期土器、弥生前期土器、石製品が出土した。埋土④は灰オリーブ色砂礫土（5 Y5/3）である。層厚30～40cmを測る。本層は1～3cm大の円礫を多量に含み、ガサガサした質感をもつ。土にしまりではなく、湧水が著しく認められた。遺物は弥生前期土器と石製品がわずかに出土した。遺構の床面が相対的に南へ向かって落ち込んでいることから、流路の右岸の一部を検出したと考えられる。出土遺物は、埋土④→①の順で記述することとする。

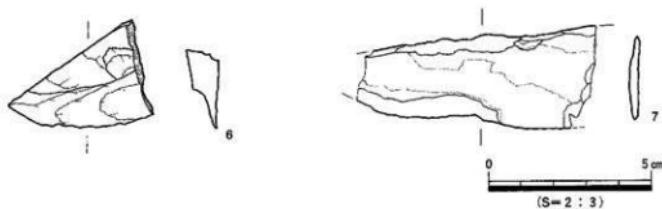
久米才歩行遺跡4次調査地



第26図 遺構配置図



第27図 SR201測量図・SR201埋土④出土遺物実測図(1)



第28図 S R 201埋土(4)出土遺物実測図(2)

出土遺物 (1~237) (第27~44図、図版12~18)

埋土④出土遺物 (1~7) (第27・28図、図版12) 土器には壺と壺、石器には石鎌・スクレイバー・剝片がある。

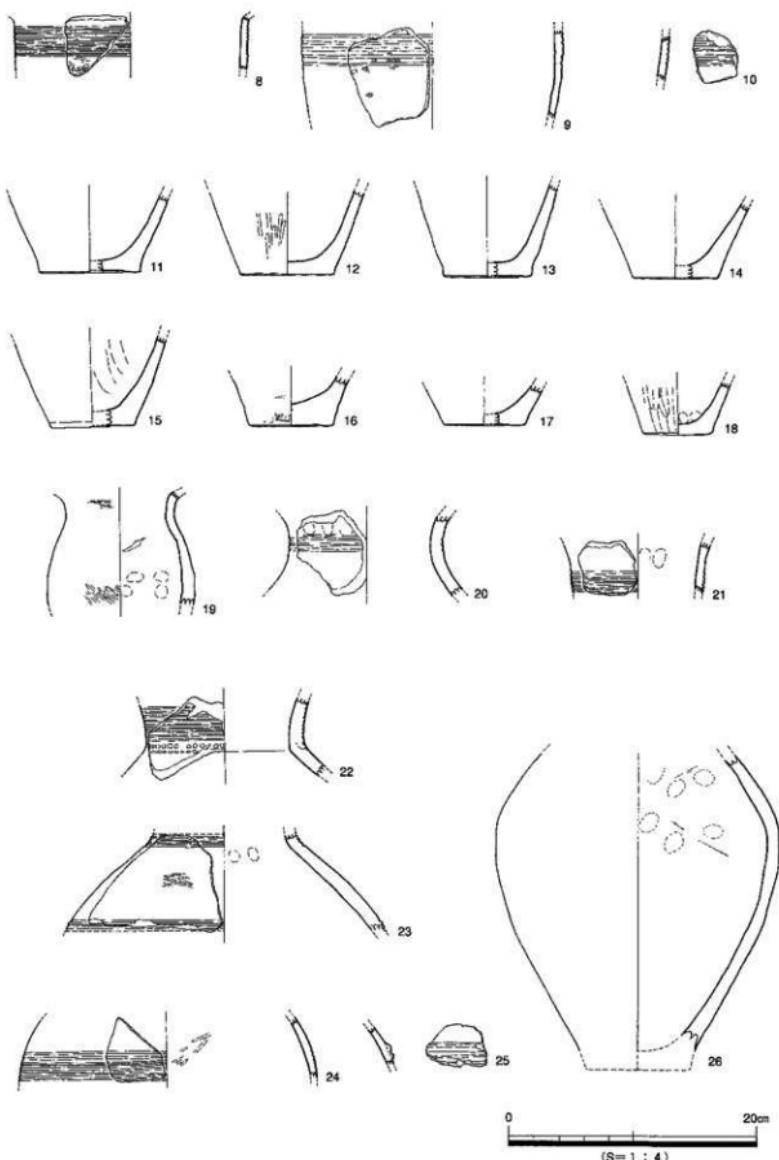
1~3は壺である。いずれも口縁部が折り曲げられて形成される。1は復元口径17.5cmを測る中型品である。胴上半部は張りが弱く、外傾気味に立ち上がる。2は口縁部片、3は口縁~胴上半部片である。4は壺で、中型壺の底部片である。薄い平底で、復元底径9.8cmを測る。5は石鎌である。緑色片岩製。打裂を終え、研磨に移行した未成品になる。刃部はわずかに内湾し、背部は外湾する。研磨は局部的にみられ、a面の基部付近と背部中央部に施されるにとどまる。6はスクレイバーである。サヌカイト製。右側部は自然面(風化した縫面)で覆われる。7は剝片である。緑色片岩製。両面が粗削時の剥離面で構成される。大陸系磨製石器の製作段階(粗削段階)で生じたものと考えられる。

埋土③出土遺物 (8~60) (第29~32図、図版12・13) 土器には壺・壺・高坏・蓋があり、わずかに縄文土器が出土している。

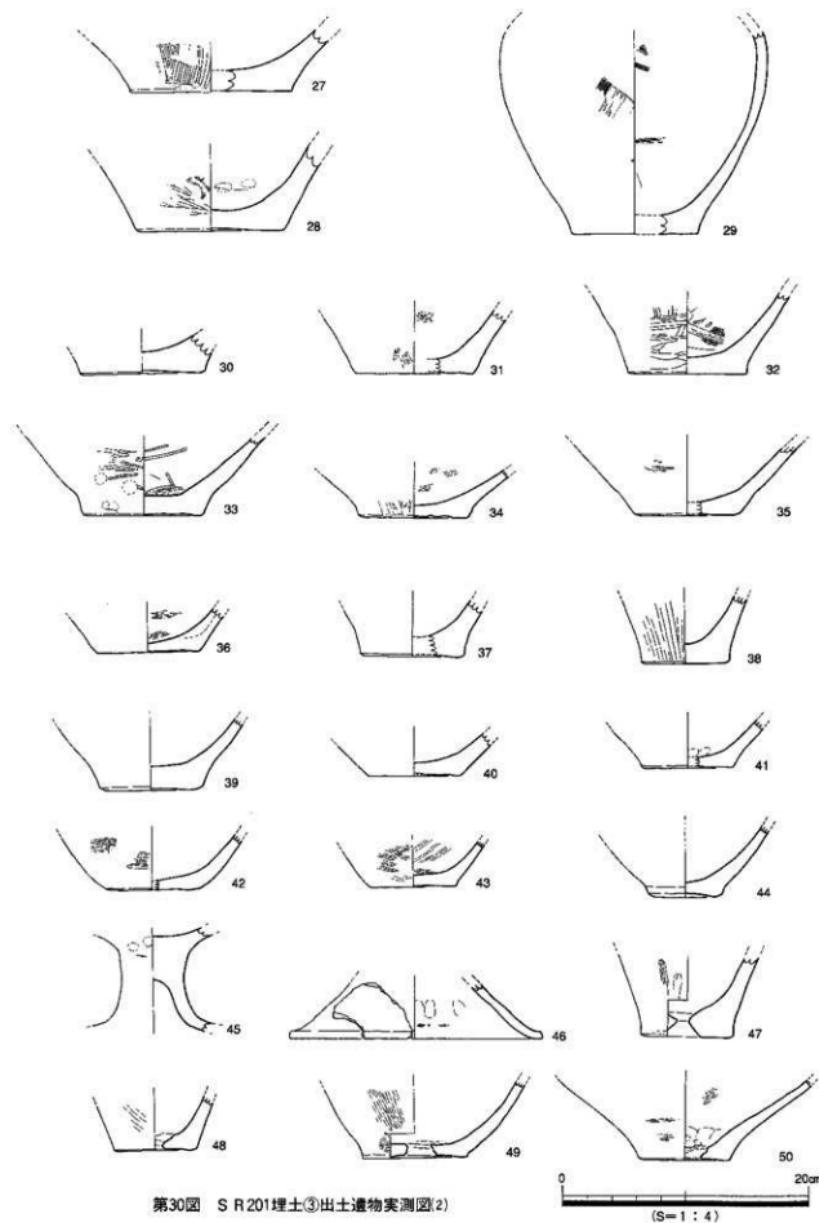
8~18は壺である。8と9は口径が20cm前後に復元される中型品で、施文は胴上半部に施され、多条の沈線文をもつ。11~18は底部である。平底ないしわずかに上がる底部で、底径が5~8cmのもので占められる。19~44は壺である。19と20は短い口頭部をもち、20はヘラ描き沈線文を3条施す。21と22は筒状のやや長い頭部で、いずれも多条の沈線文を施す。22は9条以上の沈線文の下位に、2段の刺突文が施される。23~25は胴中位辺りが最大径となり、かつ幅広く施文されるものである。23は大型品、25は断面「M」字状の凸帯が施される。26は中型品で、肩部が張る胴部である。27~44は底部である。27と28は大型品、29~37・39は中型品、38・40~44は小型品になる。平底とわずかな上げ底のものがあり、底部の厚さは大・中型品が厚く、小型品には薄い傾向がみられる。44にみられる顕著な上げ底は1点に限られる。45は高坏である。短い脚部をもち、裾部が広がる。46は蓋で、裾部が短く外反する。内面調整はヨコ刷毛後丁寧なナデによる。47~50は、いわゆる「コシキ」用の土器である。47と48は壺の底部を焼成後に穿孔したもので、47は両面から穿孔している。49と50は壺の底部で、焼成後に穿孔が施され、49は外面から片面穿孔する。

51~54は縄文土器である。51は深鉢で、口縁部は外へ向かって大きく外反するものと考えられる。外面にはヘラ描きによる斜格子状の沈線文が施される。52は深鉢で、口縁部は緩やかに外反し、端部は面取り後に刻みが全面に施される。調整は、外面がヨコ方向の条痕、内面が丁寧なナデになる。胎土には長石と石英の他に、金雲母が多く含まれる。53は鉢で、復元口径が10.8cmの小型品である。胴部上半で屈曲し、わずかに内傾しながら立ち上がる。口縁部は波状を呈するものと考えられる。外面

遺構と遺物

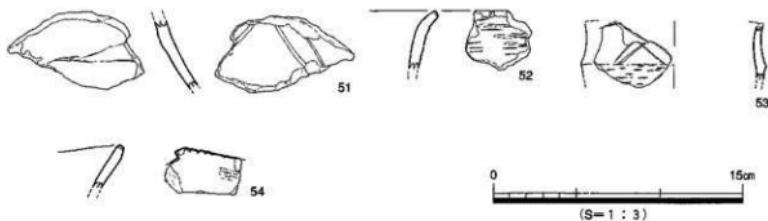


第29図 SR201埋土③出土遺物実測図(1)



第30図 S R201埋土③出土遺物実測図(2)

0
20cm
(S=1:4)



第31図 S R 201埋土③出土遺物実測図(3)

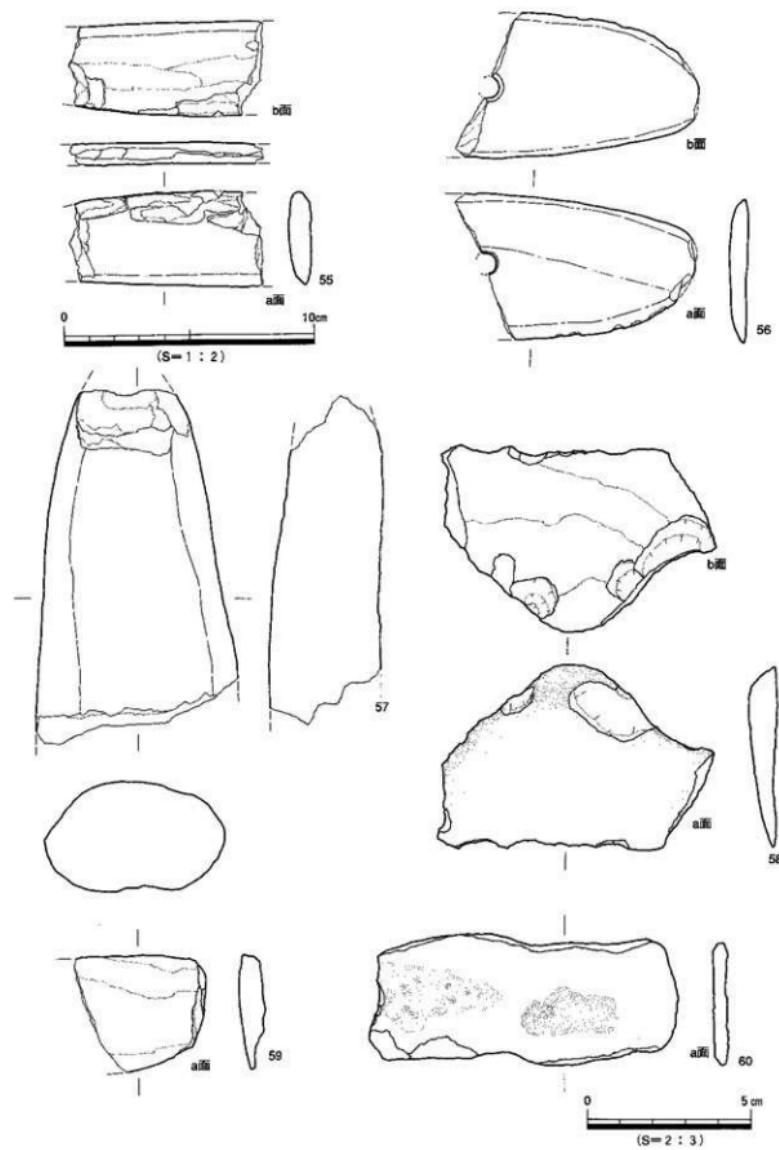
の調整は、屈曲部から上はヨコナデ、下はヨコ方向の条痕である。内面はナデ仕上げになる。外面上は斜格子状の細沈線文が施される。54は浅鉢である。口縁端部にはリボン状突起が付され、さらに口縁端部には全面に刻みが施される。

55~60は石器である。石器には鎌・石庖丁・斧・刀器のほかに未成品がある。55は石鎌で、緑色片岩製。先端部と基部を欠き、全体の1/3程度の遺存である。完成品。刃部はほぼ直線状を呈する。研磨はほぼ全面に施されており、とりわけa面では丁寧になる。そのため同面における刃部の鎌は明確である。刃部は扁両刃で、研磨は背部にまで及んでおり、面が形成されている。56は石庖丁で、緑色片岩製。左半部を欠く。平面形は弧背弧刃形（あるいは杏仁形、紡錘形）を呈する。背部弧度が刃部弧度より弱い。刃部は扁両刃である。器面はa面の背部付近が研磨によって研ぎ落とされており、稜線をもつ。57は伐採斧。刃部と基礎の一部を欠く。平面形は基部幅が狭く、刃部に向かって幅が広い長台形状を呈し、横断面は扁楕円形をなす。製作段階の打裂痕、敲打痕が粗く残り、器面の研磨が充分になされていない。58はスクレイパーの完成品。a面は自然面で覆われる。両側部は切断面である。刃部の作り出しは粗く、細部調整は入念ではない。59と60は石庖丁未成品で、緑色片岩製。59は左半部を大きく欠く。a面は粗削時の剥離面で構成され、b面は自然面が広く残置する。右側部には研磨が施されることから、長方形を指向していることがうかがえる。60は完成品か。a面には自然面が残置し、b面は粗削時の剥離面で構成される。最大厚0.48cmを測る。なお、a面には細かな敲打痕が認められるが、器面の凹凸を減ずるためか、穿孔に伴うものは判然としない。

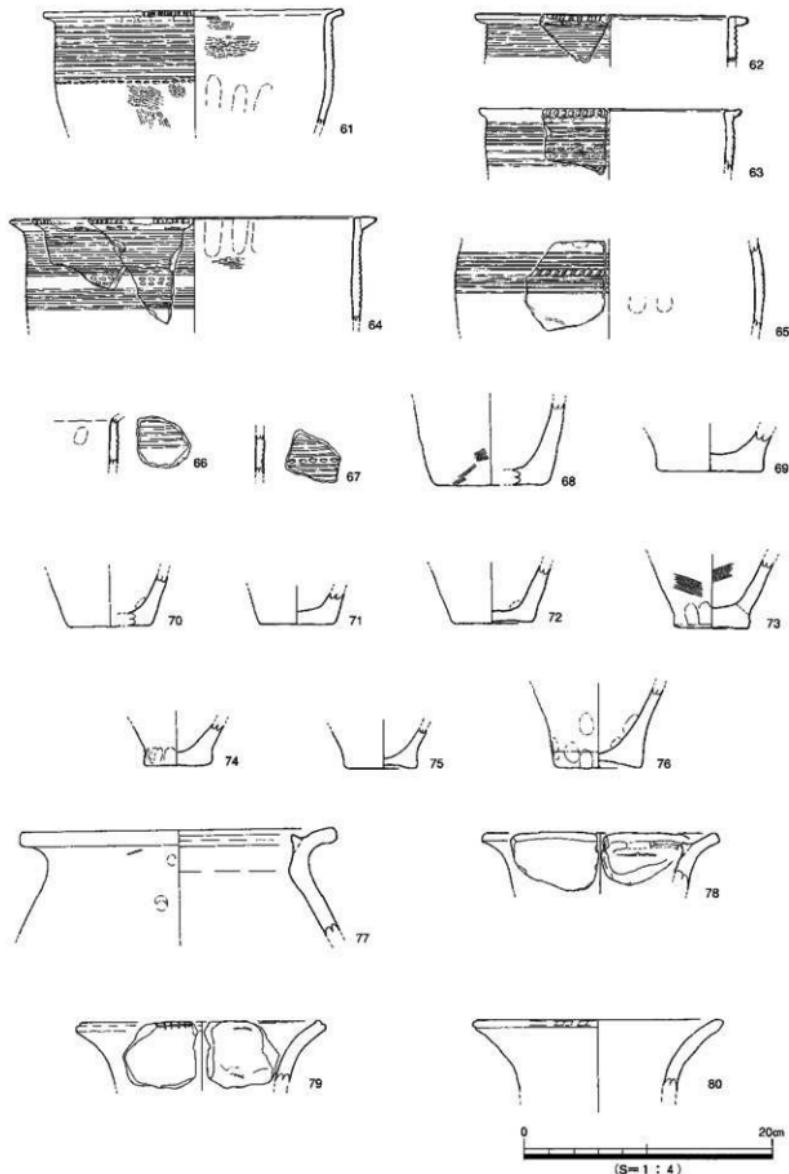
埋土②出土遺物（61~122）（第33~37図、図版14~15） 土器と石器が出土している。土器には壺・壺・鉢・高壠等がある。

61~76は壺で、口縁部の成形手法が折り曲げによるもの（61）と、粘土紐の貼り付けによるもの（62~64）とがある。いずれも口径が20~30cmにおさまる中型品になる。口縁端面には刻日を施す。胴部上半には沈線文を6~11条施し、さらに刺突文を施す。61は胴部上半にやや張りをもち、口縁部は強く折り曲げられ、逆L字状に近い形態をもつ。多条の沈線文の下位には刺突文が1段施される。62~64は胴部上半が直立し、粘土紐が口縁部に接して貼り付けられるものである。63~65は多条の沈線文帯の間に刺突文が施される。66は口縁端部を欠く。口縁部直下には沈線文4条を施す。68~76は底部である。平底とわずかに上がる底部が多い。底径が8cmを超えるものは厚い平底、底径が5~7cmのものは薄い平底もしくは上げ底になる傾向がある。76は上げ底で、やや新しい形態を呈している。

77~108は壺である。77は短く外反する口縁部をもつもので、口縁部内面には凸帶1条をもつ。復元口径値は25cmを測る。78~81は筒状の長い口頭部をもつものである。81は口頭部が長く、外傾度が

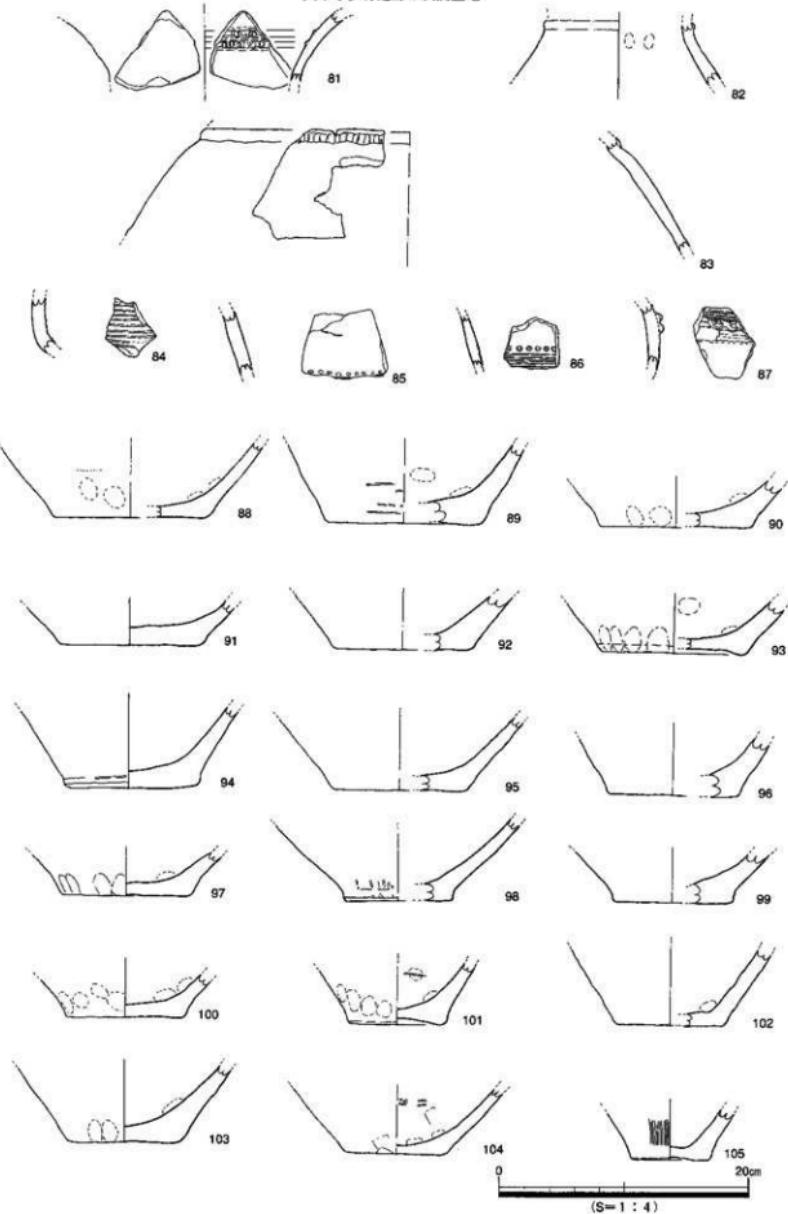


第32図 SR 201埋土③出土遺物実測図(4)

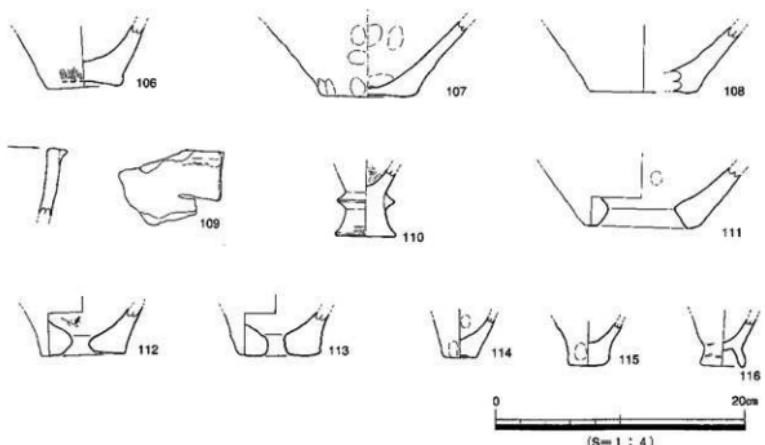


第33図 S R 201埋土(2)出土遺物実測図(1)

久米才歩行遺跡4次調査地



第34図 SR201埋土②出土遺物実測図(2)



第35図 S R 201埋土②出土遺物実測図(3)

強くなる。口縁部内面には凸帯を2条もち、刻目を施す。84は筒状の長い口頭部をもち、85と86は胴部上半に加飾が施される。87は胴部中位付近に最大径をもつもので、凸帯を2条もち、上位の凸帯には指頭押圧後上下2段に刺突文を施す。なお、凸帯は沈線を施した後に貼り付けている。88~108は底部で、底径が大きいものには厚い平底が多く、小さいものには平底で厚いものと薄いものとがある。

109は鉢である。口縁部に接して粘土紐が貼り付けられ、大型品になる。胎土は混和剤が少なく、精製され、淡乳褐色を呈する。

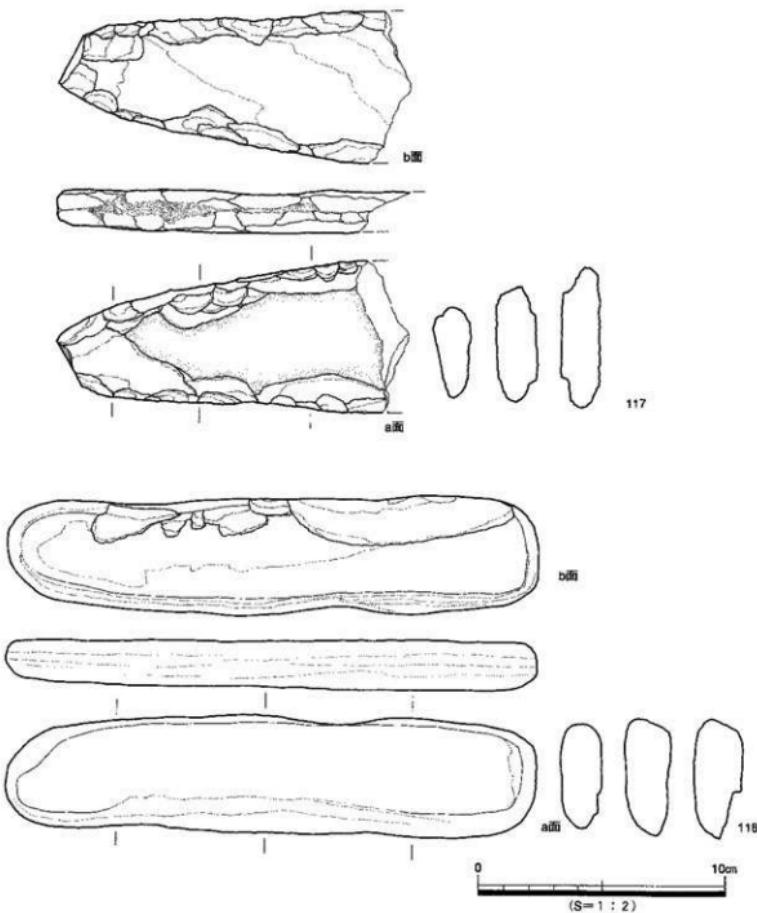
110は高壺で、脚部は低く、中実の台形状を呈す。壺部と脚部の境界には三角形凸帯を施す。

111~113は、いわゆる「コシキ」用の土器である。111は壺の底部、112と113は壺の底部を転用している。焼成後に穿孔がなされ、112と113は外側からの片面穿孔になる。

114~116はミニチュア品で、114と116は壺、115は壺のミニチュアである。114はわずかな上げ底で、115は器壁が厚く、立ち上がりをもつ。116はくびれの上げ底で、底部の内外面には煤が付着する。

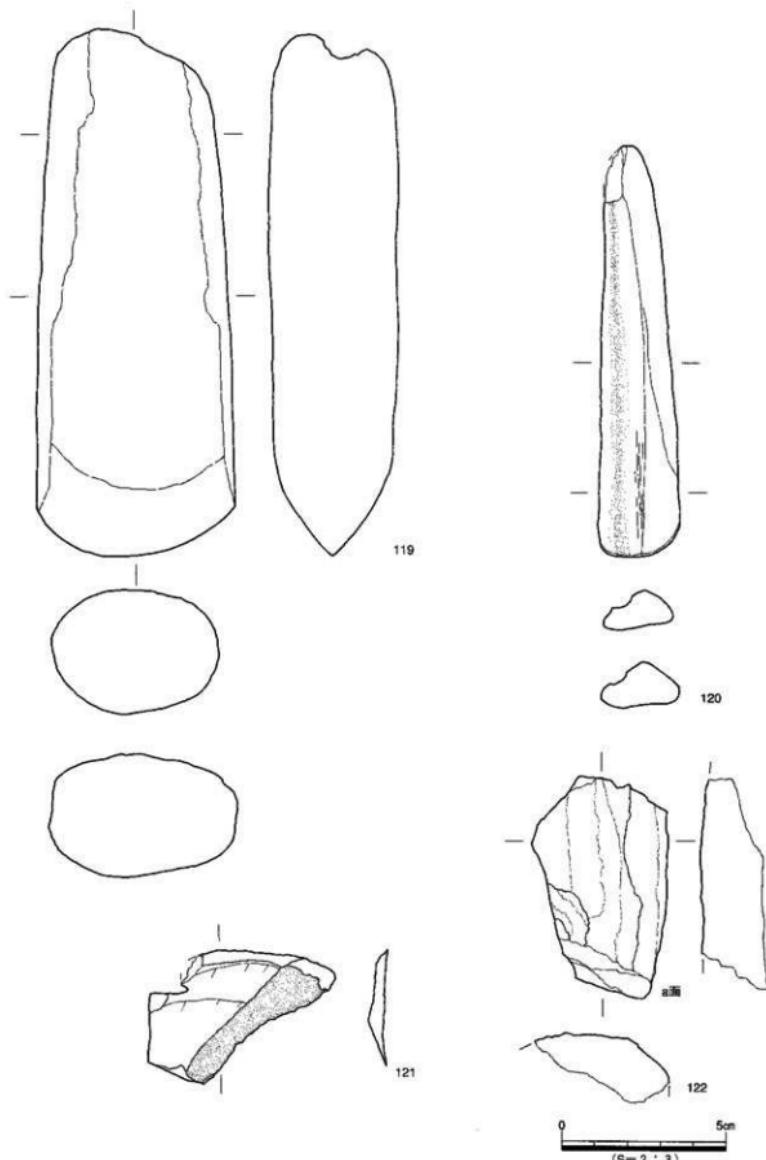
117~122は石器である。石器には鎌・斧・砥石・剥片がある。

117と118は石鎌で、緑色片岩製。いずれも未完成品。117は打裂段階の資料で、a面には自然面、b面には粗削時の剥離面が広く残置し、先端部の端面には自然面が残る。打裂時の調整剥離は背・刃部に施される。背部にはさらに敲打が局部的に施され、面取りが意識されている。刃部はやや内湾すると考えられる。118はやや長い礫を素材とした打裂段階途中の資料である。粗削段階を経ず、獲得した原材に直接打裂を行っている。b面の下端に打裂時の調整剥離が施される。調整剥離は基部から先端へ向かって施される。119は伐採斧。ほぼ完存品。基部幅が刃部幅よりもやや狭い。基部は不整形で、刃部は凹刃である。横断面形は、基部側では楕円形に近く、他では身彫れた長方形に近い形態となる。両側部には敲打痕が残る。器面の研磨は上半（基部側）に比べ下半（刃部側）が入念になさ



第36図 S R 201埋土(2)出土遺物実測図(4)

れ、特に刃部付近は「寧である。石の節理面は側面でみられ、縦方向になる。120は砥石で、礫を素材とし、上面を機能面として使用する。使用痕は上面右半部が幅広く、左半部は幅狭い。法量と形態から手持ち砥として扱われていた可能性がある。121はサヌカイト製の剥片で、左上端部は新しい欠損である。右側部には自然面が広く残置する。最大厚0.61cmを測る。122は器種を特定出来ない石器である。緑色片岩製。a面が自然面で覆われる。



第37図 S R 201埋土②出土遺物実測図(5)

埋土①出土遺物（123～237）（第38～44図、図版16～18） 本層からは、弥生時代前期・中期・古墳時代後期・古代・中世の各期の遺物が出土した。

123～177は弥生時代前期の遺物である。土器には壺・壺・鉢がある。

123～140は壺で、口縁部の成形手法が折り曲げによるもの（123～125）と、粘土紐の貼り付けによるもの（126～130）とがある。口径が20cm前後の中型品になる。口縁端面には刻目はみられない。胴部上半には沈線文を4～13条施し、さらに刺突文を施すものもある。123は胴部上半にやや張りをもち、口縁部は短く折り曲げる。7条の沈線文帯と6条の沈線文帯の下位には、それぞれ刺突文が1列施される。126～130は粘土紐が口縁部に接して貼り付けられるもので、胴部上半は直線的に立ち上がる。126は胴部上半に沈線文7条以上、127と128は沈線文4条を施す。129は沈線文5条の下位に刺突文を施す。130は多条の沈線文の下位に竹管文を1組施す。131～134は胴部片で、多条の沈線文と刺突文を施すものがある。135～140は底部で、平底が多い。135は底径が8cmを超え、厚い平底を呈する。138はわずかな上げ底で、立ち上がりをもつ。

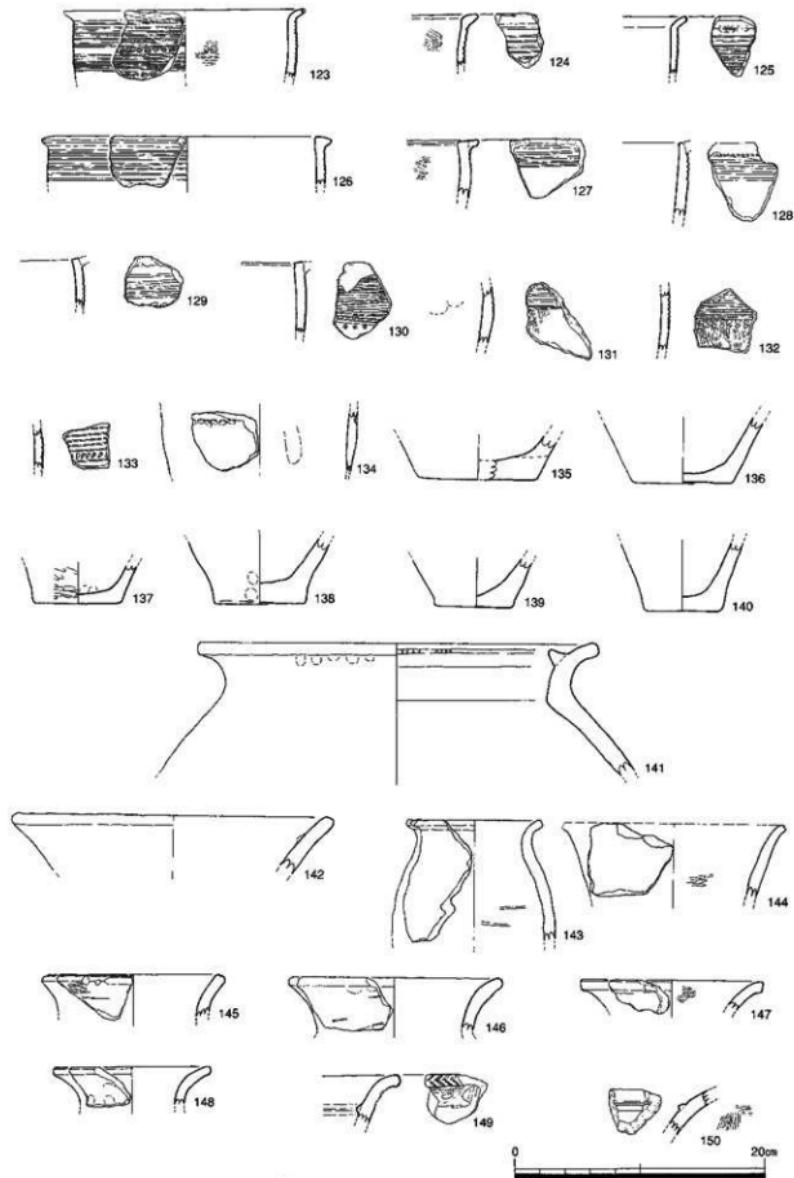
141～156は壺である。141と142は短く外反する口縁部をもつものである。141は口径が30cmを超える大型品で、口縁内面には凸帯1条をもち、凸带上には刻み目をもつ。143は短い口頭部をもつ。144～150は口縁部片である。144は口頭部が長く直立気味に外傾し、口縁端部が短く外反する。145～148は口径が12～17cmを測る中・小型品になる。148は口頭部が太く、やや長い。149と150は口縁内面に凸帯1条をもち、149は口縁端面に羽状文を施す。151と152は筒状の長い口頭部をもつもので、頭部下半には沈線文を施す。152は沈線文の下位に凸帯があり、凸带上には指頭押圧後に刺突文を上下2段に施す。153～156は胴部の中位が最大径となるものである。153は貝殻腹縁による施文をもつ。沈線文3条は2段に施し、沈線文帯の上位には山形文、下位には斜位の直線文と弧文が組み合う。154は頭部下半に凸帯をもち、凸带上には刻み目をもつ。155は凸帯2条をもち、凸帶の上位には多条の沈線文が施される。凸帶の下位はヨコ方向のヘラミガキ調整になる。

157と158は鉢である。157は口縁部がゆるやかに外反し、口径は17.2cmに復元される。158は口縁部が貼り付けによる成形技法をとり、口縁部に接して断面方形の凸帯を貼り付ける。

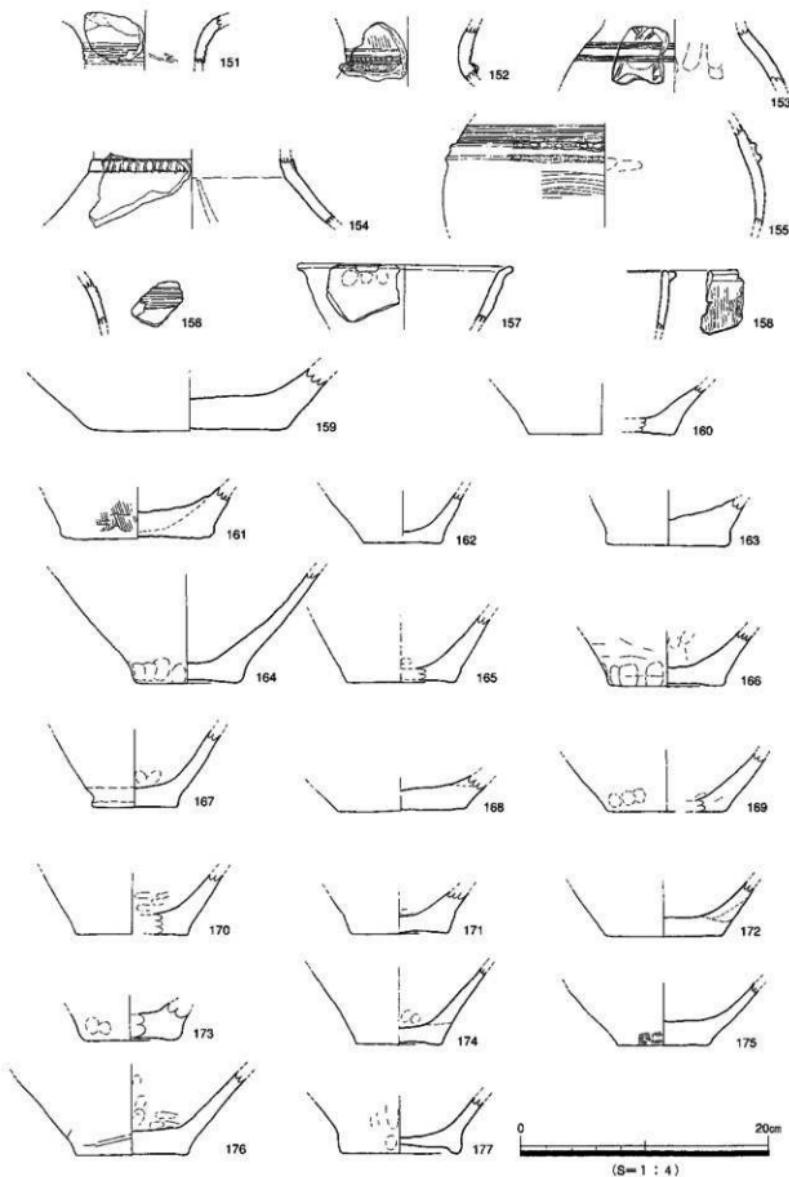
159～177は壺の底部である。159～162は立ち上がりをもつ平底で、159は大型品、160と161は中型品、162は小型品になるであろう。163～168には立ち上がりをもつ平底と、わずかな上げ底がみられる。167は底部と胴部の境界が強くヨコナナデされたため括れる。169～177には低い立ち上がりの平底、わずかな上げ底、顕著な上げ底のものがある。

178～194は弥生時代中期の遺物で、土器には壺・壺・高坏がある。

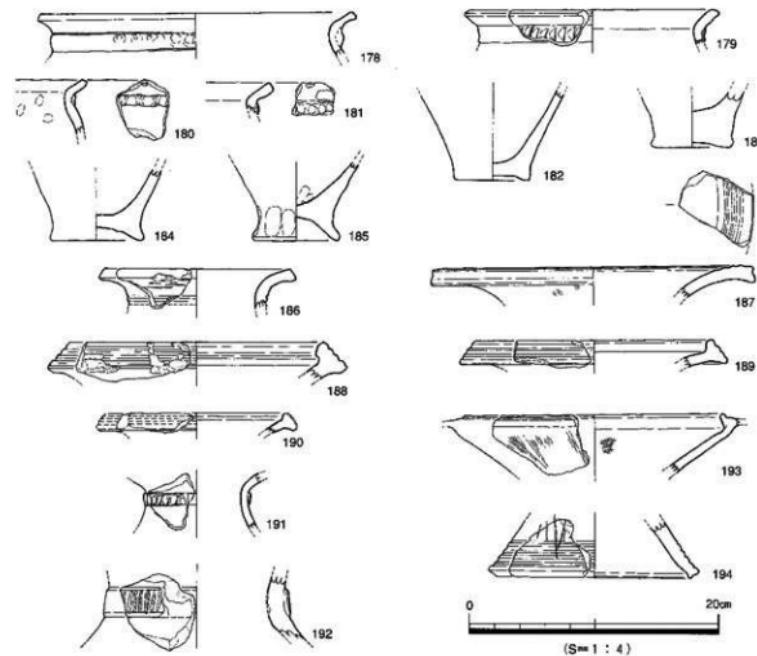
178～185は壺である。178～181は口縁部で、折り曲げにより成形する。口縁端部には刻み目は施されない。頭部には凸帯が1条施され、押圧がみられる。182は胴部が長胴化の傾向を示し、器壁は薄く、底部は上げ底になる。183は厚手のやや上がる底部である。184と185は薄手の上げ底である。186～192は壺である。186は口縁部が短く外反し、端部はやや下方に突出する。筒状の頭部には多条の沈線文が施される。187は口頭部が長く、外傾度が強い。口径が26cmに復元される中型品である。口縁端部は凹線状の強いナデが施され、やや垂下する。口縁内面に削り出し状の凸帯を3条施す。188と189は口径が20cm前後の中型品、190は口径14.4cmの小型品である。口縁端部は上下に拡張され、3～4条の凹線文状の施文がみられる。191と192は頭部に凸帯を施すものである。



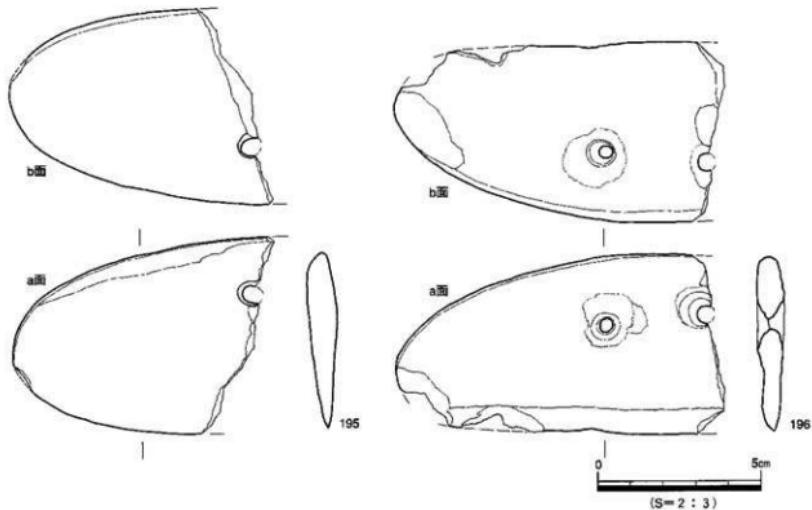
第38図 S R 201埋土①出土遺物実測図(1)



第39図 S.R. 201埋土①出土遺物実測図(2)

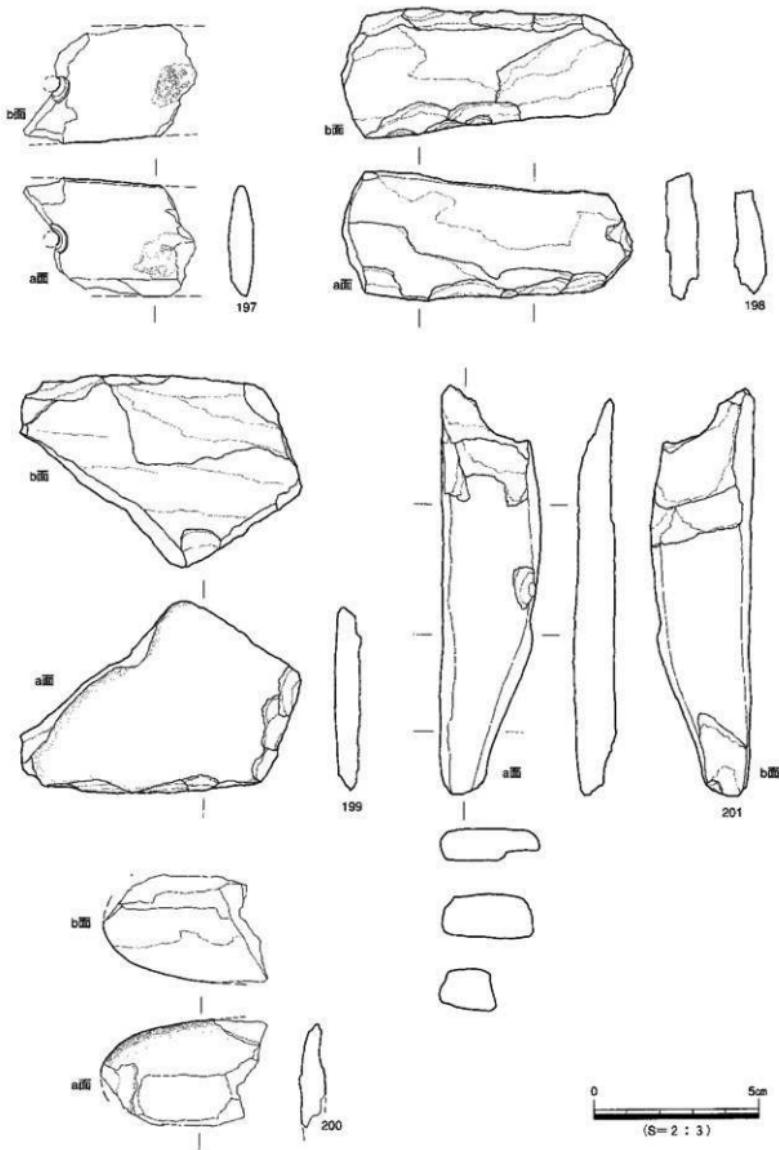


0 20cm
(S=1:4)

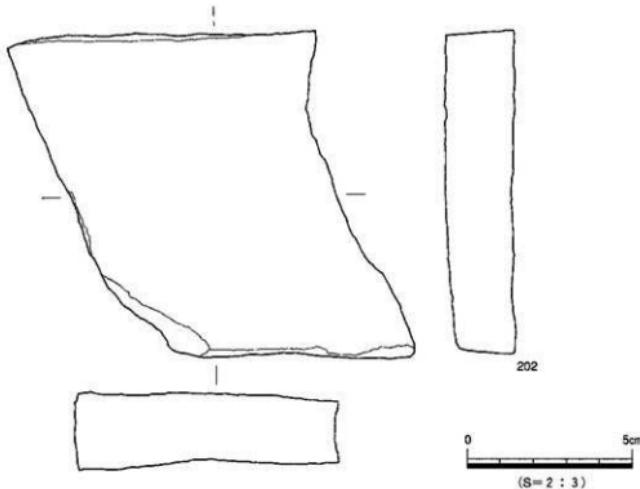


0 5cm
(S=2:3)

第40図 S R 201埋土(①出土遺物実測図(3)



第41図 S.R.201埋土①出土遺物実測図(4)



第42図 S R 201埋土①出土遺物実測図(5)

193と194は高坏である。193は坏部で、体部が直線的に外側に開いて立ち上がり、口縁部は内傾し短く立ち上がる。口縁端部からやや下がった外面には、沈線文が1条施される。内外面ともに丁寧なナデ調整による。口縁部に接して受け部が水平にのびる。194は脚部片で、据部はあまり開かない。据部付近には5条の凹線文が施され、その後、細沈線文が鋸歯状に巡る。据端部は強いナデによりやや凹む。内面は磨滅が著しい。

195~202は石器である。石器には石庵丁・敲石・台石がある。

195~197は石庵丁の完成品で、多くは緑色片岩製である。195は右半部を欠き、弧背弧刃形を呈する。刃部は扁両刃である。器面はa面の背部付近が研磨によって研ぎ落とされており、棱線をもつ。196は左端部と右半部を欠く。弧背直刃形（直線刃半月形）を呈する。刃部は扁両刃である。他の石庵丁の石材と比べ、銀色の雲母が含まれているためか、器面の遺存が不良であり、研磨痕の観察は困難である。ただし、a面の刃部には鏽が不明瞭ながら認められる。197は左右を大きく欠く破損品である。198~200は石庵丁の未完成品で、緑色片岩製である。198と199は打裂段階の資料で、198は打裂が進行し、直線状の刃部を作り出す。打裂は比較的大きな剥離となり、両面に粗削時の剥離面が広く残置し、粗削工程によって得られた素材が板状剝片であったことがうかがえる。199は右側部と下端に打裂が施されたものである。a面には自然面が広く残置し、b面には粗削時の剥離面が残る。200は大きく欠けた破損品である。分割された円礫を素材とする。粗削段階で破損し、廃棄されたものであろうか。201は敲石である。緑色片岩製。扁平な礫の上端と下端を機能面とする。202は台石である。完存品。厚さ2cmを測る板石である。使用痕は肉眼観察では顕著に認められない。

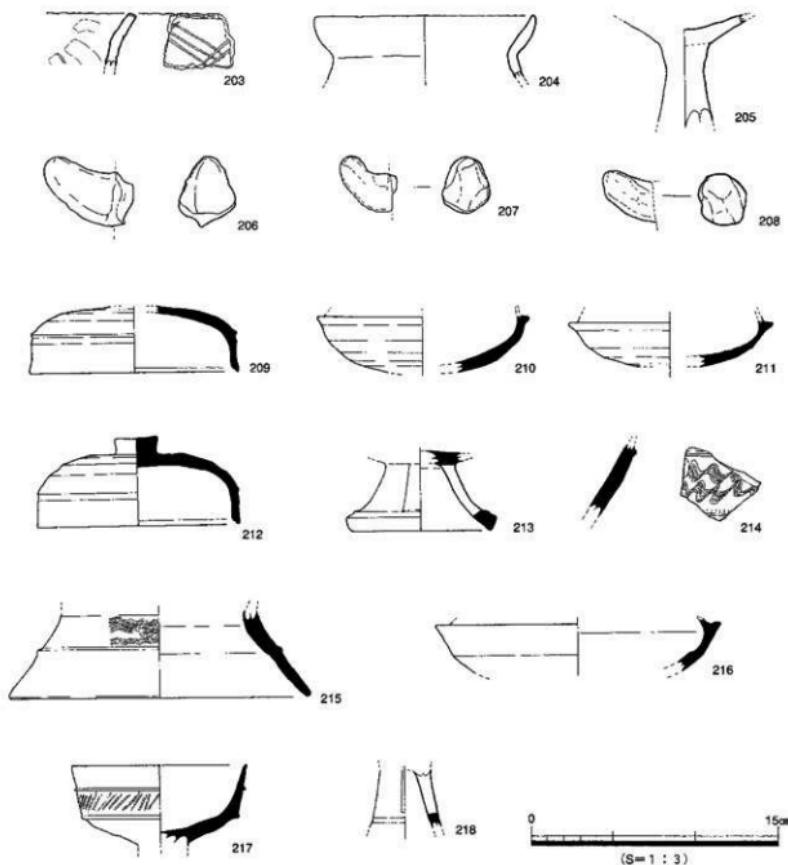
これらの石器は、土器の出土量から弥生時代前中期に帰属する可能性が高い。

弥生時代遺物以外には、縄文土器と、古墳時代～中世までの土器が少量ある。

縄文土器（203） 203は深鉢で、胴上半部に施文をもつ。

古墳時代土師器（204～208） 土師器には壺・高壺・瓶の把手がある。

古墳時代後期の須恵器（209～218） 須恵器には壺蓋・壺身・高壺・器台等がある。209は壺蓋で、天井部と口縁部を分ける稜は鈍い。口縁部は垂下し、端部は内傾する。口径12.4cmを測る。210と211は壺身である。いずれも底部と口縁部の立ち上がりを仄く。受け部はほぼ水平に短くのびる。212と213は有蓋高壺である。212は蓋で、つまみ部は天井がわずかに凹む。外面の稜は鈍く、口縁部は段



第43図 S R201埋土①出土遺物実測図(6)

をなす。天井部外面はヘラ削りが施され、その範囲は天井部の2/3をこえる。213は脚部である。透孔は長方形を呈し、3方向につく。214と215は器台である。214は坏部で、低い突帯を付し、9条1単位の櫛描波状文が2段施される。209~215は5世紀末~6世紀初頭。216は坏身で、口縁部の立ち上がりを一部欠く。受け部はやや上方に短くのびる。217は無蓋長脚高坏の坏部である。低い突帯を2条付し、突帯間に刺突列点文が施される。218は長脚高坏の脚部である。透孔は長方形で2段2方向につく。216~218は6世紀。

古代の遺物（219~235）須恵器、陶器、磁器がある。

219は坏蓋で、天井部には宝珠様のつまみ部をもつ。220~225は坏身である。220~223は口径9~13cmを測り、立ち上がりは内傾し、端部がつまみ上げられる。224は坏部が深く、受け部はやや上方に短くのびる。225は底端部のやや内側に、高台が「ハ」の字形に付く。226は長頸壺で、頸部が上方に開く。227は瓶で、肩が張り、屈曲部から上の外面は回転ナデ、下は回転ヘラ削りになる。228は直口壺で、口縁部が短く直立し、肩は張り、把手が4方向に付く。229と230は広口壺である。229は口縁部は大きく外反し、端部は下方に拡張する。他の須恵器と色調が異なり、赤褐色を呈する。230は口径8.4cmで、小型品になる。頸部は外傾気味に立ち上がり、口縁外面がわずかに肥厚する。231は高坏で、脚裾部片である。裾部が大きく外に開き、裾端部は下方にわずかに突出する。232と233は壺である。232は口縁部は長く、やや内湾気味に直立する。太い沈線文を2条付し、沈線文間に櫛状工具による斜位の直線文が施される。233は頸~胴部片である。胴部内面は同心円文の叩きの後、軽いナデが施される。

234と235は碗である。234は綠釉陶器で、外底部に接してやや「ハ」の字形に開く高台を貼付する。235は白磁で、外底部に接して、直立する高台はケズリ出される。

中世の遺物（236・237）いずれも偏前焼きのすり鉢で、厚みのある平底をもつ。このほかに土師質の一足付羽釜の脚部片が出土している。

時期：出土遺物から、埋土④~②は弥生時代前期末に堆積した土層であり、埋土①は中世までに堆積した土層である。

(2) 古墳時代

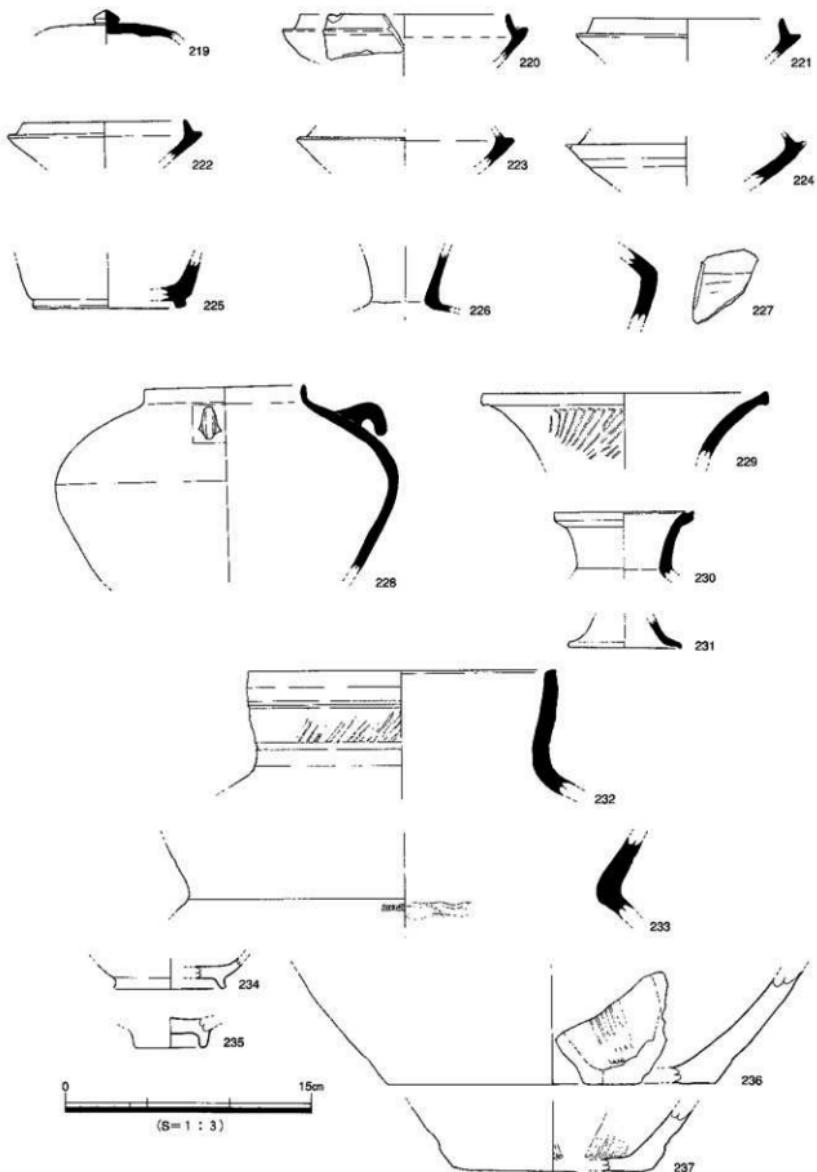
S X 101（第26・45図）

I区北端中央部のA 2・3区に位置する。遺構の北半部は調査区外へ続く。平面形態は不整形を呈している。規模は東西3.4m、南北1.6m、深さは検出面から40~50cmを測る。横断面形態は逆台形状を呈している。埋土は2層に分層できた。上層はオリーク黒色土（5Y3/1）で硬くしまっている。下層はオリーク黒色土に黄色土（2.5Y8/6）のブロックを多量に含む。掘り方は東側はしっかりとしいるものの、西はなだらかで不明瞭となる。遺物は各層から弥生土器、土師器、須恵器が出土している。なお、いずれも破片であり、弥生土器と土師器の器面は磨滅が著しい。須恵器には、坏身・坏蓋・高坏・長頸壺・壺がある。

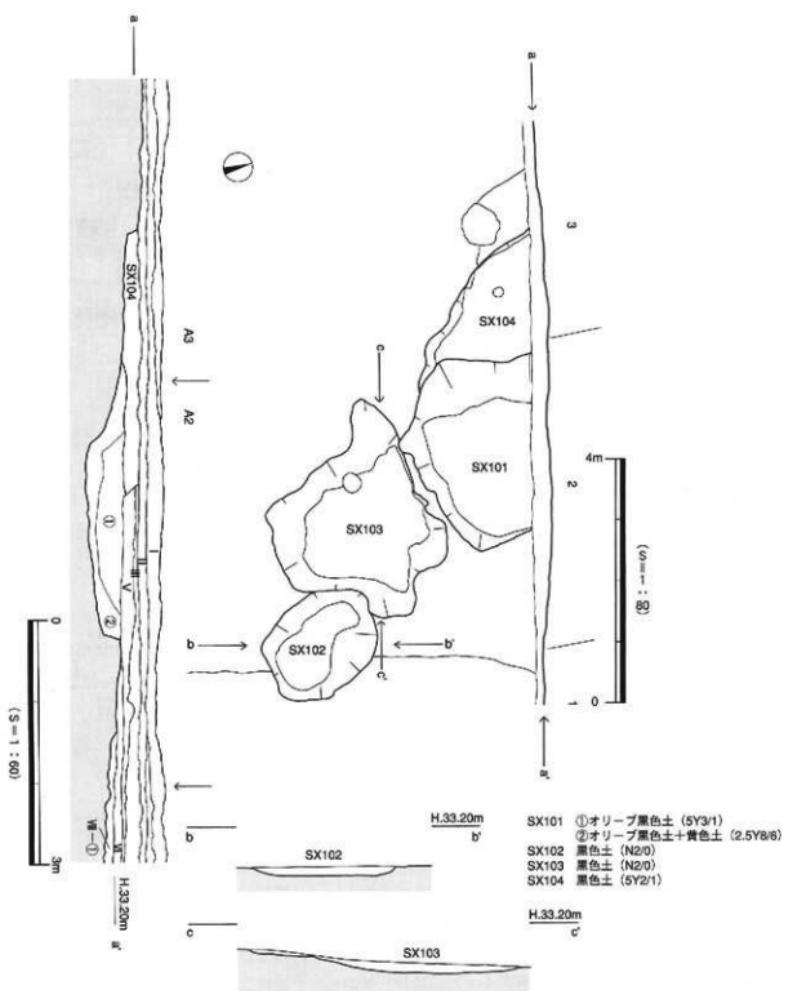
出土遺物（238~249）（第46図、図版18）

238~240は弥生土器である。238と239は壺で、238は頸部下端に断面が台形状の凸帯を貼付する。239は厚手の平底になる。240は鉢で、やや厚手の上げ底をもつ。

久米才歩行遺跡 4 次調査地



第44図 SR 201埋土①出土遺物実測図(?)



第45図 SX101~104測量図

241~249は須恵器である。241は壺蓋の口縁部片で、口縁部は垂下し、端部はやや内傾する。242~244は壺身の口縁部片で、立ち上がりはやや内傾し、受部がほぼ水平に短くのびるもの（242・243）と、上方へのびるもの（241）がある。245と246は高壺である。245は短脚で、脚柱部はゆるやかに外反して開く。脚端は上方に突出する。247と248は長頸壺である。247は胴部最大径の位置に凹線が1条巡る。248は胴部はやや肩の張る球形を呈す。肩部には凹線2条を施し、凹線間に刺突絞線文がみられる。249は甕の口縁部片である。

時期：遺物から6世紀末とする。

S X102（第26・45図）

I区北東部のB2区に位置する。S R101と一部重複するが、切り合い関係は判然としなかった。平面形態は不整形を呈し、明確ではない。規模は東西1.7m、南北1.8m、深さは5~9cmを測る。埋土は黒色土（N2/0）の單一層である。遺物は土師器と須恵器とが出土したが、図化できるものはない。

時期：時期を特定する有効な遺物はない。遺構の配置と埋土からS X101に近い時期を想定し、6世紀末とする。

S X103（第26・45図）

I区北部のA・B2区に位置する。平面形態は不整形を呈する。規模は東西2.4m、南北2.7m、深さ15cmを測る。横断面形態は浅いU字形を呈する。埋土は黒色土（N2/0）の單一層であった。遺物はわずかに弥生土器、土師器、須恵器の碎片が出土したにとどまる。図化できるものはない。

時期：時期を特定する有効な遺物はない。遺構の配置と埋土からS X101に近い時期を想定し、6世紀末とする。

S X104（第26・45図）

I区北壁中央部のA2・3区に位置する。円形の東半部は後世の削平のため遺存していない。遺構の北半部が調査区外に続くことから正確な規模は測定できない。S X104はS X101を切って覆っている。平面形態は円形を呈するものと考えられる。規模は推定直径3.4mと考えられ、深さは15~20cmを測る。埋土は黒色土（5Y2/1）の單一層で、硬くしまっている。遺物は弥生土器、土師器、須恵器の破片が出土した。土師器は器面の磨滅が著しい。

出土遺物（250~252）（第46図）

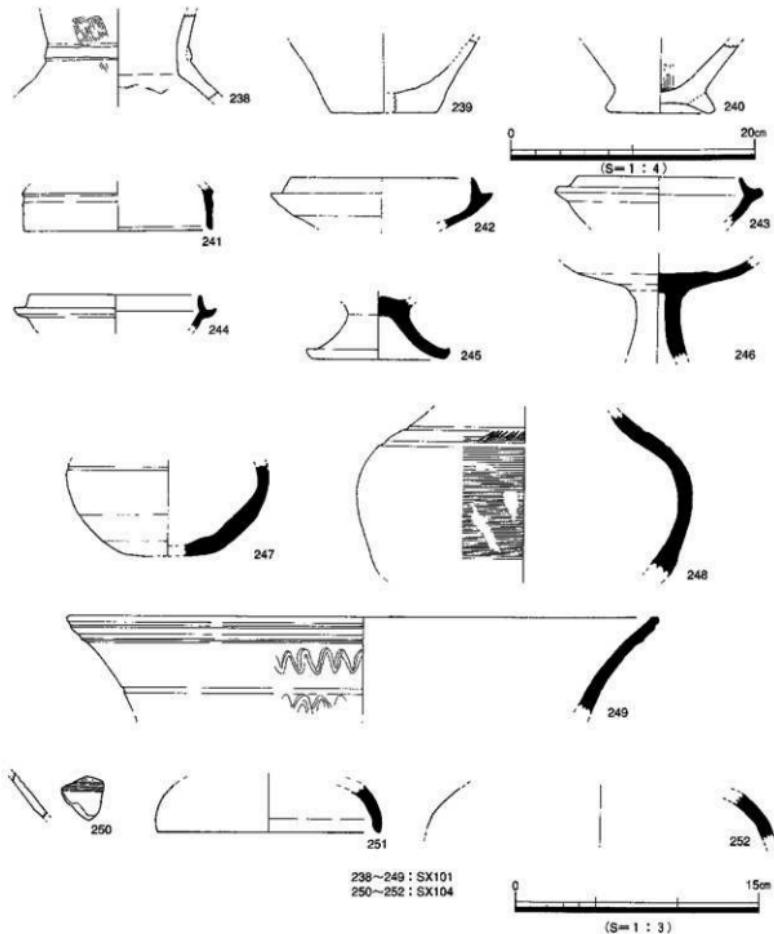
250は弥生土器である。小型壺の胴上半部片で、沈線文3条を施す。

251と252は須恵器である。251は壺蓋で、口径13.4cmに復元される。口縁部は丸みをもちながら垂下し、口端部を丸くおさめる。252は壺で、肩が張る器形になる。外面にはわずかに自然軸がみられる。

時期：出土遺物は少なく、小片であることから、時期を特定する有効な遺物とはいえない。I区北壁ではS X104はS X101を切ることが観察されることから、S X101に後続するものである。ただし、埋土が類似することから、S X101と大差ない時期と想定し、6世紀末とする。

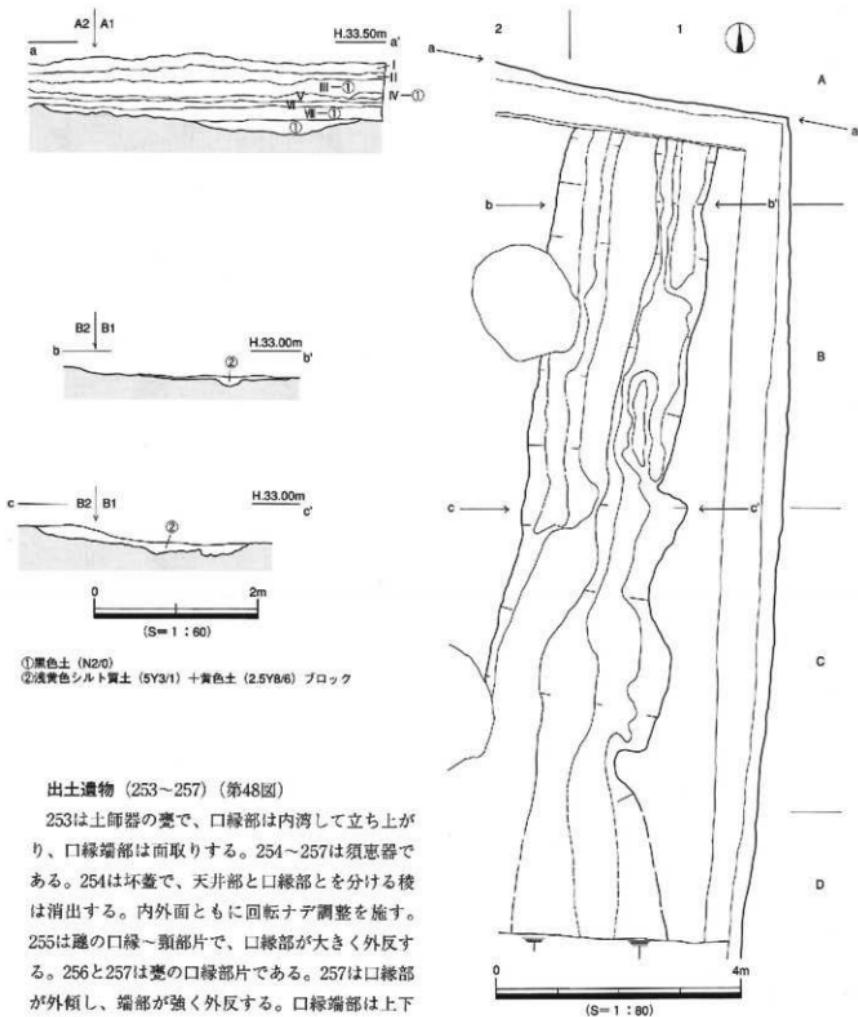
S R101（第26・47図）

I区東端のA~C1・2区に位置する。流路の北端は調査区外へ続き、南端は段丘の落ちにあたる



第46図 SX101・104出土遺物実測図

ため、途切れている。規模は検出長11.8m、幅3.4~3.8m、深さ20cmを測る。横断面形態は浅いU字形を呈する。埋土上は2層に分層できた。埋土①は黒色土(N2/0)で粘性があり、硬くしまっている。埋土②は浅黄色シルト質土(5Y3/1)で、黄色土(2.5Y8/6)のブロックを多量に含む。遺物は土師器と須恵器が出土したが、その多くは磨滅の著しい小片である。この他、流路の底から多量の川原砾が出土した。川原砾の大きさは拳大である。

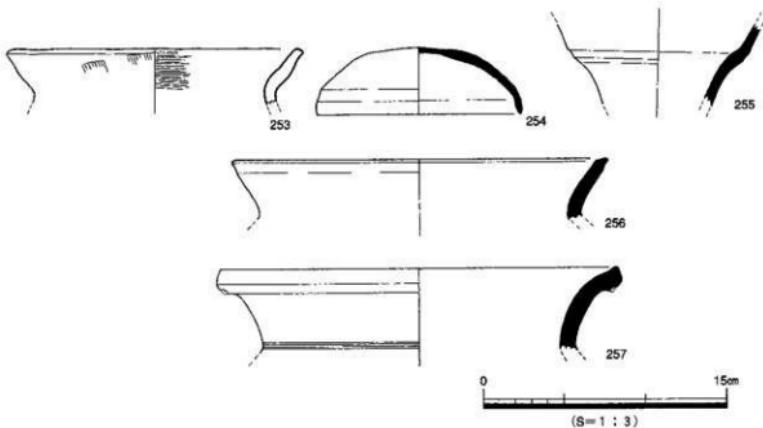


出土遺物 (253~257) (第48図)

253は土師器の壺で、口縁部は内湾して立ち上がり、口縁端部は面取りする。254~257は須恵器である。254は壺蓋で、天井部と口縁部とを分ける棱は消す。内外面ともに回転ナデ調整を施す。255は壺の口縁~頸部片で、口縁部が大きく外反する。256と257は壺の口縁部片である。257は口縁部が外傾し、端部が強く外反する。口縁端部は上下に拡張している。

時期：出土遺物から、6世紀末～古代に埋没したものとする。

第47図 SR 101測量図



第48図 S R101出土遺物実測図

(3) 中世

掘立1 (第26・49図)

I区中央部のB・C2・3区に位置する。梁間2間、桁行3間の南北に細長い建物で、S P 9・15・17~20・27~29の9基を柱穴として構成する。規模は、梁間の全長が3.5~3.9m、桁行6.1mを測る。柱穴の平面形態は円形、深さは5~42cmを測る。S P 27~29は後世に削平され極端に浅く、S P 9・29間の柱穴は削平により消去する。柱穴の埋土は褐灰色土(10YR 5/1)を基調とし、極暗赤褐色土(2.5YR 2/4)の粒が混じる。柱痕は検出されなかった。建物の南東部に位置する柱穴(S P 19・20)からは柱を支えるための基底石(根石)が検出された。遺物は、S P 19からは土師器の三足付き羽釜と須恵器の破片、S P 20からは須恵器片が出土した。

出土遺物 (第49図)

258はS P 20から出土した須恵器の壺である。球形を呈し、外面には回転カキメ調整を施す。

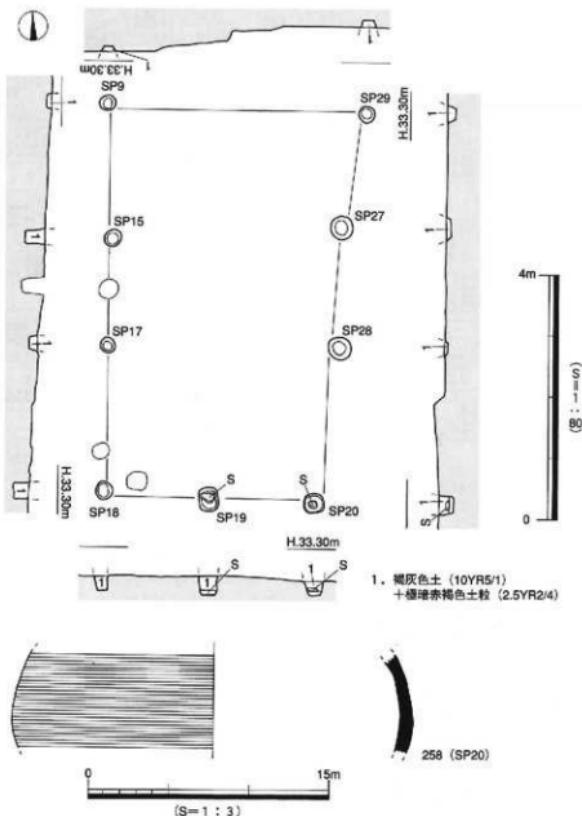
時期：出土遺物は、古い時代のものが柱穴の埋没時に流入したと判断される。柱穴の埋土と配置から中世とする。

S E 101 (第26・50図)

I区西半部のB 3区に位置する。平面形態は円形を呈する。規模は直径1.8mを測る。検出面から深さ90cm掘り下げたところ、著しい涌水が認められた。壁面の崩れる可能性が生じたため、以下の掘り下げは実施しなかった。断面形態は二段掘り状を呈し、検出面から20cmまでは逆台形、ここから下部は垂直に掘り下げられている。埋土は、中央部が褐灰色土(10YR 5/1)、周囲は褐灰色土(10YR 5/1)に砂礫が混じる。遺物は土師器と須恵器の破片、サヌカイトの剥片が出土した。

出土遺物 (第50図)

259は①層の上部から出土した須恵器の壺蓋である。天井部が比較的高く、かえりは口縁端部より下方にのびる。天井部外面には回転ヘラ削りを施す。



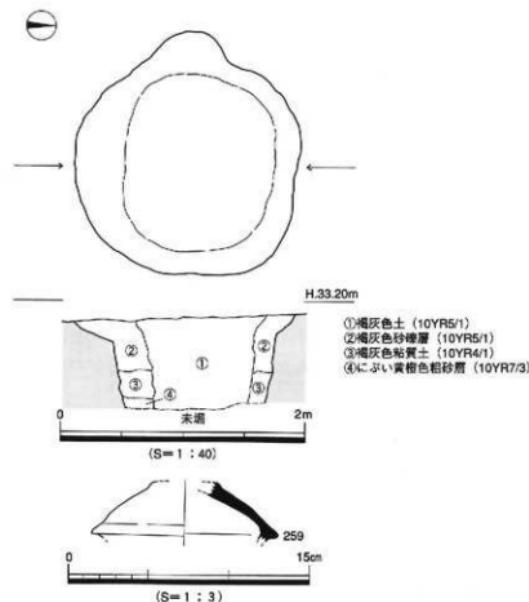
第49図 掘立1測量図・出土遺物実測図

時期：遺物（259）は、井戸の埋没時に古い時代の土器が流入した可能性が高い。よって、井戸の埋土と配置から中世に比定しておく。

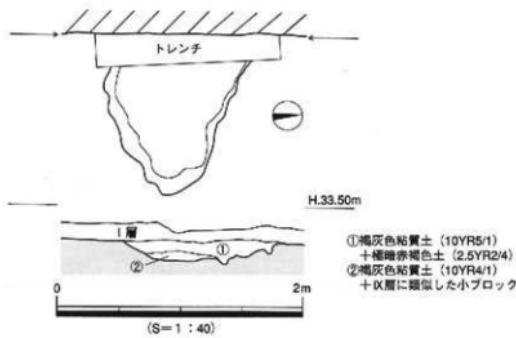
SK 102 (第26・51回)

I区北西部のA・B 4区に位置し、西端は調査区外へ続く。平面形態は不整形を呈する。規模は、東西1.3m、南北1.3m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形を呈する。埋土は2層に分層できた。上層は褐灰色土（10YR 5/1）を基調とし、極暗赤褐色土（2.5YR 2/4）の粒が混じる。下層は上層よりも淡い色調で硬くしまっている。遺物は土師器と須恵器の碎片が出土したが固化できるものはない。

時期：時期決定に有効な遺物がない。埋土から中世に比定しておく。



第50図 S E 101測量図・出土遺物実測図



第51図 S K 102測量図

SK103 (第26・52図)

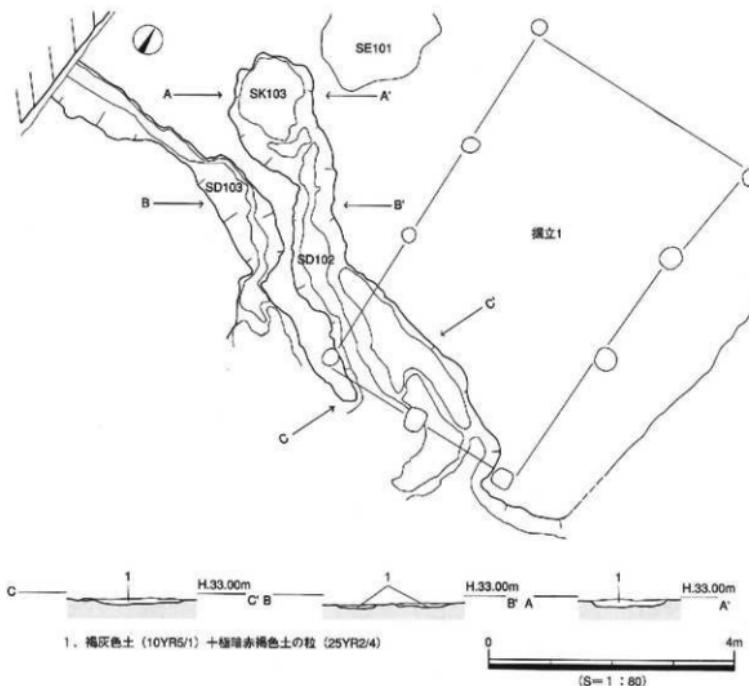
I 区西部の B 3・4 区に位置する。SE101 の南に隣接し、SD102 の延長上にある。平面形態は不整形を呈する。規模は東西 1.3m、南北 1.5m、深さ 10cm を測る。横断面形態は浅い U 字形を呈する。埋土は褐色土 (10YR 5/1) を基調とし、極暗赤褐色土 (2.5YR 2/4) の粒が混じる。遺物は土師器と須恵器の破片が 1 点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期決定に有効な遺物はない。埋土から中世に比定しておく。

SD102 (第26・52図)

I 区南部の C 2・3 区に位置する。北西から南東に走り、東端では南に屈曲し、段丘の落ちでは途切れる。溝の北西端は SK103 に接続する。規模は検出長 7m、幅 0.5~0.8m、深さ 4~8cm を測る。断面形態は U 字形を呈し、埋土は褐色土 (10YR 5/1) を基調とし、極暗赤褐色土 (2.5YR 2/4) の粒が混じる。遺物は土師器と須恵器の破片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期決定に有効な遺物はない。埋土と配置から中世に比定しておく。



第52図 SK103・SD102・103測量図

S D103 (第26・52図)

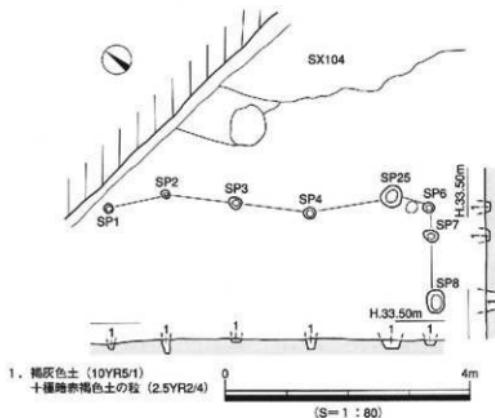
I区南半部のC3・4区に位置する。ほぼSD102に並行する。溝の西端は調査区外へと続く。規模は検出長5.7m、幅0.3~0.9m、深さ1~5cmを測る。埋土は褐灰色土(10YR5/1)を基調とし、極暗赤褐色土(2.5YR2/4)の粒が混じる。遺物は土師器の鉢片が2点出土したにとどまる。炭化しうる遺物はない。

時期：時期決定に有効な遺物はない。埋土と配置からSD102の時期と大差ないものと考えられる。

S A101 (第26・53図)

I区北西部のA・B3区に位置する。SE101の北側に併設された横列である。柱穴はSP1~4・6~8・25の8基で構成され、規模は全長6.8mとなる。柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は直径10~30cm、深さ6~23cmを測る。埋土は褐灰色土(10YR5/1)を基調とし、極暗赤褐色土(2.5YR2/4)の粒が混じる。遺物は出土していない。

時期：時期決定に有効な資料がない。埋土と配置からSE101の時期と大差ないものとしておく。



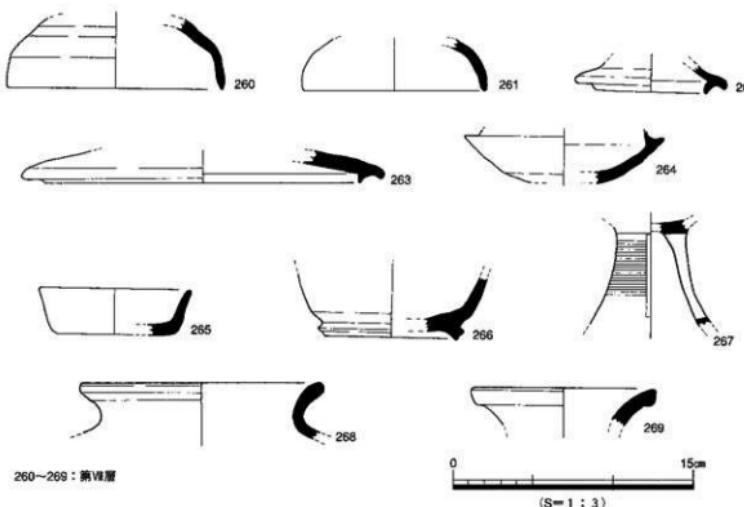
第53図 S A101測量図

(4) 包含層出土の遺物 (第54・55図、図版18)

I区では、第Ⅳ層が遺物を多く包含し、他の層からも遺物がわずかに出土している。

第Ⅶ層出土遺物 (260~269) 遺物はすべてが須恵器である。

260~263は壺蓋で、260は天井部と口縁部を分ける稜は消出し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。262はかえりが口縁端部より下方にのびる。264は壺身で、口縁部の立ち上がりは内傾する。受部は太くやや外方にのびる。265と266は壺身で、265は厚みのある平底になり、口縁部は外方に開く。266は外底部のやや内に「ハ」の字形の高台が貼付する。267は高壺で、透孔は長方形を呈し、3方向につく。268と269は壺である。268は口縁部が短く外反し、口縁端部は丸くおさめる。



第54図 I区包含層出土遺物実測図(1)

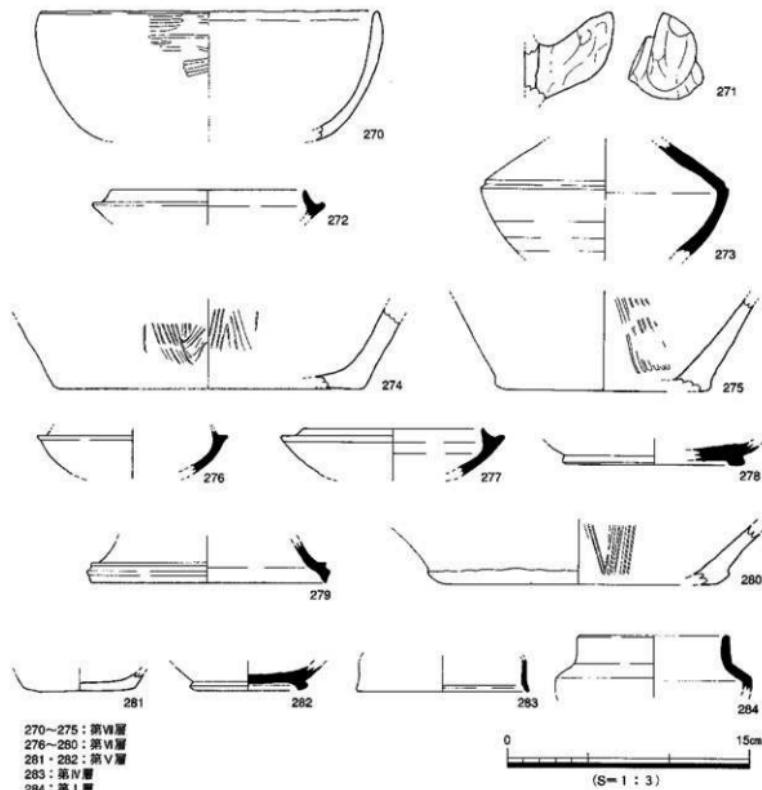
第VII層出土遺物 (270~275) 遺物は土師器、須恵器、陶器がある。270は土師器の碗で、ボウル形の器形をもち、口径が20.1cmになる。外面上半部はヨコ方向のヘラミガキをする。271は瓶の把手である。指頭痕を残し、斜め上方にのびる。272は須恵器の坏身で、口縁部片である。立ち上がりは内傾し、受部は太くやや上外方にのびる。内外面には回転ナデを施す。273は長頸壺で、胴部が扁平で、肩が張り、肩部には凹線文1条を施す。274と275は陶器である。いずれも備前焼のすり鉢の底部で、内面のおろし目は底近くまで施される。

第VI層出土遺物 (276~280) 遺物は須恵器と陶器がある。276と277は坏身で、277は立ち上がりが内傾し、端部は尖る。受部は太く、上外方にのびる。278は坏で、底部に接して、高台が「ハ」の字形に貼付される。279は高坏で、脚部は外反気味に下がり、脚端部付近には凸線を1条施す。280は備前焼のすり鉢で、内面のおろし目は底近くまで施される。

第V層出土遺物 (281・282) 土師器と須恵器がある。281は土師器の皿になる。282は須恵器の坏で、高台が外底部に接して「ハ」の字形に貼付されている。

第IV層出土遺物 (283) 283は須恵器の坏蓋で、口縁部は垂下し、端部が内傾する。口径が10.4cmに復元される。

第I層出土遺物 (284) 284は須恵器の短頸壺で、胴部上半で屈曲し、口頸部は短く直立する。



第55図 I区包含層出土遺物実測図(2)

4. 小 結

本調査では、弥生時代、古墳時代～古代、中世の遺構と遺物を確認した。以下、時代ごとにまとめを行う。

弥生時代

前期末に時期比定される S R201は、土層の状況から埋没当初は水量が豊富であったことが推察される。水量は埋没が進行するに従い、徐々に減少し、湿地状を呈していたとみられた。これは当時の景観を復元する上で、ひとつの参考となるものである。埋土④～②の出土遺物には、当該期の土器と石器がある。これらの遺物には他の時期のものが含まれておらず、短期間の資料といえる。よって、これらの資料を一括して扱い、若干の検討を試みることとする。

(1) 土 器

器種は、甕・壺・鉢・高坏・蓋・その他（ミニチュア等）で構成される。器種構成比は甕（30点／29.1%）、壺（59点／57.2%）、鉢（1点／0.9%）、高坏（2点／1.9%）、蓋（1点／0.9%）、その他（10点／9.7%）の数値を示す。甕と壺が主要器種を占め、鉢・高坏・蓋がわずかに伴う。ここでは主要器種の甕と壺を取り上げ、整理する。

甕には、口縁部を折り曲げることにより形成するもの（甕a）と、口縁端部に接して粘土紐を貼り付けることにより口縁部を形成するもの（甕b）がある。いずれも全体の器形を知り得る資料はない。構成比は、甕a（5点／62.5%）、甕b（3点／37.5%）である。対象となる資料が量的に多くはないので、組成比率をそのまま安易に受け取ることは控えるべきであるが、甕の口縁部形成にaとbのふたつのものがあることは重要である。加飾はすべてに沈線文や沈線文+刺突文がみられ、無文のものはみられない。沈線文のみで構成されるものは、4条か、4条以上である。沈線文+刺突文のものには、8条と9条のものがあり、上から多条沈線文+1段刺突文、多条沈線文+1～2段刺突文+3～5条の沈線文、多条沈線文+1段刺突文+1条沈線文+1段刺突文+2条沈線文がある。上位の施文が多条沈線文であることは共通するが、下位の施文にはバラエティーのあることがわかる。

壺は、完形品ではなく、全体の器形を知り得る資料はない。大型品では、(77) のように口縁部径が広く、短い口頭部をもち、口縁内面に凸帯をもつものがある。中・小型品では頸部に直立化と長頸化がみられる。さらに加飾では(87) のように、貼り付けた凸帯上を指頭押圧後に上下に刻み目を施すものがある。頸頭部の境界や肩部、胴中位にヨコ方向の沈線文が施されるものがみられる。

これらの甕と壺で確認された諸特徴は、当地域の弥生土器編年の前期IVに該当する（梅木 1994）。鉢・高坏・蓋は該当期の器種構成比では低い数値を示すことが指摘されており（梅木 1994）、本例もそれに同調している。その意味においても、本資料は前期IVの典型例となるものである。

(2) 石 器

器種は伐採石斧・石庖丁・石鎌・スクレイパー（不定形刃器）・砥石で構成される。器種構成比（成品）は、伐採石斧（1点／16.6%）、石庖丁（1点／16.6%）、石鎌（1点／16.6%）、スクレイパー（2点／33.3%）、砥石（1点／16.6%）である。いずれも1ないし2点であり、対象となる資料は少ないが、前期IVの石器の器種構成が判明する稀少な資料といえる。

次に各器種の形態を検討する。伐採石斧は、基部幅が狭く、刃部幅の広い長台形状の平面形で、横断面形が扁平な橢円形を呈するもの（57）と、やや基部が幅狭であるが平面長方形に近く、厚みが増し、横断面形は基部側が橢円形、刃部側が身彫れした長方形を呈するもの（119）とがある。これは下條信行氏が「弥生時代・大陸系磨製石器の編年網の作製と地域間の比較研究」で提示された、両刃石斧分類のA 1（57）とA 2（119）に該当するものである（下條 1994）。いずれも太形蛤刃石斧の系列に属し、変化の方向性はA 1→A 2→（A 3）であることが明らかにされている。本遺跡の伐採石斧は、完成した太形蛤刃石斧の前段階のものと位置付けされる。石庖丁は、弧背弧刃形を呈し、背部弧度が刃部弧度よりも弱いものである（56）。刃部は扁兩刃である。下條分類のB 2に該当する。石鎌は、刃部がほぼ直線状を呈する（55）。研磨は両面のほかに背部にまで及び、面取りされる。スクレイパーは、刃部が弧状を呈するもの（6）と、直線状を呈するもの（58）とがある。砥石は、棒状の小型品である。基部に対して先端部がやや幅狭い形態である。

これらの形態的特徴のうち、伐採石斧と石庵丁は西部瀬戸内における当該期の典型例のひとつに位置付けられる。これは、下條氏の研究成果を追証するものである（下條 1994）。さて、器種構成に石鎌が含まれる点は注目したい。表13は、松山市における出土石鎌の一覧である。出土数は9点を数える。この数値は、瀬戸内における一平野からの出土数としては多い。点的というよりもむしろ、安定して石鎌が存在していたと理解することができる。すなわち、当地域における弥生時代石器には石鎌が定着しているのである。石鎌の初現は刻日突帶文土器段階であるが、その後の弥生前期前半の石器資料は良好なものに恵まれず、判然としない。石鎌が次にみられるのは前期末（梅木編年Ⅳ）である。さらに中期前葉（梅木中期Ⅰ）の宮前川遺跡出土資料にも認められる。このことから、石鎌の定着時期を、現段階では前期末と捉えておきたい。

石材は、石庵丁と石鎌には緑色片岩が用いられている。この石材は、本遺跡周辺では入手できず、南へ約3.5km離れた砥部川下流域が採取候補地のひとつとして考えられている。よって、本遺跡へは搬入したもの（あるいは搬入されたもの）と判断される。緑色片岩資料（石器原材）には、(118)のような粗削段階以前の裸があることは、搬入素材の形状を知る手がかりとなり得るものである。

(3) 景 観

S R201（埋土④～②）の遺物は、摩耗が少ない。さらに本調査地のI区からは弥生前期土器片が出土したことから、S R201の遺物は、本調査地の北～北東に展開する微高地の集落から投棄されたものと考えられる。久米才歩行遺跡2次調査地で検出された円形の堅穴住居址は当該期に時期比定されている。堀越川下流域右岸の微高地には当該期の集落遺跡が展開しており、今後はその広がりにも注意を払う必要がある。

S R201（埋土①）の遺物には、弥生時代中期に帰属するものもある。埋土と遺物の状況から、当時は水量が少なく、よどみのある湿地状を呈していたことが想定される。よって、本遺跡の北～北東の微高地には継続的に集落が展開していたものと考えられる。

古墳時代～古代

S R101は河道底から拳大の円礫が集中して出土したが、遺物の遺存は良好ではなく、器面の磨滅も顕著である。埋没当初は水量が多く、その後は、埋土が黒色で粘性のあるものに変化していることから、水量が減少し、よどみのある湿地状を呈していたと考えられる。河道の西側で検出されたS Xはこの想定を裏付けるものとなる。S R201（埋土①）には、当該期の遺物が多量に含まれることから、本調査地の北～北東の微高地に、当該期の遺構が広がるものと想定される。

中 世

掘立柱建物、井戸、柵列等の生活関連遺構を検出した。平成9年度に実施した久米才歩行遺跡3次調査地からは15～16世紀の掘立柱建物、溝、土坑等の集落の一部が検出されており、S R101の西側の微高地には当該期の集落が展開していることを確認した。今回検出の南北棟建物と素掘りの井戸、区画溝（2次調査地 S D 1）の検出は、具体的な遺構の様相を示したものとなろう。

以上、本調査のまとめを行った。今後は、各時代における遺構の広がりを追求することが課題のひとつとしてあげられる。

(註)

- 梅木謙一 1994 「西瀬戸内地方の弥生時代前期土器－松山平野を中心にして－」『牟田裕二君追悼論集』
 下條信行 1994 「弥生時代・大陸系磨製石器の幅乍網の作製と地域間の比較研究」『平成5年度科学的研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書』
 下條信行 1991 「松山平野と道後城北の弥生文化」『松山大学構内遺跡』松山市文化財調査報告書第20集

表13 愛媛県松山市石鎚出土遺跡一覧

番号	遺跡名	出土地	共伴土器	法量(cm)			石材	文献	備考
				長さ	幅	最大厚			
1	大洞遺跡	松山市太山寺町	船貝帶文土器	(13.6)	4.3	0.72	綠色片岩	①	報告書、B区SX-1出土
2	久米塙田IV遺跡	松山市久米塙田川	弥生前期IV	25.3	5.8	1.9	綠色片岩	②	報告書、第42-2号土坑出土
3	久米才歩行遺跡4次調査地	松山市久米町	弥生前期IV	(7.8)	4.0	1.01	綠色片岩	③	本報告第22回5 SR201層土③出土
4	久米才歩行遺跡4次調査地	松山市久米町	弥生前期IV	(15.1)	4.5	1.4	綠色片岩	③	本報告第27回5 SR201層上④出土
5	久米才歩行遺跡4次調査地	松山市久米町	弥生前期IV	(14.0)	6.2	1.6	綠色片岩	③	本報告第36回117 SR201層土②出土
6	久米才歩行遺跡4次調査地	松山市久米町	弥生前期IV	21.4	4.9	2.0	綠色片岩	③	本報告第36回118 SR201層土②出土
7	吉原川遺跡	松山市洞庭町	弥生中期I	(8.5)	4.7	1.1	綠色片岩	④	報告書、E-6区遺物包含層出土
8	道宿竹ヶ谷古墳群	松山市道宿町		17.5	5.6	1.02	綠色片岩	⑤	未報告遺物、「A区7号埴S no.5」の注記
9	福音寺遺跡羽ノ下地区	松山市福音寺町		16.3	4.5	0.87	綠色片岩	⑥	報告書(写真掲載)

<文献一覧>

- ①「大洞遺跡－1・2次調査－」2000
 ②「一枚岡遺跡1号松山坂道跡開発遺跡調査報告書(Ⅲ)」1981
 ③「一枚岡遺跡1号松山坂道跡開発遺跡調査報告書(Ⅲ)」1981
 ④「吉原川遺跡－中小河川改修事業埋蔵文化財調査報告書－」1986
 ⑤「愛媛県史 貢献編 考古」1986
 ⑥「国道11号バイパス 埋蔵文化財発掘調査報告書」1983

遺構・遺物観察表

一凡例一

- (1) 以下の表は、本遺跡検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
 (2) 遺物観察表の各記載について

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、頸→頸部、胴→胴部、胴上→胴上半部、底→底部、坏→坏部、天→天井部

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウムモ、密→精製土

() 内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

焼成欄では焼成具合を略記した。

例) ○→良好、○→並、△→不良

遺構一覧

表14 自然流路一覧

流路(SR)	地区	断面形	規模(m) 長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
201	II区	U字形か	検出長14×5×0.8~1.3	ばば 東西	①~④層に分層	弥生土器、石器、 土師器、須恵器他	弥生前期・中期、古 墳後期~古代、中世	
101	I区 (A~C1~2)	浅いU字形	検出長11.8×3.4 ~3.8×0.2	南北	①層：黒色土 ②層：浅灰色シルト	土師器 須恵器	古墳後期~古代	各面の磨滅 著しい。

表15 性格不明遺構一覧

性格不 明遺構 (SX)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
101	A2・3	不整形	逆台形	3.4×1.6×0.4~0.5	上層：オリーブ黒色土 下層：オリーブ黒色土 + 黄色土ブロック	弥生土器 土師器 須恵器	古墳時代後期	
102	B2	不整形	浅いU字形	1.8×1.7×0.05~0.09	黒色土	土師器 須恵器	古墳時代後期か	
103	A・B2	不整形	浅いU字形	2.7×2.4×0.15	黒色土	弥生土器 土師器 須恵器	古墳時代後期か	
104	A2・3	円形	逆台形	3.4×3.4×0.15~0.20	黒色土	弥生土器 土師器 須恵器	古墳時代後期~古代	

表16 挖立柱建物址一覧

掘立	規模(間)	方向	柱行		梁行		方位	床面積 (m ²)	時期	備考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
1	2×3	南北棟	6.1	1.96・1.50・2.14 1.60・1.60・2.20	3.5~3.9	4.00・1.42・1.40	N-S	23.79~21.35	中世段階か	

表17 井戸一覧

(SE)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
101	B3	円形	二段掘り	1.8×1.8×0.90+α	褐色土	土師器 須恵器	中世段階か	

表18 土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
102	A・B4	不整形	逆台形	1.3×1.3×0.20	上層：褐色土 下層：褐色土	土師器 須恵器	中世段階か	
103	B3・4	不整形	浅いU字形	1.5×1.3×0.10	褐色土	土師器 須恵器	中世段階か	

表19 溝一覧

溝(SD)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
102	C2・3	ごく浅いU字形	検出長7.0×0.5~0.8×0.04~0.08	北西~南東	褐色土	土師器 須恵器	中世段階か		
103	C3・4	ごく浅いU字形	検出長5.7×0.3~0.9×0.01~0.05	北西~南東	褐色土	土師器	中世段階か		

表20 棚列一覧

棚列(SA)	規模(間)	方向	実長(m)	柱間寸法(m)	柱穴掘幅 径×深さ(m)	時期	備考
101	7		6.8	0.80~1.00~1.08~1.12~0.40~0.28~0.80	0.1~0.3×0.06~0.23	中世段階か	SE101の付帯施設

表21 SR201埋土④出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	口径(17.5) 残高 9.7	沈線文8条。口縁に刻目。	ヨコ・ナ・メハ ケ→ナデ	ナデ	石・長(1~2)	◎	D5東ベルト	12
2	甕	残高 22	沈線文6条以上。	指オサエ	ハケ→ナデ	石・長(1~2)	◎	D5東ベルト	12
3	甕	残高 3.2	沈線文4条。	ヨコナデ タテヘラミガ キ	マメツ	石・長(1~5)	◎	E5	12
4	甕	底径(9.8) 残高 7.2	平底。	ナナメハケ→ナ デ	ナデ	石・長(1~5)	◎	D5東ベルト	

表22 SR201埋土④出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
5	石鏸・未製品	基部欠	結色片岩	(15.1)	4.5	1.4	(141.29)	D5 研磨段階。	12
6	スクレイパー	完存	サスカイト	4.4	3.3	0.96	9.79	D5 右側部に自然面残量。	
7	刮片	完存	結色片岩	7.3	3.3	0.42	12.41	D5東ベルト	

表23 SR201埋土③出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
8	甕	残高 4.9	沈線文9条。	ヨコナデか タテヘラミガキ	マメツ	石・長(1~3)	◎	D5東トレ	
9	甕	残高 8.0	沈線文5条以上。	タテハケ (10本/cm)	マメツ	石・長(1~4)	◎	E6	
10	甕	残高 4.2	沈線文6条以上。	マメツ	マメツ	石・長(1~4)	◎	D5	
11	甕	底径(8.2) 残高 6.2	わずかに上げ底。	マメツ	ナデ	石・長(1~5)	◎	E6	
12	甕	底径(7.6) 残高 7.0	平底。	タテヘラミガキ	ヨコ板ナデか	石・長(1~3)	◎	D5	
13	甕	底径(7.2) 残高 7.6	わずかに上げ底。	マメツ	マメツ	石・長(1~3)	◎	D5	
14	甕	底径(6.9) 残高 6.2	平底。	マメツ	マメツ	石・長(1~3)	◎	D5	
15	甕	底径(6.6) 残高 7.3	厚い平底。	マメツ	ナデ	石・長(1~4)	◎	D5	
16	甕	底径(6.7) 残高 4.0	厚い平底。	タテハケ (7~8 本/cm →ナデ)	マメツ	石・長(1~4)	◎	D5東トレ	
17	甕	底径(6.6) 残高 3.3	平底。	マメツ	マメツ	石・長(1~4)	◎		
18	甕	底径(5.7) 残高 4.3	平底。	タテミガキ	ナデ	石・長(1~3)	◎	D5	

遺物観察表

SR201埋土③出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
19	壺	残高 9.2	無文。	ヨコヘラミガキ ナメテラミガキ		石・長(1~3)	○	D5	
20	壺	残高 6.9	頸部に沈線文3条。	マメツ	マメツ	石・長(1~3)	○	D4	
21	壺	残高 4.1	頸部に沈線文6条。	マメツ	ナデカ	石・長(1~3)	○	D5	
22	壺	残高 6.6	頸部に沈線文9条以上+斜尖文2段。	マメツ	マメツ	石・長(1~3)	○	E6	
23	壺	残高 7.7	頸部に沈線文4条以上、胴部に沈線分3条以上。	タテハケ(6~7本/cm) →ヨコミガキ	ナデ	石・長(1~5)	○	D5	
24	壺	残高 5.1	胴部に沈線分2条(2条1組)以上。	マメツ	ナデ →ナメテラミガキ	石・長(1~3)	○	D4	
25	壺	残高 3.5	胴部に「M」字状の突審。	ヨコナデ	マメツ	石・長(1~5)	○	E6	
26	壺	残高 24.2	無文か。	ナデ	ナデ	石・長(1~2) 金ウ	○	D5	
27	壺	底径(13.0) 残高 5.0	厚い平底。	タテハケ(4本/cm)	ナデ	石・長(1~5)	○	D5	
28	壺	底径 11.8 残高 7.1	厚く、わずかに上げ底。	ナナメハケ →ヨコヘラミガキ	ナデ	石・長(1~2) 金ウ	○	D5東トレ	
29	壺	底径(10.0) 残高 16.6	厚い平底。肩部は肩部が盛る。	ナナメハケ →丁寧なナデ	ヨコハケ →丁寧なナデ	石・長(1~2) 金ウ	○	D5東トレ	
30	壺	底径(10.1) 残高 3.1	厚く、わずかに上げ底。	マメツ	ナデ	石・長(1~5)	○	D5	
31	壺	底径(9.4) 残高 5.2	わずかに上げ底。	マメツ	ヨコヘラミガキ	石・長(1~3)	○	D4	
32	壺	底径 9.7 残高 7.7	厚い平底。	ヨコヘラミガキ	板ナデ	石・長(1~3)	○	D5東トレ	
33	壺	底径 9.2 残高 6.5	厚く、わずかに上げ底。	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ	石・長(1~5) 金ウ	○	D5東トレ	
34	壺	底径(8.6) 残高 4.0	わずかに上げ底。	強いナデ	ヨコヘラミガキ	石・長(1~4) 金ウ	○	D5東トレ	
35	壺	底径(8.4) 残高 6.5	わずかに上げ底。	ヨコヘラミガキ	マメツ	石・長(1~4)	○	E6	
36	壺	底径(8.2) 残高 3.5	平底。	ナデカ	ヨコヘラミガキ	石・長(1~3) 金ウ	○	D4	
37	壺	底径(8.0) 残高 4.7	厚く、わずかに上げ底。	マメツ	マメツ	石・長(1~3) 金ウ	○	D5	
38	壺	底径(7.1) 残高 5.3	厚い平底。	タケハケ(3~4本/cm)	マメツ	石・長(1~3)	○	D5東トレ	
39	壺	底径(8.3) 残高 5.7	厚く、わずかに上げ底。	マメツ	ナデ	石・長(1~4) 金ウ	○	D4	
40	壺	底径 7.6 残高 3.5	平底。	マメツ	マメツ	石・長(1~4)	○	D4	

SR201埋土③出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	測 定		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
41	壺	底径 残高 (7.6) 3.9	わずかに上げ底。	マメツ	ナア	石・長(1~5)	○	D6	
42	壺	底径 残高 (7.6) 4.5	平底。	ハケ→ヨコヘラ ミガキ	マメツ	石・長(1~3)	○	D4	
43	壺	底径 残高 7.0 3.7	平底。	ヨコヘラミガキ	ナナメヘラミガキ	石・長(1~3) 金ウ	○	D6	
44	壺	底径 残高 (6.0) 5.8	上げ底。	マメツ	マメツ	石・長(1~3)	○	D6	
45	高坏	残高 8.6	低脚で、裾部は広がる。	折オウユナデ	ナア	石・長(1~5)	○	D6	12
46	壺	口径 (20.3) 残高 4.5	裾部はゆるやかに外反する。	ナア	ヨコハケ(14~ 15/cm) →丁寧なナデ	石・長(1~3)	○	D6	12
47	瓶	底径 残高 7.6 6.6	壺の転用品。焼成後片割穿孔。	テテヘラミガキ →丁寧なナデ	丁寧なナデ	石・長(1~3) 金ウ・銀ウ	○	D5素トレ	12
48	瓶	底径 残高 6.6 4.4	壺の転用品。焼成後片割穿孔。	マメツ	マメツ	石・長(1~2)	○	D4	12
49	瓶	底径 残高 8.5 6.1	壺の転用品。焼成後片割穿孔。	ナナメヘラミガキ	マメツ	石・長(1~3)	○	D4	12
50	瓶	底径 残高 7.4 6.7	壺の転用品。焼成後片割穿孔。	マメツ	マメツ	石・長(1~4)	○	D5素トレ	12
51	深鉢	残高 3.9	斜格子状の沈線文。	マメツ	ナアカ	石・長(1~4) 金ウ	△	D6	13
52	深鉢	残高 3.6	口縁端に刻目。	ヨコ条痕	ナア	石・長(1~3) 金ウ	○	E6	13
53	鉢	口径 (10.8) 残高 3.9	波状口縁。斜格子状の沈線文。	ヨコナダ ヨコ条痕	ナア	石・長(1~3)	△	D6	13
54	浅鉢	残高 2.7	波状口縁。口縁端に刻目。	マメツ	マメツ	石・長(1~2)	○	D6	13

表24 SR201埋土③出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
55	石錐	1/3か	緑色片岩	(7.8)	4.0	1.01	(50.81)	D5。背筋は研磨され、面取りされる。	13
56	石庖丁	2/5か	緑色片岩	(7.4)	4.5	0.58	(28.97)	E6 弧背彎刃形	13
57	伐採斧	2/3か	緑色片岩	(10.9)	(6.1)	3.3	(350.0)	D5	13
58	スクレイパー	完存	緑色片岩	8.4	5.7	0.85	34.69	D5	
59	石庖丁未製品	1/3か	緑色片岩	(3.9)	3.6	0.73	(14.90)	D4 研磨段階か。	
60	石庖丁未製品か	完存	緑色片岩	9.4	4.0	0.48	34.51	D4 打裂一敲打(穿孔)か。	

遺物観察表

表25 SR201埋土②出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
61	壺	口径(24.0) 残高 9.4	口縁端に刻目。沈縞文11条+刻 突文1段。	◎ヨコナデ ◎マツツ ◎タケハケ(7 ~8本/cm) → ナメヘラミガ キ	◎ヨコナデ ◎ゴヘラミ ガキ	石・長(1~3)	○	D4	14
62	壺	口径(22.1) 残高 3.8	口縁端に刻目。沈縞文7条以上。	マツツ	マツツ	石・長(1~4)	○	D4	14
63	壺	口径(21.2) 残高 5.3	口縁端に刻目。沈縞文6条+刻 突文1段+沈縞文1条+刻突文1 段+沈縞文2条。	◎ヨコナデ ◎タケハケ (12本/cm)	マツツ	石・長(1~4)	○	D6	14
64	壺	口径(29.6) 残高 8.6	口縁端に刻目。沈縞文9条+刻 突文2段+沈縞文5条。	マツツ	◎ナデ ◎ヨコヘラミガ キ	石・長(1~3)	○	D4	14
65	壺	残高 7.1	沈縞文5条+刻突文1段+沈縞文 5条。	マツツ	マツツ	石・長(1~4)	○	E6	
66	壺	残高 3.8	沈縞文4条。	◎ヨコナデ マツツ	マツツ	石・長(1~2)	○	D4	
67	壺	残高 4.3	沈縞文4条以上+刻突文1段+沈 縞文3条以上。	マツツ	ヘラミガキ	石・長(1)	○	E6	
68	壺	底径(8.8) 残高 6.7	厚みのある平底。	ハケ マツツ	ナデ	石・長(1~4)	○	D6	
69	壺	底径(8.4) 残高 3.0	立ち上りがあり、厚みのある平 底。	ナデ	ナデ	石・長(1~2)	○	D4	
70	壺	底径(6.8) 残高 4.1	平底。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	石・長(1~3) 金ウ	○	D4	
71	壺	底径(6.0) 残高 2.6	平底。	ナデ	ナデ	石・長(1~2)	○	D4	
72	壺	底径(6.4) 残高 4.5	わずかに上げ底。	ナデ	ナデ	石・長(1~4)	○	D4	
73	壺	底径(6.0) 残高 5.5	立ち上りがあり、厚みのある平 底。	ナナメハケ(10 本/cm)	ナナメハケ(9 本/cm)	石・長(1~2) 金ウ	○	D6	
74	壺	底径(5.6) 残高 3.3	立ち上りがある平底。	タテハケ→ナデ	タテハケ→ナデ	石・長(1~2)	○	D6	
75	壺	底径 5.5 残高 3.1	底部は立ち上りがあり、わずか に凹む。	マツツ	マツツ	石・長(1~5)	○	E6	
76	壺	底径 7.0 残高 6.5	立ち上りがある上げ底。	指オサエ→ナデ	指オサエ→ナデ	石・長(1~2)	○	D6	
77	壺	口径(25.0) 残高 8.3	口縁部は短く外反する。口縁内 面に凸審。	◎ヨコナデ マツツ	◎ヨコナデ マツツ	石・長(1~4)	△	D5北トレ	14
78	壺	口径(18.4) 残高 4.7	口縁内面に凸審。	ヨコナデ	マツツ	石・長(1~5) 金ウ	○	E6	14
79	壺	口径(20.0) 残高 5.1	口縁端面に沈縞文+刻目。	ナデ	ナデ	石・長(1~3)	○	D4	
80	壺	口径(20.0) 残高 6.0	口縁端面に刻目。	マツツ	マツツ	石・長(1~3) 金ウ	○	D4	
81	壺	残高 6.2	口縁内面に2条の刻目凸審。	丁寧なヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~3) 金ウ	○	D4	

SR201埋土②出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法長(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
82	壺	残高 4.9	腹部に凸帯。	マメツ	マメツ	石・長(1~3) 金ウ	◎	D4	
83	壺	残高 10.7	腹部に凸帯(押圧)。	マメツ	ヨコハケ	石・長(1~4)	◎	E6	
84	壺	残高 4.2	沈痕文9条以上。	ナデ	ナデ	石・長(1~8) 金ウ	◎	D4	
85	壺	残高 5.1	刺突文1段。	ナデ	ナデ	石・長(1~4)	◎	D4	
86	壺	残高 4.0	竹管文1段+沈痕文5条以上。	マメツ	マメツ	石・長(1~2)	◎	D4	
87	壺	残高 5.4	腹部に凸帯が付され、凸帶上段 部には連鎖状刻目。	マメツ	板ナデか	石・長(1~3) 金ウ	◎	D4	
88	壺	底径(12.2) 残高 5.9	平底。	ナデ	ナデ	石・長(1~3)	◎	D4	
89	壺	底径(12.4) 残高 6.3	厚みのある平底。	板ナデか	ナデ	石・長(1~2)	◎	E6	
90	壺	底径(12.4) 残高 3.3	平底。	ナデ	ナデ	石・長(1~4)	◎	E6	
91	壺	底径 11.2 残高 3.1	厚みのある平底。	ナデ	ナデ	石・長(1~5)	◎	D4	
92	壺	底径(11.0) 残高 4.4	厚みのある平底。	ナデ	ナデ	石・長(1~3)	◎	D4	
93	壺	底径(11.6) 残高 3.8	わずかに上げ底。	ナデ	ナデ	石・長(1~4)	◎	D6北トレ	
94	壺	底径 10.6 残高 6.3	厚みがあり、立ち上りのある平 底。	ヨコナデ	ナデ	石・長(1~4)	◎	D5	
95	壺	底径(10.8) 残高 5.7	平底。	ナデ	ナデ	石・長(1~5) 金ウ	◎	D6	
96	壺	底径(10.6) 残高 4.4	厚みのある平底。	ナデ	ナデ	石・長(1~3) 金ウ	◎	D4	
97	壺	底径(10.2) 残高 3.3	平底。	マメツ	指オサエ→ナデ	石・長(1~3)	◎	E6	
98	壺	底径(9.0) 残高 6.2	厚みがあり、立ち上りのある平 底。	ハケ→ナデ	ナデ	石・長(1~3)	◎	D6	
99	壺	底径(9.4) 残高 4.1	厚みがあり、立ち上りのある平 底。	ヨコナデ	マメツ	石・長(1~2)	◎	D4	
100	壺	底径(9.4) 残高 3.0	平底。	指オサエ→ナデ	指オサエ→ナデ	石・長(1~2)	◎	E6	
101	壺	底径 8.0 残高 4.7	上げ底。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	石・長(1~5)	△	D6北トレ	
102	壺	底径 9.0 残高 6.0	平底。	丁寧なヨコナデ	マメツ	石・長(1~4)	◎	D6	
103	壺	底径 9.4 残高 6.0	厚みのある平底。	指オサエ→ナデ	指オサエ→ナデ	石・長(1~5)	◎	E6	

遺物観察表

SR201埋土②出土遺物観察表 土製品							(3)		
番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	画版
				外 面	内 面				
104	壺	底径 残高 8.0 5.1	平底。	ナデ	ナデ	石・長(1~3)	◎	D4	
105	壺	底径 残高 6.4 3.8	やや凹む、底部。	タテハケ(7本/cm)	マメツ	石・長(1~2) 金ウ	◎	D6	
106	壺	底径 残高 6.0 4.7	厚みのある、上げ底。	タテハケ(6本/cm) →ナデ	ナデ	石・長(1~4) 金ウ	◎	D4	
107	壺	底径 残高 (7.4) 5.8	やや凹む、底部。	指オサエ→ヨコ ナデ	指オサエ→ヨコ ナデ	石・長(1~3)	◎	D6東ベルト	
108	壺	底径 残高 (9.0) 5.2	厚みのある平底。	ハケ→ナデ	ナデ	石・長(1~3)	◎	D4	
109	鉢	残高 5.7	貼付口縁。	丁寧なヨコナデ	丁寧なヨコナデ	石・長(1~3)	◎	D5北	14
110	高坏	残高 5.6	低脚。环部と脚部の境界には、断面三角形の凸部が付く。	④マメツ ⑤タテハケ(7本/cm)	④タテヘラミガキ	石・長(1~2)	◎	D4	14
111	瓶	底径 残高 (8.4) 4.5	壺の転用品。焼成後片割穿孔。	ヨコハケ→ヨコ ナデ	ヨコナデ	石・長(1~4)	◎	D4	14
112	瓶	底径 残高 6.7 3.8	壺の転用品。焼成後片割穿孔。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~3)	◎	E6	14
113	瓶	底径 残高 6.8 3.5	壺の転用品。焼成後片割穿孔。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~3)	◎	E6	14
114	ミニコ ヌア	底径 残高 2.5 3.2	厚みがあり、やや凹む底部。	指オサエ	指オサエ	石・長(1~3)	◎	D4	14
115	ミニコ ヌア	底径 残高 3.0 3.5	立ち上りのある厚い平底。	指オサエ	ナデ	石・長(1~3)	◎	D4	14
116	ミニコ ヌア	底径 残高 4~3.6 4.0	上げ底。	マメツ	マメツ	石・長(1~5)	◎	D4	14

表26 SR201埋土②出土遺物観察表 石製品

番号	器 権	残 存	材 質	法 量				備 考	画版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
117	石錐未製品	1/2	緑色片岩	(14.3)	6.2	1.6	(236.73)	D4 打製→背部敲打段階。	14
118	石錐未製品	完存	緑色片岩	21.4	4.9	2.0	380.0	D4 打製段階。	15
119	伐採斧	完存		16.3	6.0	4.0	712.0	D4	15
120	石斧	一部欠		12.7	2.5	1.3	50.81	D4 手持ち感か。	15
121	剥片	一部欠	サスカイト	4.1	5.7	0.6	8.92	D6	
122	器種不明品	大きくな	緑色片岩	(6.9)	(4.1)	(1.9)	(67.42)	D4	

表27 SR201埋土①出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	画版
				外 面	内 面				
123	甕	口径 残高 (19.5) 5.7	沈織文7条+刺突文1段+沈織文6条+刺突文1段以上。	タテハケ(7本/cm)	ヨコヘラミガキ	石・長(1~2)	◎	D4	16

SR201埋土①出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 査 費		粘 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
124	甕	残高 4.2	口縁端に刻目。沈線文6条以上。	マメツ	ヨコヘラミガキ	石・長 (1~3)	○	D6	16
125	甕	残高 4.6	沈線文8条以上。	ヨコナデ マメツ	マメツ	石・長 (1~2)	○	D4	
126	甕	口径 (21.0) 残高 4.1	沈線文7条以上。	マメツ	マメツ	石・長 (1~3)	○	D4	
127	甕	残高 4.8	沈線文4条。	マメツ	マメツ	石・長 (1~3)	○	D6	16
128	甕	残高 6.0	沈線文4条。	マメツ	ミガキ?	石・長 (1~3)	○	E6	
129	甕	残高 4.0	沈線文5条+刻突文1段以上。	マメツ	マメツ	石・長 (1~3)	○	D6	
130	甕	残高 5.7	柳状工具による沈線文+竹管丈1段。	タテハケ (7~8 本/cm)	ミガキ マメツ	石・長 (1~4)	○	E6	16
131	甕	残高 6.4	沈線文5条以上。	マメツ	マメツ	石・長 (1~3)	○	D4	
132	甕	残高 4.7	沈線文6条以上+刻突文2段。	タテハケ (6~9 本/cm)	マメツ	石・長 (1~2)	○	E6	
133	甕	残高 3.6	沈線文5条以上+刻突文1段+沈 線文2条以上。	マメツ	マメツ	石・長 (1~2)	○	D6	
134	甕	残高 4.5	刻突文1段。	タテヘラミガキ	マメツ	石・長 (1~3)	○	D6	
135	甕	底径 (9.4) 残高 3.7	厚みのある平底。	ヨコナデ?	ヨコナデ?	石・長 (1~4)	○	D6	
136	甕	底径 (8.0) 残高 5.5	わずかに上げ底。	ヨコナデ?	ヨコナデ?	石・長 (1~4)	○	D6	
137	甕	底径 7.0 残高 3.4	平底。	ヨコヘラミガキ	ヨコナデ?	石・長 (1~6)	○	D6	
138	甕	底径 (7.0) 残高 5.0	厚みがあり、ごくわずかな上げ 底。	ヨコナデ?	ヨコナデ?	石・長 (1~5)	○	D6	
139	甕	底径 6.2 残高 3.8	わずかに立ち上りがある平底。	ヨコナデ?	ヨコナデ?	石・長 (1~2)	○	D6	
140	甕	底径 6.0 残高 5.6	厚みのある平底。	ヨコナデ?	ヨコナデ?	石・長 (1~4)	○	D6	
141	壺	口径 (32.0) 残高 10.3	口縁内面に刻目凸帯。	ヨコナデ?	ヨコナデ?	石・長 (1~3)	△	D6	16
142	壺	口径 (25.2) 残高 4.6	口縁内面に凸帯。	マメツ	マメツ	石・長 (1~3) 金ウ	△	D4	
143	壺	口径 (10.4) 残高 9.6	瘦い腹部は直立ぎみに立ち上 る。	マメツ	マメツ	石・長 (1~3)	○	D6	
144	壺	口径 (17.6) 残高 5.6	大きく外反する口縁部。	タテハケ (6本 /cm) →ヘラミガキ	ヨコヘラミガキ	石・長 (1~4)	○	D4	
145	壺	口径 (13.6) 残高 3.0	口縁端に沈線文1条。	ヨコハケ	マメツ	石・長 (1~3)	○	D4	

造物観察表

SR201埋土①出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	同版
				外 面	内 面				
146	壺	口径(16.4) 残高 4.3	口縁端部に丸みもつ。無文。	マメツ	マメツ	石・長(1~5)	◎	D6	
147	壺	口径(14.4) 残高 2.7	口縁端部が面をもつ。無文。	ヨコナデ →ヘラミガキ	ヨコヘラミガキ	石・長(1~2)	◎	D4	
148	壺	口径(12.4) 残高 3.1	口縁端部が面をもつ。無文。	ヨコナデ	ヘラミガキ	石・長(1~2)	◎	D4	
149	壺	残高 4.0	口縁内面に凸帯。表面に無輪羽状文。	ナナメハケ(5 本/cm) →ヨコナデ	マメツ	石・長(1~3)	◎	E6	
150	壺	残高 3.7	口縁内面に凸帯。	ヨコハケ(5本 /cm) → タテヘラミガキ	マメツ	石・長(1~4)	◎	D5	
151	壺	残高 4.1	頸部に沈線文4条以上。	マメツ	ヨコヘラミガキ	石・長(1~2)	◎	D5	
152	壺	残高 4.7	頸部に沈線文2条+刺突文1段+沈線文1条。貼付凸唇上には連續状斜目文が施される。	⑤タテハケ(4 本/cm)	マメツ	石・長(1~3)	◎	D4	
153	壺	残高 4.6	二枚貝腹縁による山形文2段+沈線文3条・2段・下向き弧文+上向き弧文+山形文2段。	マメツ	ナデ	石・長(1~4)	◎	D6	
154	壺	残高 5.9	腹部に貼付凸唇。帶面上を刻みと押庄により施す。	マメツ	ナデ	石・長(1~3)	◎	D4	
155	壺	残高 8.3	沈線文4条+押庄による凸帯文2条。	ヨコヘラミガキ	ヨコナデ	石・長(1~2)	◎	E6	16
156	壺	残高 4.8	沈線文5条。	マメツ	マメツ	石・長(1~2) 金ウ	◎	D6	
157	鉢	口径(17.2) 残高 4.6	折り曲げ口縁。	⑤ヨコナデ マメツ	マメツ	石・長(1~3)	◎	D5	16
158	鉢	残高 4.7	貼付口縁。	⑤ヨコナデ タテハケ(5本 /cm)	マメツ	石・長(1~2)	◎	D6	16
159	壺	底径 15.8 残高 5.1	厚みのある平底。	マメツ	マメツ	石・長(1~6)	△	D4トレ	
160	壺	底径(12.8) 残高 4.1	やや厚みのある平底。	ヨコナデ	マメツ	石・長(1~5)	◎	D4トレ	
161	壺	底径(12.4) 残高 4.3	厚みのある平底。	タテハケ(5~6 本/cm) →ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~4)	◎	D4トレ	
162	壺	底径 6.4 残高 4.2	平底。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~4) 金ウ	◎	D4	
163	壺	底径(10.0) 残高 3.5	厚い円錐状の底部。	ヨコナデ	マメツ	石・長(1~4)	◎	D6	
164	壺	底径 8.4 残高 9.0	やや上げ底ぎみの底部。	マメツ	マメツ	石・長(1~5)	◎	D4東ベルト	
165	壺	底径(8.8) 残高 5.5	やや上げ底ぎみの底部。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~4)	◎	D6	
166	壺	底径 9.4 残高 4.5	厚みがあり、やや上げ底ぎみの底部。	ナデ	ナデ	石・長(1~4)	◎	D5	

SR201埋土①出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
167	壺	底径 6.6 残高 5.4	厚い円盤状の底部。	丁寧なナデ	ナデ	石・長 (1~4)	◎	D5	
168	壺	底径 (10.4) 残高 2.8	厚みのある平底。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長 (1~4)	◎	D4	
169	壺	底径 (9.6) 残高 4.3	平底。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長 (1~3)	◎	D5	
170	壺	底径 (7.0) 残高 5.1	厚みのある平底。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長 (1~5)	◎	D5	
171	壺	底径 (7.8) 残高 3.4	厚みがあり、上げ底ぎみの底部。	マメツ	ヨコナデ	石・長 (1~2)	◎	D4	
172	壺	底径 (9.6) 残高 4.6	厚みのある平底。	マメツ	マメツ	石・長 (1~4)	◎	D4	
173	壺	底径 (7.8) 残高 2.3	厚みがあり、上げ底ぎみの底部。指オサエ	マメツ	マメツ	石・長 (1~5)	◎	D6	
174	壺	底径 (7.0) 残高 6.4	厚みがあり、上げ底ぎみの底部。	マメツ	マメツ	石・長 (1~5)	◎	D4	
175	壺	底径 (7.2) 残高 5.2	厚みのある平底。	タテハケ (7本/cm) → 丁寧なヨコナデ	ナデ	石・長 (1~4)	◎	D5	
176	壺	底径 (9.0) 残高 6.9	厚みのある平底。	タテハケ → ナデ	ナデ	石・長 (1~4)	◎	D5	
177	壺	底径 (9.6) 残高 4.7	上げ底。	ナデ	ナデ	石・長 (1~5)	◎	D4	
178	甕	口径 (25.0) 残高 3.8	頭部に押凸書文。	マメツ	マメツ	石・長 (1~2)	◎	D4	
179	甕	口径 (19.6) 残高 2.9	頭部に押凸書文。	マメツ	マメツ	石・長 (1~2)	◎	D4	
180	甕	残高 4.9	頭部に押凸書文。	マメツ	マメツ	石・長 (1~3) 金ウ	◎	D4	
181	甕	残高 2.6	頭部に押凸書文。	マメツ	マメツ	石・長 (1~4)	◎	D4トレ	
182	甕	底径 5.6 残高 7.2	上げ底。	丁寧なナデ	丁寧なナデ	石・長 (1~3)	◎	D6	
183	甕	底径 6.5 残高 4.5	厚みのある、やや上げ底ぎみの底部。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長 (1~3)	◎	D5	
184	甕	底径 (7.2) 残高 5.5	上げ底。	マメツ	ヨコナデ	石・長 (1~5)	◎	D4	
185	甕	底径 (6.6) 残高 6.5	上げ底。	マメツ	ヨコナデ	石・長 (1~5)	◎	D4	
186	甕	口径 (14.8) 残高 3.3	口縁端部が面をもつ。頭部に沈線文2条以上。	マメツ	マメツ	石・長 (1~2)	◎	D5	
187	甕	口径 (26.0) 残高 2.6	大きく外反する口縁内面に、削り出し状の凸凹文2条。	ヨコナデ タテハケ (5~6本/cm) → ヨコナデ → ミガキ	ヨコナデ	石・長 (1~3)	◎	D4	16
188	甕	口径 (20.4) 残高 3.0	上方に強張された口縁端部に凹線文4条。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長 (1~3)	◎	D4	16

遺物観察表

SR201埋土①出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
189	壺	口径(19.0) 残高 2.2	上下に拡張された口縁端部に凹 縫文3条。	マメツ	マメツ	石・長(1~3) 金ウ	◎	D4	
190	壺	口径(14.4) 残高 1.6	上下に拡張された口縁端部に凹 縫文2条。	マメツ	マメツ	石・長(1~3)	◎	D4	
191	壺	残高 4.5	腹部に押圧と刻みをもつ凸縫文。	マメツ	マメツ	石・長(1~3)	◎	D5	
192	壺	残高 5.2	腹部に板状工具木口部による押 圧された凸縫文。	マメツ	マメツ	石・長(1~3)	◎	D5東トレ	
193	高坏	口径(22.4) 残高 4.8	口縁外側に沈縫文1条。	タテハケ	タテハケ →ヨコヘラミガ キ	石・長(1~3)	◎	D4東ベルト	16
194	高坏	底径(15.6) 残高 4.6	凹縫文5条、錐面状の沈縫文。	マメツ	マメツ	石・長(1~2)	◎	E6	16

表28 SR201埋土①出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
195	石磨丁	2/5	緑色片岩	(8.0)	6.0	0.86	(57.78)	D5 弧背弧刃形。	17
196	石磨丁	1/2	緑色片岩	(10.0)	5.5	0.82	(71.55)	D4 弧背直刃形。	17
197	石磨丁	1/4	緑色片岩	(5.2)	3.6	0.82	(22.08)	D4	17
198	石磨丁未製品	完存	緑色片岩	8.8	4.0	0.98	60.24	D4 汀裂段階。	17
199	石磨丁未製品	完存	緑色片岩	8.5	5.9	0.83	65.07	D5 打製段階。	
200	石磨丁未製品	1/2	緑色片岩	(5.0)	3.4	0.78	(16.09)	D4 粗削段階。	
201	敲石	ほぼ完存	緑色片岩	12.7	3.0	1.30	71.61	D4 粗削・打製時の石器 製作工具	
202	台石	完存	[こそ燐石角閃 安山岩]	12.4	10.0	2.2	450.0	D6 風化著しく過行。	

表29 SR201埋土①出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
203	漆抜	残高 3.2	口縁端に刻目。沈縫による山形 文3条。	ナデ	ナデ	石・長(1~2)	◎	E6	17
204	壺	口径(17.5) 残高 5.2	土師器。	剥落	剥落	石・長(1~3)	◎	D4	
205	高坏	残高 8.7	土師器。	マメツ	マメツ	青	△	D4	
206	甌	残高 5.8	把手部。	ナデ	-	石・長(1~2)	◎	D4	
207	甌	残高 4.6	把手部。	ナデ	-	青	◎	E6	
208	甌	残高 5.1	把手部。	ナデ	-	石・長(1~3)	◎	D4	

SR201埋土①出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
209	环底	口径 (12.4) 残高 4.0	天井部と口縁部を分ける構は、美 い。口縁部は垂下し、端部は内傾 する。	⑤回転ヘラケズ リ ⑥回転ナデ	回転ナデ	密	○	D5東トレ	17
210	环身	受部径 (12.0) 残高 3.6	立ち上りを欠く。受部はほぼ水 平。	④回転ナデ ⑤回転ヘラケズ リ	回転ナデ	密	○	D4	
211	环身	受部径 (12.2) 残高 3.0	立ち上りを欠く。受部はほぼ水 平。	③回転ナデ ④回転ヘラケズ リ	回転ナデ	密	○	D5	
212	高坏	口径 (12.0) 器高 5.5	つまみ部は天井がわずかに凹 む。	⑤回転ヘラケズ リ ⑥回転ナデ	回転ナデ	密	○	D5	17
213	高坏	残高 4.9	短脚。通孔は長方形を呈し、3 方向。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	D5	
214	器台	残高 4.4	波状文2段。	平行タキ	回転ナデ	密 (2)	○	D4	
215	器台	底径 (17.9) 残高 5.3	ゆるやかに外反する裾部。ヨコ ナゲにより深い凸唇部が形成さ れ、その上段に波状文。	回転ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ	密	○	D4	17
216	环身	口径 (14.0) 残高 2.8	立ち上りを一部欠く。受部はや や上方にのびる。	⑤回転ナデ ⑥回転ヘラケズ リ	回転ナデ	密	○	D4	
217	高坏	口径 (10.4) 残高 4.8	無蓋長脚高坏の环部。低い突唇 を2箇付し、突唇間に刺突点列 点文。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	D4	17
218	高坏	残高 3.6	長脚2段造り。通孔は長方形 で2方向。	回転ナデ	ナデ	密	○	D5	17
219	环底	残高 1.8	宝珠模つまみ。	回転ナデ 一部回転ヘラケズ リ	回転ナデ	密	○	D4	18
220	环身	口径 12.4 残高 2.5	立ち上りは強く内傾し、端部は 尖り気味に丸く仕上げる。	③回転ナデ ④回転ヘラケズ リ	回転ナデ	密	○	D5東ベルト	
221	环身	口径 (11.3) 残高 2.3	立ち上りは内傾し、端部は尖り 気味に丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	D4	
222	环身	口径 (9.4) 残高 2.4	立ち上りは内傾し、端部は丸く 仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	D4	
223	环身	受部径 (13.0) 残高 2.1	口縁部欠く。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	D4	
224	环身	残高 3.1	口縁・受部ともに一部欠く。	①回転ナデ ②回転ヘラケズ リ	回転ナデ	密	○	D5	
225	环身	底径 8.0 残高 3.1	底盤部のやや内傾に、「ハ」の 字形の高台を施す。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	D4	18
226	長腹器	残高 3.6	腹部片。	ナデ	ナデ	密	○	D4	18
227	瓶	残高 4.5	肩部片。	③④回転ナデ ⑤回転ヘラケ ズリ	ナデ	密	○	D5	
228	直口壺	口径 (9.4) 残高 11.7	肩は張り、口縁部は若干直立す る。把手が4方向に付く。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	D4トレ	18
229	広口壺	口径 (17.2) 残高 4.1	口縁部は大きく外反し、端部は 下方に膨張する。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	D4	18
230	広口壺	口径 (8.4) 残高 4.0	頭部はやや外傾し、口縁部は想 く外反する。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	D4	

遺物観察表

SR201埋土①出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
231	高坏	底径(6.8) 残高 1.8	脚部は外反し、脚部は下方に突出する。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	D5	
232	甕	口径(18.3) 残高 7.6	口縁部は直立気味にやや内湾する。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	D5	18
233	甕	残高 5.0	底部～脚上部片。	⑤回転ヘラケズ リ	④回転ナデ ⑥同心円文タ キ	密	○	D5	
234	瓶	底径(4.3) 残高 1.8	縦条陶器。底部に接して高台を貼付する。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	D4	18
235	甕	底径(6.1) 残高 1.9	白陶。底部に接して、やや「ハ」の字形の高台を貼付する。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	D4	18
236	すり鉢	底径(19.6) 残高 6.8	厚みのある平底。	回転ナデ	回転ナデ →ヨコヘラミガ キ	密	○	D5	18
237	すり鉢	底径(10.4) 残高 3.8	平底。	回転ナデ ⑤ヘタケズリ	ヨコヘラミガキ	石・長(2~4)	○	D4	

表30 SX101出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
238	壺	残高 7.2	脚部下半に凸帯が引条巡る。	タケハケ(7本/cm)	マメツ	石・長(1~3)	○	弥生土器	
239	壺	底径(8.8) 残高 6.1	厚手の平底。	マメツ	マメツ	石・長(1~3)	○	弥生土器	
240	鉢	底径(8.0) 残高 5.7	やや厚手の上げ底。	マメツ	タテミガキ	石・長(1~4)	○	弥生土器	
241	坏壺	口径(11.6) 残高 2.7	口縁斜片。口縁部は垂下し、端部はやや内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	密	○		
242	坏身	口径(11.2) 残高 3.0	底部を欠く。立ち上りはやや内傾する。受部は太く、ほぼ水平にのびる。	④回転ナデ ⑤回転ヘラケズ リ	回転ナデ	密	○		
243	坏身	口径(10.9) 残高 2.9	底部を欠く。立ち上りはやや内傾する。受部は太く、ほぼ水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	密	○		
244	坏身	口径(10.4) 残高 2.1	底部を欠く。立ち上りは内傾する。受部は上方へのひび。	回転ナデ	回転ナデ	密	○		
245	高坏	底径(8.2) 残高 3.8	脚基部は細い。	⑥回転ヘラケズ リ ⑦回転ナデ	回転ナデ	密	○	外面自然端	
246	高坏	残高 5.7	脚基部は細い。	⑧回転ナデ ⑨回転ヘラケズ リ	回転ナデ	密	○		
247	長颈壺	残高 5.6	底部を欠く。脚部最も径の位置に凹線が1本巡る。	⑩回転ナデ ⑪回転ヘラケズ リ	回転ナデ	密	○	外面自然端	18
248	長颈壺	残高 9.9	やや肩が強る球形の肩部。肩部に凹線2条及び、凹縫間に横突起複数。	⑫回転ナデ ⑬回転ヘラケズ リ	回転ナデ	密	○		18
249	甕	口径(35.4) 残高 4.9	口縁は大きく外反する。腰指き痕次文は凹線により区画される。	回転ナデ	回転ナデ	密	○		

表31 SX104出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
250	壺	残高 3.6	弥生土器。沈線文3条。	タテハケ	ナデ	長(1~2) 金ウ	◎	A3	
251	壺蓋	口径(13.4) 残高 2.9	口縁部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	審	◎	A3	
252	壺	残高 2.8	胴上半周片。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	審	◎	A3	

表32 SR101出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
253	壺	口径(17.2) 残高 3.5	土師器。口縁部は強く外反し、 窓部は開取り風に仕上げる。	タテハケ(5本/ cm)	板状工具による ヨコナデ	石・長(1~2)	◎	B2ベルト	
254	壺蓋	口径(12.4) 器高 2.6	天井部と口縁部を分ける後は消 失する。口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	審	◎	A1	
255	壺	残高 5.0	口縁~窓部片。	回転ナデ	回転ナデ	審	◎		
256	壺	口径(22.6) 残高 3.7	口縁部はゆるやかに外反し、窓 部は、つまみ上げられる。	回転ナデ	回転ナデ	審	◎		
257	壺	口径(24.2) 残高 5.1	口縁部は外反し、窓部は上下に やや拉張される。	回転ナデ	回転ナデ	審	◎	A1	

表33 捶立1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
258	壺	残高 6.0	窓部は球形を呈する。	回転カキメ	回転ナデ	審	◎	SP20	

表34 SE101出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
259	壺蓋	口径(11.3) 残高 3.8	天井部は比較的高く、かえりは 口縁端部より下方に伸びる。	⑤回転ヘラケズ リ ⑥回転ナデ	回転ナデ	審	◎	流入土	

遺物観察表

表35 I区包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
260	坏塗	口径(13.2) 残高4.3	天井部と口縁部を分ける鈎は消失する。口縁底部は尖がり気味に仕上げる。	回転ヘラケズ リ	回転ナデ	審	○	B2 Ⅵ層	
261	坏塗	口径(10.9) 残高3.1	口縁部小片。	回転ナデ	回転ナデ	審	○	A2 Ⅵ層	
262	坏塗	口径(6.6) 残高1.7	かえりは口縁漫部より下方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	審	○	B2 Ⅵ層	
263	坏塗	口径(22.1) 残高1.4	かえりは口縁漫部より下方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	審	○	東壁トレン チ Ⅵ層	
264	坏身	残高3.2	立ち上りは内傾する。受部は太くやや上方外方にのびる。	回転ナデ 回転ヘラケズ リ	回転ナデ	審	○	B2 Ⅵ層	
265	坏	口径(9.0) 器高2.8 底径(6.8)	厚みのある平底。口縁は外方に開く。	回転ナデ	回転ナデ	審	○	B2 Ⅵ層	
266	坏	底径(8.0) 残高3.9	高台は、底部のやや内に「ハ」字形に貼付される。	回転ナデ	回転ナデ	審	○	B2 Ⅵ層	18
267	坏坏	残高6.5	脚部片。長方形の透孔を3方向にもつ。	回転カキメ	回転ナデ	審	○	東壁トレン チ Ⅵ層	
268	壺	口径(14.6) 残高3.4	口縁部は、短く外反する。	回転ナデ	回転ナデ	審	○	A1 Ⅵ層	
269	壺	口径(11.0) 残高2.4	口縁部は、下方に拡張される。	回転ナデ	回転ナデ	審	○	東壁トレン チ Ⅵ層	
270	碗	口径(20.1) 残高7.9	ボウル形の器形。	ヨコヘラミガキ	マメツ	長(1~3)	○	北壁トレン チ Ⅵ層	
271	瓢	残高5.2	把手部。	マメツ	マメツ	審	○	C1 Ⅵ層	
272	坏身	口径(11.6) 残高1.8	立ち上りは内傾する。受部は太くやや上方外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	審	○	C2 Ⅵ層	
273	長脚壺	残高6.9	脚部最大径位置に回線文1条。	回転ナデ 回転ヘラケズ リ	回転ナデ	審	○	C2 Ⅵ層	
274	すり鉢	底径(18.4) 残高5.0	底部片。	板状工具による ケズリ	ナデ	長(1~3)	○	C1 Ⅵ層	
275	すり鉢	底径(12.0) 残高5.7	底部片。	回転ナデ	ナデ	長(1~6)	○	C1 Ⅵ層	
276	坏身	残高2.6	受部は太く水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	審	○	B1 Ⅵ層	
277	坏身	口径(10.8) 残高2.9	立ち上りは内傾し、縁部は尖る。受部は太く、上外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	審	○	A1 Ⅵ層	
278	坏	底径(10.5) 残高1.4	高台は底部に接して「ハ」字形に貼付される。	回転ナデ	回転ナデ	審	○	A1 Ⅵ層	
279	高坏	底径(14.0) 残高2.5	脚部は外反気味に下がり、脚部付近に1条の凸縦が造る。	回転ナデ	回転ナデ	審	○	A1 Ⅵ層	
280	すり鉢	底径(16.5) 残高3.6	底部片。	回転ナデ	ナデ	長(1~5)	○	A1 Ⅵ層	
281	皿	底径(6.0) 残高1.1	底部片。	回転ナデ 外縁ヘラ切り	回転ナデ	審	○	B2 V層	

I 区包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
282	坏	底径 (5.8) 残高 1.5	高台は底部に接して、「ハ」字形に貼付される。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	B2 V層	
283	坏茎	口径 (10.4) 残高 2.0	口縁部片。口縁部は垂下し、端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	A2 IV層	
284	無柄壺	口径 (8.8) 残高 3.4	口縁部は短く直立する。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	北陸トレン チ I層	

第4章

久米才歩行遺跡

5次調査地

第4章 久米才歩行遺跡5次調査地

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経過(第2・56図)

本調査は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『No126 高畠遺物包含地』内における宅地造成工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は、重信川中流右岸の小野川扇状地と、手石川扇状地との間に形成された洪積台地上、標高34.0mに立地する。同包含地内には、調査地北東130mに8世紀代の掘立柱建物を検出した南久米町遺跡1～3次調査地、南久米沖台A、南久米沖台B遺跡があり、北西140mには、中世～近世の集落関連遺構を確認した北久米町屋敷遺跡1次・2次調査地がある。

すでに、久米才歩行遺跡では4次の調査が実施され、弥生時代～中世までの集落跡が確認されている。

このことから、松山市教育委員会文化教育課は当該地の埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲や性格を確認する必要があるため、平成11年2月1日に試掘調査を実施した。

試掘調査では、対象地内に3本の試掘トレンチを設定した。地表下20cmの第VI層黄色粘土層上面では柱穴・溝・土坑を確認し、古墳時代の須恵器片や中世の土師器片等の遺物が出土した。

これらの結果を受け、当該地における遺跡の取り扱いについて、松山市教育委員会文化教育課と地権者は協議を重ね、開発工事によって失われる遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することになった。

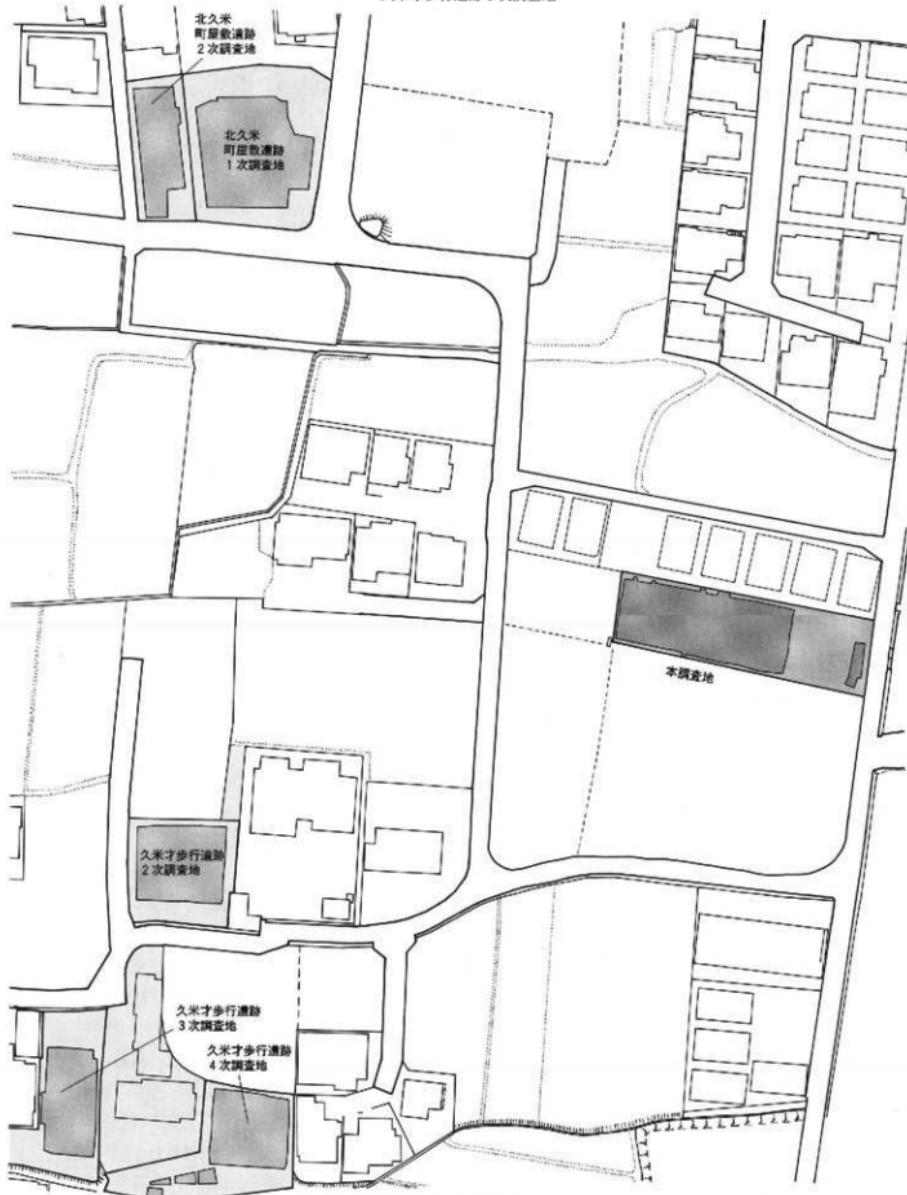
調査は、調査地及び周辺地域における弥生時代～中世の集落の広がりや、集落構造の解明を主目的に、財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが主体となり、申請者の協力のもと平成11年4月8日に開始した。

(2) 調査の経緯(第57～59図)

調査地は、来住台地の北端を流れる堀越川の北側に位置し、標高は34mを測る。調査対象面積は790.31m²である。当地は調査以前に水田として利用されていた。以下、調査行程を略記する。

1999年4月8日、表土剥ぎ取り作業を開始する。試掘調査の結果と調査期間を考慮したうえで、重機を併用して第VI層黄色粘土(地山)上面での剥ぎ取りを行う。9日より人員を配して本格的な調査を開始する。遺構検出作業を行った結果、柱穴・溝・土坑等の遺構を確認した。4月15日、遺構検出状況の写真撮影をする。4月19日、遺構の掘り下げ作業を開始する。調査区内に国土座標系第IV系から国土座標4点M1=X90219.0m Y-64644.0m、M2=X90228.0m Y-64639.0m、M3=X90215.0m Y-64620.0m、M4=X90224.0m Y-64620.0mを設置し、同時に3m四方のグリットを設定し、グリット名は北から南へA～G、西～東へ1～13とした(第58図)。4月22日、遺構の測量を開始する。4月28日にはSD1、SD2の掘り下げを終了し、測量を開始する。南・西部の擁壁工事始まる。4月30日、SD1の範囲確認のため、調査地南西の隣接地にトレンチを設定した。これは、安永ユリエ氏の協力によるものである。5月10日、掘立柱建物群の測量開始。6月2日には、調査区西部の調査を終了し、遺構完掘状況写真の撮影をする。6月3日、重機により調査区西部を埋め戻す。翌4日には調査区東部の掘削を開始し、遺構検出作業を行う。6月10日、遺構検出状況を撮影

久米才歩行遺跡 5次調査地



第56図 調査地及び周辺遺跡 ($S = 1 : 1,000$)

する。調査区西部と同様に3m四方のグリッドを設定する。遺構の掘り下げを開始。6月14日には、各遺構の測量を始める。6月22日、遺構完掘状況の写真を撮影する。6月26~28日には、調査地東側にトレンチを設定し、SD1・2・4の範囲確認をする。6月30日には、出土遺物と発掘機材を搬出し、野外調査を終了する。

(3) 調査組織

調査地 松山市南久米町468-1

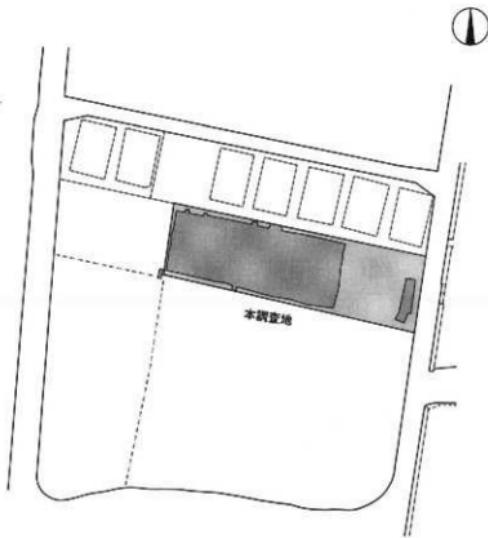
遺跡名 久米才歩行遺跡5次調査地

調査期間 1999(平成11)年4月8日~1999(平成11)年6月30日

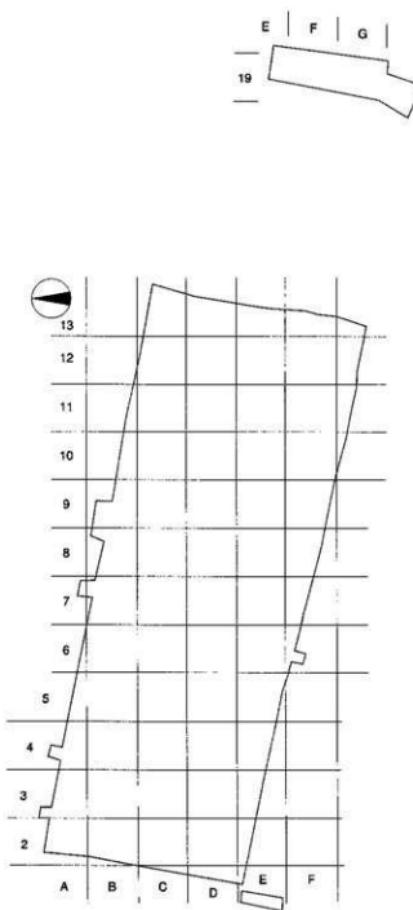
調査面積 790.31m²

調査委託 安永ユリエ

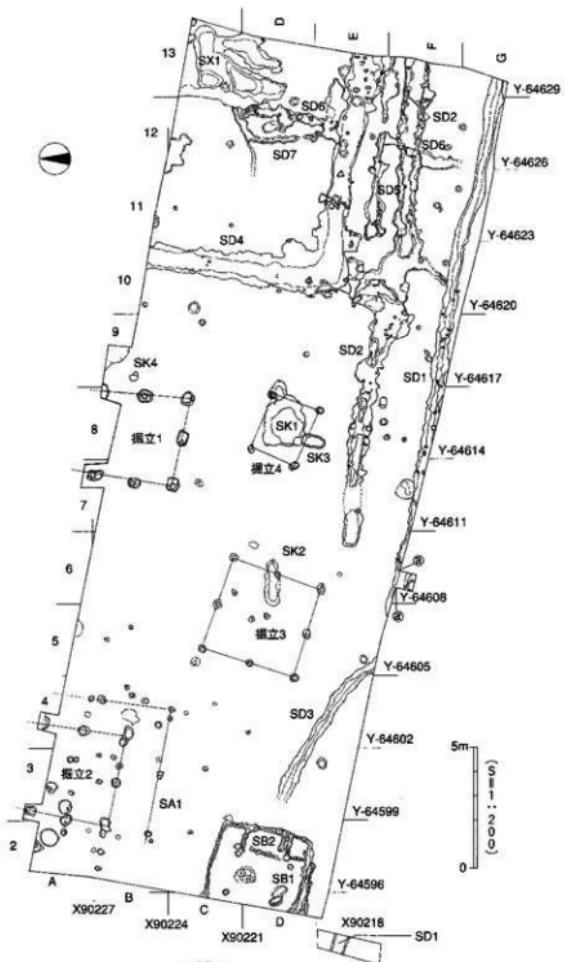
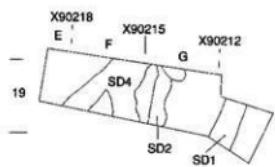
調査担当 小笠原善治・河野史知



第57図 調査地位置図 (S=1:1,000)



第58図 調査地区割図 ($S = 1 : 300$)



第59図 造構配置図

2. 層位 (第60・61図)

調査地の基本土層は、第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層旧耕作土、第Ⅲ層床土、第Ⅳ層褐色土～褐灰色土、第Ⅴ層黒色土、第Ⅵ層黄色粘土（地山）である。各遺構は、第Ⅵ層上面で検出した。

第Ⅰ層：現代の水田耕作層である。

第Ⅱ層：現代の水田耕作層の下層にあり、昭和期の耕作層である。

第Ⅲ層：水山層下の床土である。

第Ⅳ層：ほぼ調査区全域でみられるが北部に厚く堆積する。層厚4～18cmを測る。色調から3分層した。

第Ⅳ-1層は褐灰色土で、南西部に部分的に分布する。層厚2～10cmを測る。第Ⅳ-2層は褐色土で、北東部から南西部にかけて厚く堆積する。層厚4～18cm。第Ⅳ-3層はにぶい褐色土で、北部と東部に部分的な分布をみせる。層厚2～4cm。

第Ⅴ層：調査区南半に厚く堆積し、調査区中央部付近で消失する。層厚15～22cmを測る。混入土壤の差から3分層した。

第Ⅴ-1層は黒色土で、南西部に厚く分布する。層厚は4～22cmを測る。第Ⅴ-2層は黒色土に灰色土と若干の砂が混じる層で、北壁の一部に見られる。層厚4～8cmを測る。第Ⅴ-3層は黒色土に粒状の黄色粘土が混じる層で、北壁の一部と南西部に途切れながら帯状に分布する。層厚3～9cmを測る。

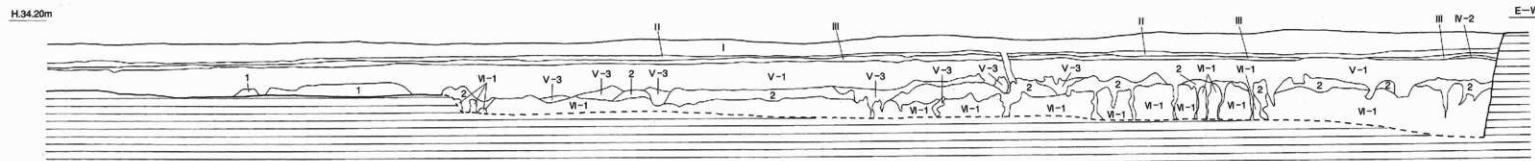
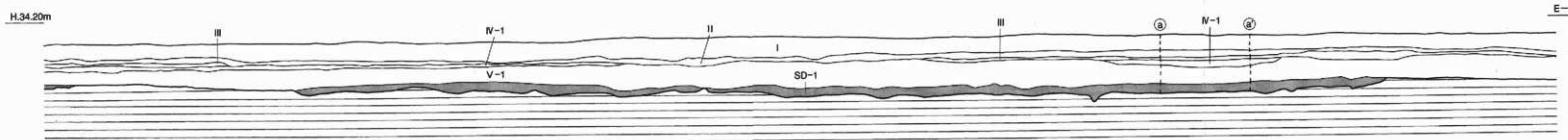
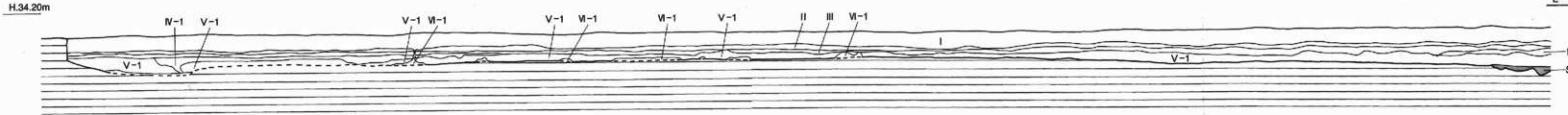
第Ⅵ層：調査区の基盤層で、本層位上面が遺構検出面になる。地形測量の結果、本層上面は調査区北東部から南西部にむけて緩傾斜している。混入土壤の違いにより2分層される。

第Ⅵ-1層は黄色粘土で、調査区ほぼ全域に見られる。第Ⅵ-2層は黄色微砂質土で、北東部の北壁に部分的に見られる。層序的には第Ⅵ-1層とほぼ同位である。

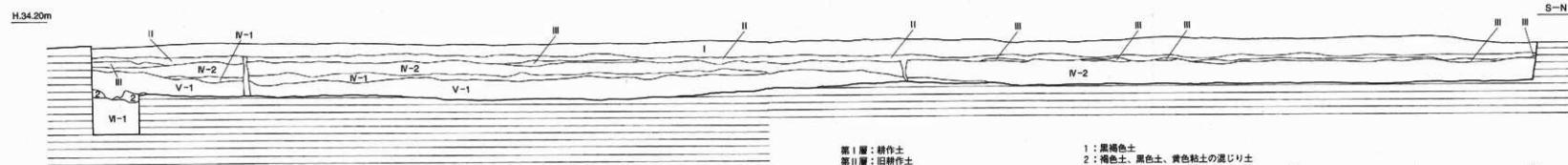
3. 遺構と遺物

調査では、弥生時代～中世の遺物と遺構を検出した（第59図）。遺構は竪穴式住居址2棟、掘立柱建物址4棟、溝7条、土坑4基、性格不明遺構1基である。遺物は主に遺構からの出土品であり、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、備前焼き、石器等が出土している。

以下、時代ごとに遺構と遺物の説明をする。



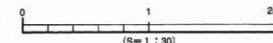
南壁



西壁

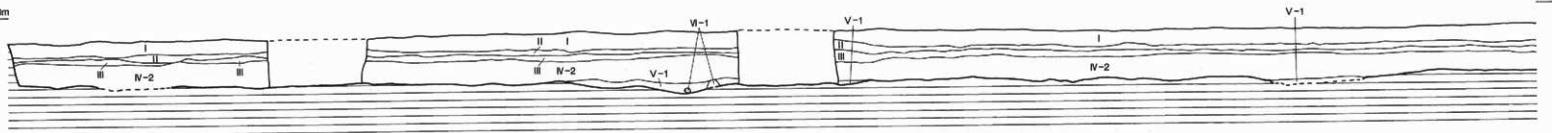
第Ⅰ層：耕作土
第Ⅱ層：旧耕作土
第Ⅲ層：床土
第Ⅳ-1層：褐色土
- 2層：褐色土
- 3層：にぶい褐色土
第V-1層：褐色土に灰色土が混じり若干砂混じる
- 2層：褐色土に粒状の黄色粘土混じり
第VI-1層：黄色粘土
- 2層：黄色微砂質土

1：黒褐色土
2：褐色土、黒色土、黄色粘土の混じり土

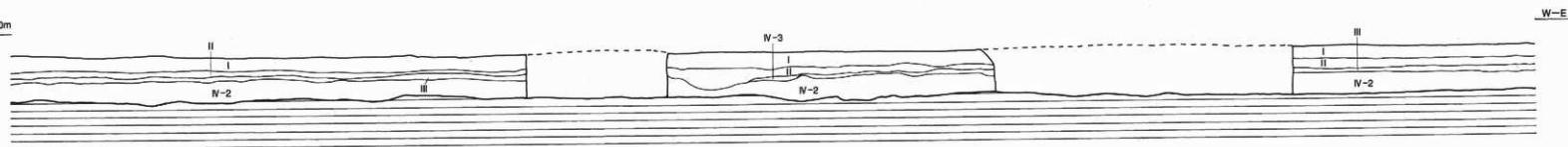


第60図 南壁・西壁土層図

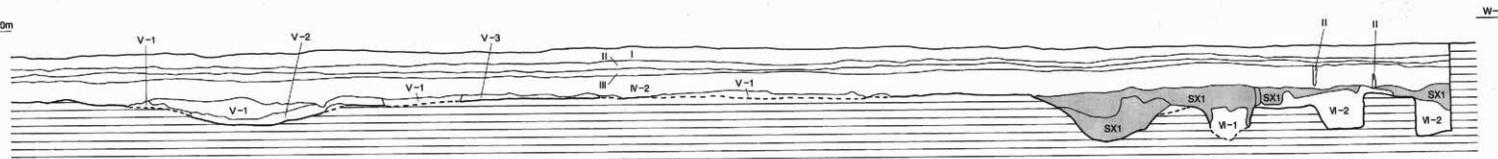
H.34.20m



H.34.20m

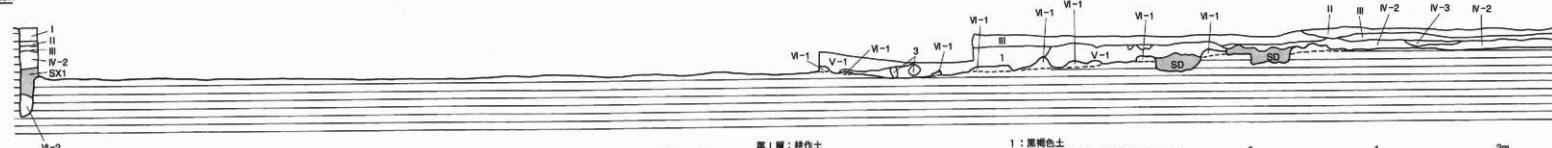


H.34.20m



北壁

H.34.20m



東壁

第I層：耕作土
第II層：旧耕作土
第III層：灰土
第IV-1層：褐色灰色土
—2層：褐色土
—3層：褐色土
第V-1層：黑色土
—2層：黑色土に灰色土が混じり若干砂混じる
—3層：黑色土に粒状の黄色粘土混じり
第VI-1層：黄色粘土
—2層：黄色砂質土

1：黒褐色土
2：褐色土、黑色土、黃色粘土の混じり土
3：灰褐色土、黑色土、黃色粘土混じり土

0 1 2m
(S=1:30)

第61図 北壁・東壁土層図

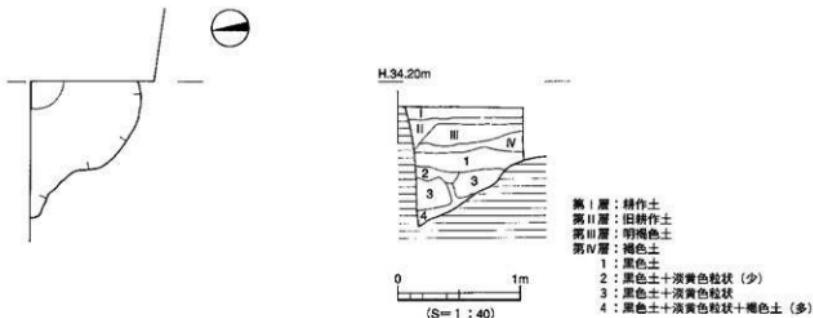
[1] 弥生時代

(1) 土坑

S K 4 (第59・62図)

調査区中央部北壁沿い、B 9 区に位置する。平面形態は、遺構が調査区外に展開するため特定できない。規模は東西1.2m、南北0.8m、深さ60cmを測る。断面形態は舟底状を呈し、埋土は黒色土で、下部には淡黄色土が混入する。遺物は、弥生土器の細片が1点出土している。

時期：遺構からの出土遺物が少なく、時期の特定はし難いが、ここでは弥生時代以降としておく。



(2) 溝

S D 6 (第59・63図)

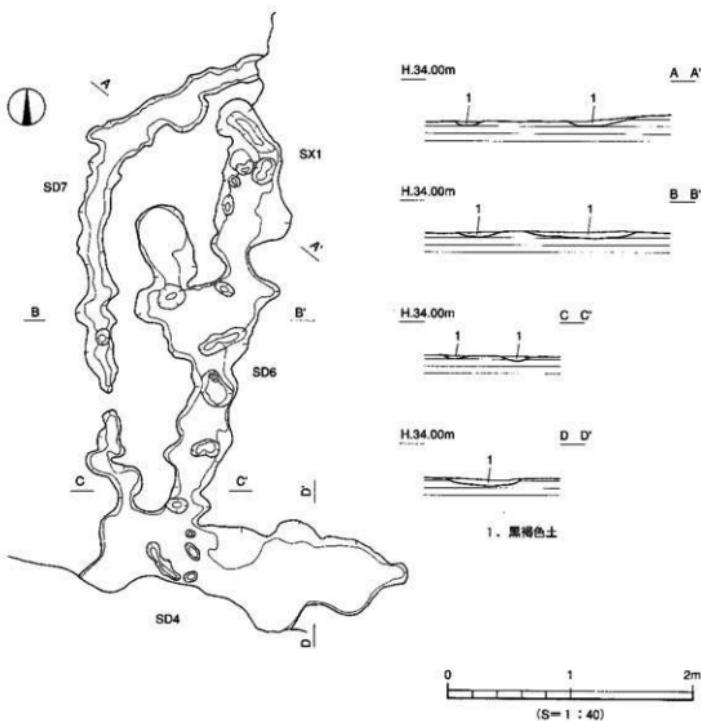
調査区東部、D12～E12区に位置し、南北に走る溝でS D 2、S D 4、S D 5、S X 1に切られる。S D 7との切り合い関係の確認に努めたが、判断できなかった。溝は遺存状態が悪く、ごく浅い溝である。規模は検出長9m、幅30～65cm、深さ2～5cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は黒褐色土である。遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、時期の比定は困難であるが、S X 1との切り合い関係から、ここではS X 1構築以前で、弥生時代とする。

S D 7 (第59・63図)

調査区東部、D12～E12区に位置し、北東から屈曲しながら南に走る溝で、S X 1に切られる。遺存状態は悪く、ごく浅い溝である。規模は検出長3.30m、幅16～34cm、深さ2～4cmを測る。断面形態は、レンズ状～逆台形状を呈する。埋土は黒褐色土である。出土遺物はない。

時期：遺構の時期を比定しうる出土遺物がなく、時期の比定はし難いが、S X 1との切り合い関係から、ここではS X 1構築以前で、弥生時代とする。



第63図 SD6（北側）・SD7測量図

(3) 性格不明遺構

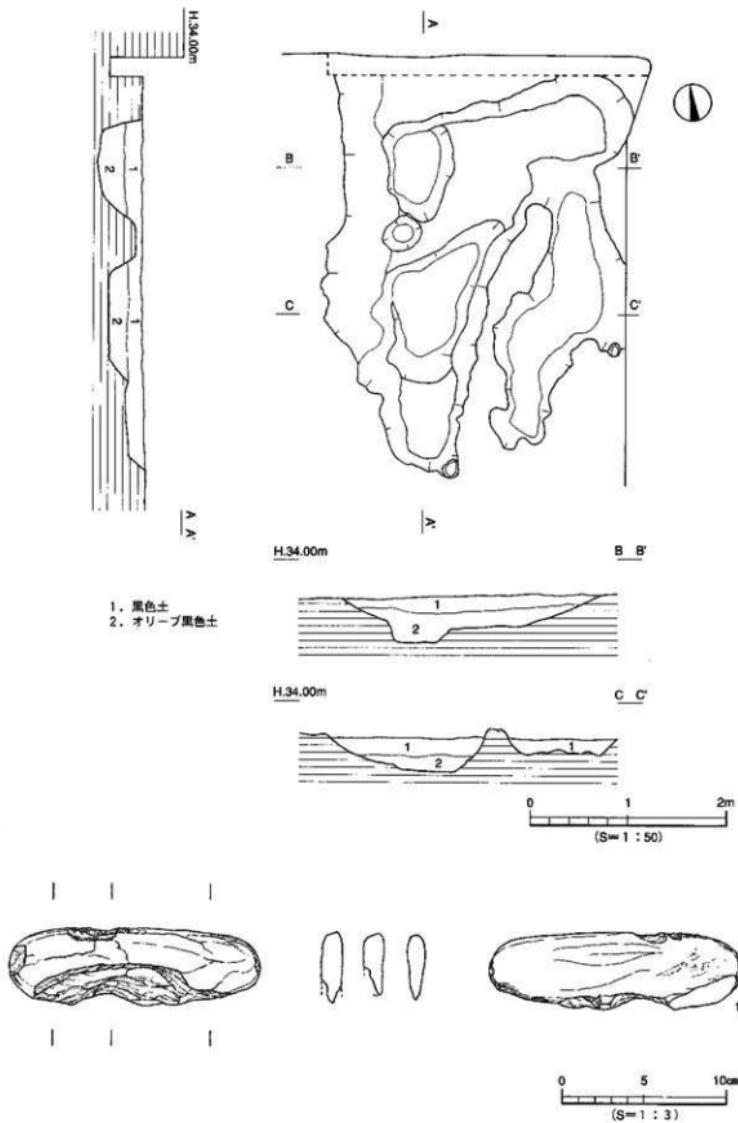
S X 1 (第59・64図)

調査区北東部隔C13～D13区に位置し、SD6、SD7を切る。南北に長い不定形な遺構で、遺構の北半は調査区外に続く。規模は東西2.5m、南北4.3m、深さ40cmを測る。埋土は上部が黒色土、下部がオリーブ黒色土になる。遺物は、弥生土器の小片と石製品が数点出土している。

出土遺物（第64図）

1は緑色片岩製石庖丁の未製品である。扁平な長方形態の素材で、両面は自然面を残す。背部には数ヶ所に打裂痕が見られ、刃部は大きく剥離している。

時期：遺構の埋没時期は、出土した遺物から弥生時代である。



第64図 S X 1測量図・出土遺物実測図

[2] 古墳時代

(1) 壴穴式住居址

S B 1 (第59・65図、図版19・22)

調査区南西部隅、C・D 1～2区に位置する。遺構の西半は調査区外へ続き、遺構のほぼ全体をS B 2に切られる。遺構の遺存状況は悪く、周壁溝と主柱穴（P 1・P 2）とを検出した。遺構の平面形態は隅丸方形を呈するとみられ、規模は南北検出長2.80m、東西検出長2.20mを測る。主柱穴の規模は直径20～24cm、深さ21～24cmである。主柱穴の埋土は黒色土（黄色土含）である。周壁溝の規模は幅6～20cm、深さ2～3cmを測る。遺物は、土器小片があり、このなかには貝殻施文をもつ弥生前期の壺脛部片（2）がある。

時期：出土遺物は古い時代の混入品とみられ、S B 2との切り合い関係から5世紀代とする。

S B 2 (第59・65図、図版19)

調査区南西部隅C・D 1～2区に位置する。遺構の西半は調査区外へ続き、S B 1を切る。平面形態は隅丸方形を呈するとみられる。規模は南北4.0m、東西検出長3.30mを測る。周壁溝は幅7～42cm、深さ2～4cmを測る。主柱穴は4基P 3～P 6で、埋土は、黄色土を含む黒色土である。周壁溝と、周壁溝東辺から延びる間仕切り状の小溝3条（D 1～D 3）を確認した。規模は、小溝1（D 1）は検出長0.9m、幅14cm、深さ13cm、小溝2（D 2）は検出長0.65m、幅20cm、深さ6cm、小溝3（D 3）は検出長0.7m、幅20cm、深さ9cmを測る。小溝1～小溝2の距離は1.50mである。炉及びカマドとみられる施設は未検出である。住居址内中央部付近には、不整形な浅いくぼみを検出したが、灰や焼土は確認できなかった。住居址内からの遺物の出土はない。

時期：遺構の時期を比定できる出土遺物がなく、遺構の時期特定はし難いが、「久米常堰遺跡」（『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』 1989）で検出された竪穴式住居址の検出例に類似することから、本住居址の発見・埋没時期をここでは5世紀代としておく。

(2) 掘立柱建物址

掘立1 (第59・66図)

調査区北部中央、B・C 7～8において検出した建物址である。北辺の一部は調査区外に続く。規模は2間（3.8m）×2間（3.6m）以上の建物で、軸方向は12°東に振る。柱間は東西1.9～1.9m、南北1.75～1.85mを測る。柱穴の平面形態は方形～円形を呈し、規模は径50～60cm、深さ33～46cmを測る。柱穴埋土は褐灰色土、淡黄色土および両者の混合土からなる。柱穴からは須恵器壺蓋1点（P 1）と、土師器の小片が少量出土している。

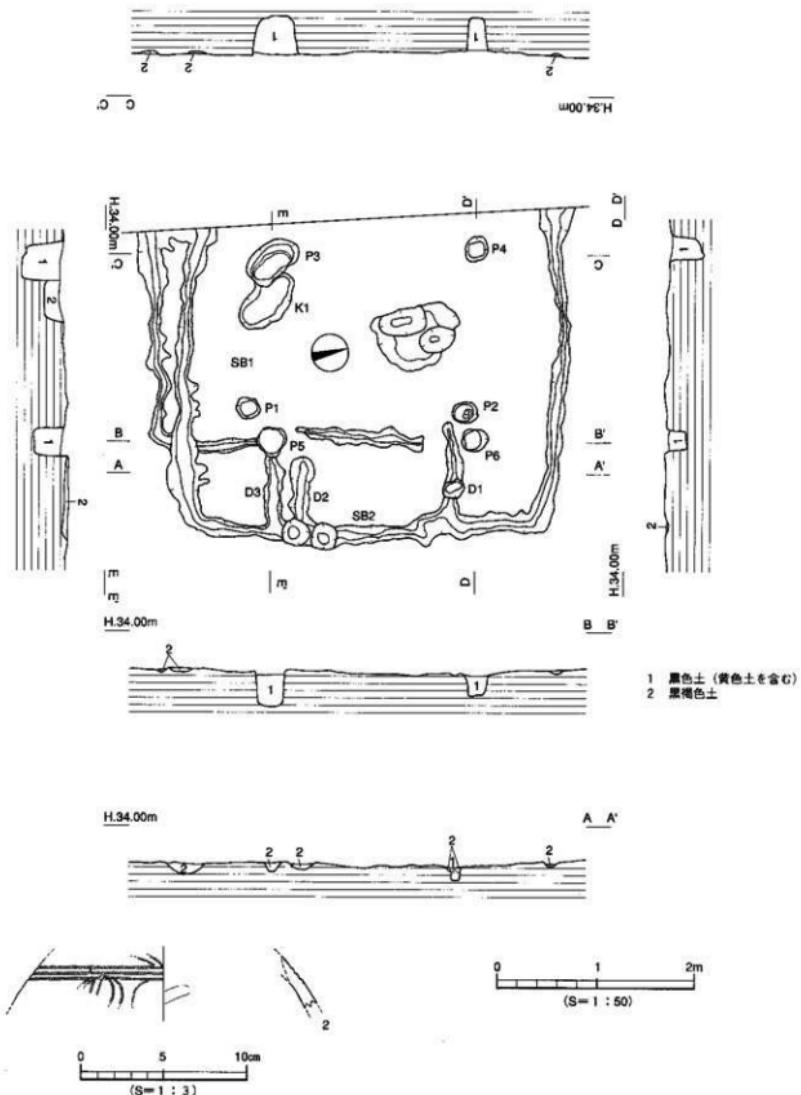
出土遺物（第66図）

3は須恵器の壺蓋である。口縁部はほぼ垂直に下り、口縁端部は凹面を呈する。

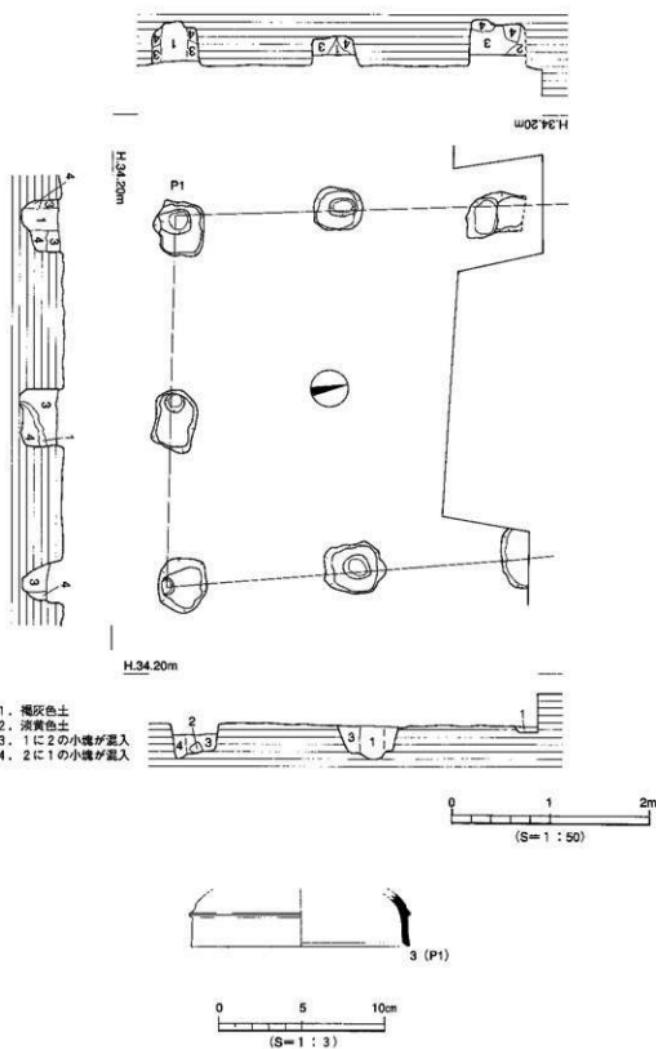
時期：出土した須恵器片の特徴から、本建物址の時期は5世紀末～6世紀初頭以降になる。

掘立2 (第59・67図)

調査区北西部、A・B 2区～A・B 4区において検出した建物址である。本建物址の南部から東部には、逆「L」字状に樹列S A 1が取り付く。本建物址の北辺部は調査区外に続く。主軸は11°東に



第65図 SB1・SB2測量図・SB1出土物実測図



第66図 据立 1 测量図・出土遺物実測図

振り、掘立 1 とほぼ等しい軸方向を持つ。規模は 2 間 (3.8m) × 2 間 (3.4m) 以上で、柱間は東西 1.8~2.0m、南北 1.6~1.8m を測る。柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径 15~22cm、深さ 7~28cm を測る。柱穴埋土は黒色土で、淡黄色土が混入するものがある。柱穴からは、弥生土器の細片が少量出土している。

時期：本建物址からは時期を比定しうる出土遺物がなく、遺構の時期は特定できない。ただし、南部及び東部に S A 1 が取り付くとするならば、S A 1 出土遺物の特徴から 6 世紀代となる。

掘立 3 (第59・68図)

調査区中央や西部、C・D 5 区～C・D 6 区で検出した建物址である。掘立 3 柱穴の一部は S K 2 床面にて検出し、S K 2 に切られている。規模は 2 間 (4.0m) × 2 間 (3.9m) の總柱建物址で、柱間は東西 1.9~2.0m、南北 1.9~2.0m を測る。柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径 25~45cm、深さ 38~65cm を測る。柱穴埋土は褐灰色土で、一部に黄色粘土を含んでいる。柱穴 P 1 からは須恵器小片と土師器細片が少量出土している。

出土遺物 (第68図)

5 は須恵器坏蓋の口縁部である。口縁部は直に下り、端部は凹面をなす。

時期：出土遺物と埋土から、本建物址の時期は 6 世紀代とする。

掘立 4 (第59・69図)

調査地中央部、D 7・8 区において検出した。規模は 1 間 (2.4m) × 1 間 (2.1m) を測る。柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径 25~40cm、深さ 20~30cm を測る。柱穴埋土は黒褐色土で、柱穴からの遺物の出土はない。

時期：時期を比定できる遺物の出土はないが、本建物址の主軸方位や柱穴の規模等は掘立 3 と類似する。したがって、本建物址の時期は掘立 3 と同時期とし、6 世紀代とする。

(3) 檻列

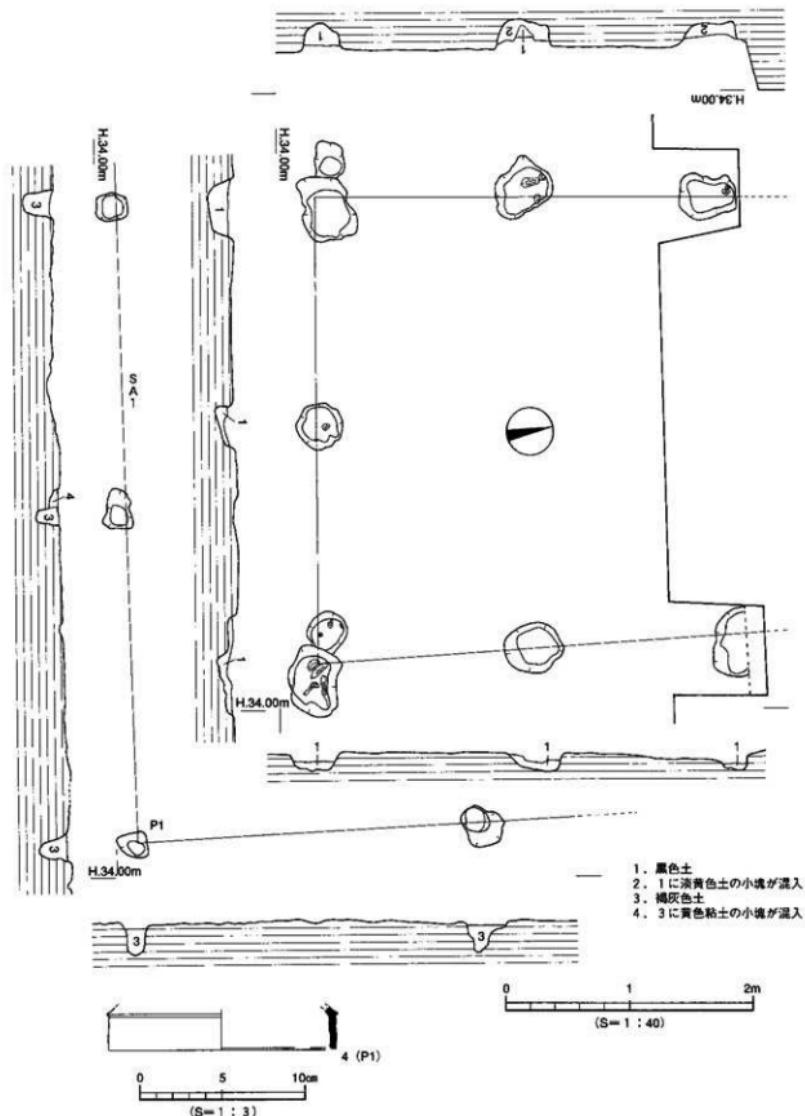
S A 1 (第59・67図)

調査区西北部、B 2 ~ B・C 4 区に位置する。掘立 2 に取り付くとみられる。掘立 2 の南部及び東部を逆「L」字状に囲うようにあり、東部は北方に続く。檻列の規模は東西 2 間 (5.10m)、南北 1 間 (2.70m) 以上である。柱穴の平面形態は方形～円形を呈し、規模は径 20~30cm、深さ 19~27cm を測る。また、掘立 2 に対する S A 1 の南辺及び東辺の距離は南辺 1.55m、東辺 1.30~1.35m を測る。柱穴埋土は褐灰色土で、黄色粘土が混入するものもある。柱穴 P 1 からは、須恵器の小片と弥生土器の細片が数点出土している。

出土遺物 (第67図)

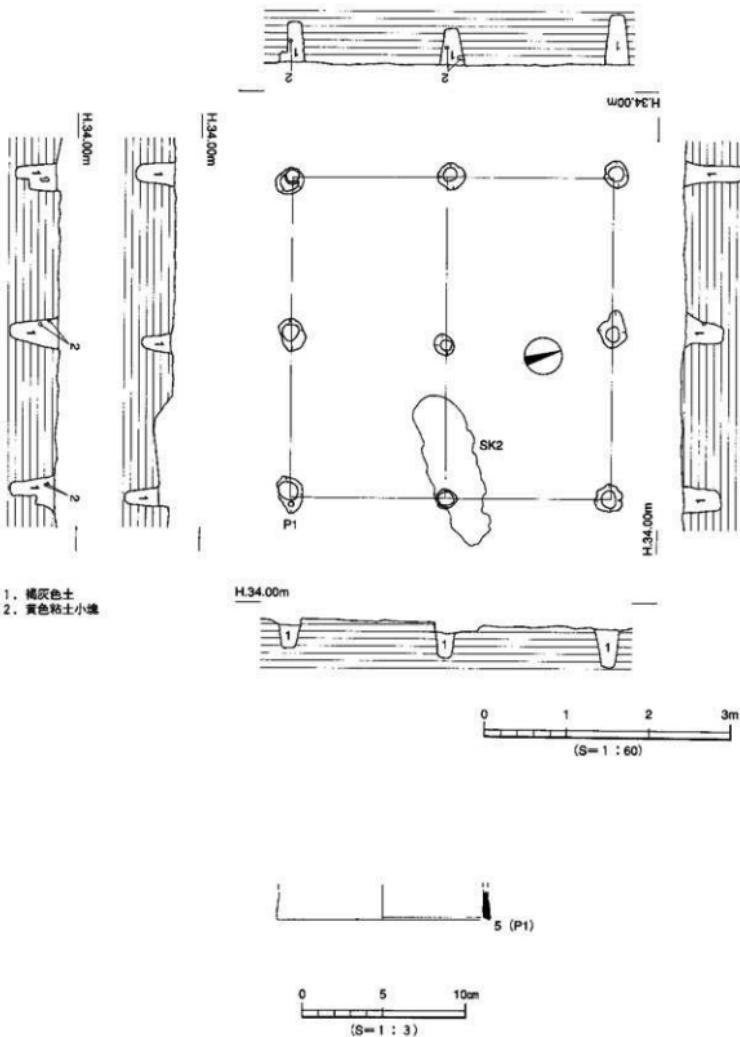
4 は須恵器坏蓋の口縁部である。口縁部はほぼ直に下り、端部は凹面をなす。

時期：出土した須恵器片の特徴から、遺構の時期は 6 世紀代とする。

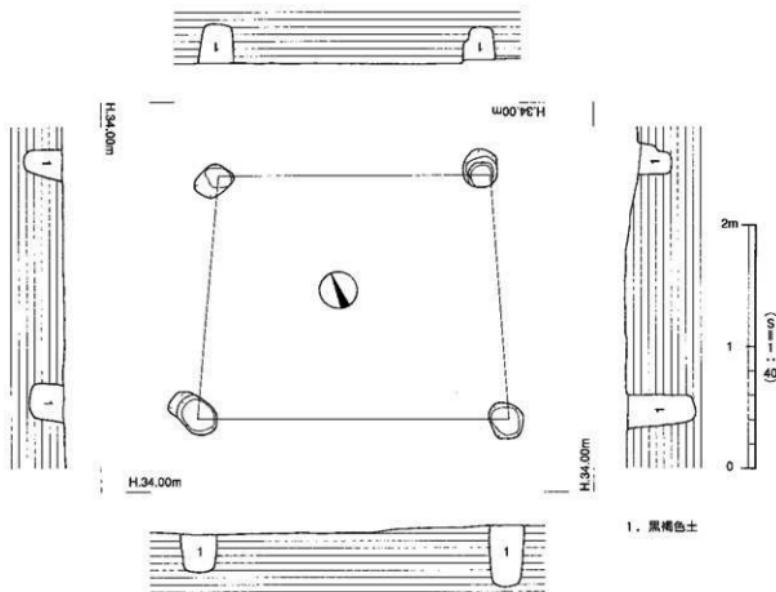


第67図 挖立2・S A 1測量図・S A 1出土遺物実測図

遺構と遺物



第68図 挖立3測量図・出土遺物実測図



第69図 掘立4測量図

[3] 中世

(1) 溝

S D 1 (第59・70図、図版20)

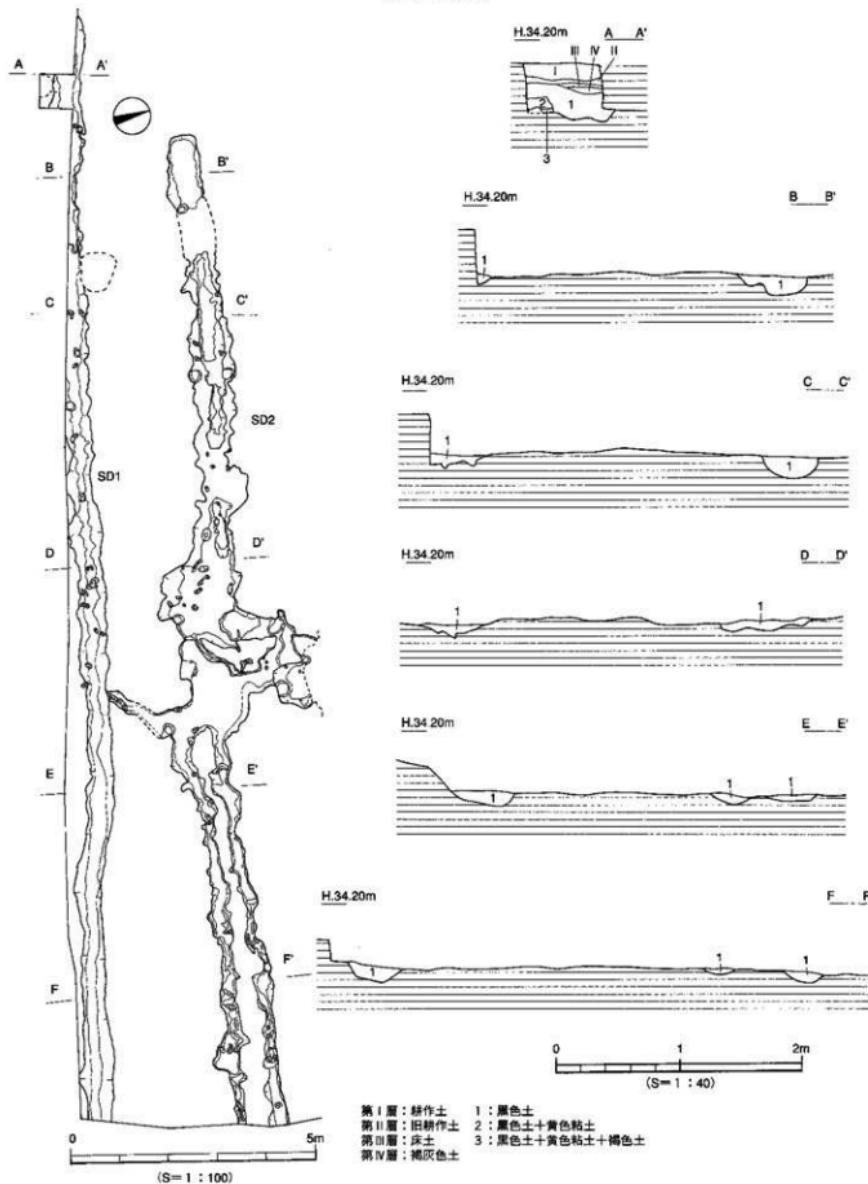
調査区南部、E 1～H19区に位置し、東西に走る溝である。規模は検出長55m、幅10～60cm、深さ8～10cmを測る。断面形態は船底状を呈する。埋土は黒色土で、部分的に黄色粘土や褐色土が混入する。断面観察からは、砂層や礫層の堆積はみられない。遺構からは弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、備前焼小片が出土している。

出土遺物 (第71図)

6は鍋の口縁部片である。口縁端部は面をなし、凹みをもつ。7は須恵器の高杯の口縁部で、端部は丸くおさめる。

時期：出土した遺物から、遺構の埋没時期は15世紀代である。

遺構と遺物



第70図 SD1・SD2測量図



第71図 SD 1出土遺物実測図

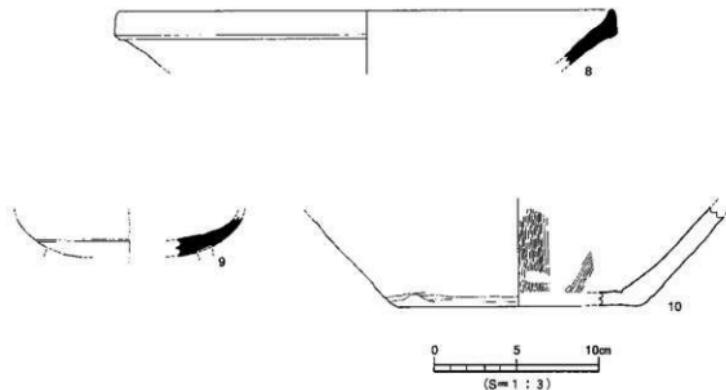
SD 2 (第59・70図、図版20)

調査区南部、E 6～F 13区に位置し、SD 1と並行して走る溝で、SD 6を切る。溝の東半は2条に分かれる。規模は検出長38m以上、幅50～130cm、深さ20～25cmを測る。断面形態は船底状を呈する。埋土は黒色土で、砂層や礫の堆積はみられない。遺構からは弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、備前焼の小片が出土している。

出土遺物 (第72図)

8は東播系挂鉢の口縁部である。9は須恵器で、高台付の碗になる。10は備前焼の擂鉢で内面に9条の櫛描条線が放射状に施される。

時期：出土した遺物から、遺構の埋没時期は15世紀代である。



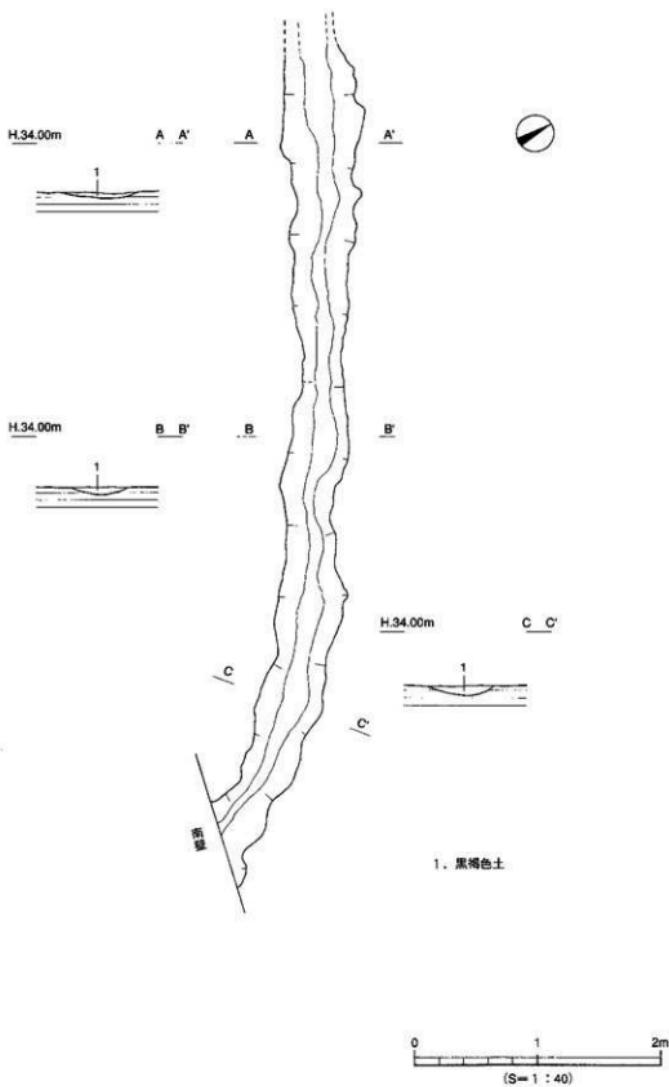
第72図 SD 2出土遺物実測図

SD 3 (第59・73図)

調査区西部南、D 3～E 5区に位置し、北西から調査区南壁へ走る溝で、南部は調査区外に延びる。溝の遺存状態は悪く、西部の竪穴住居址SB 1・2付近で消失する。規模は検出長6.5m、幅30～65cm、深さ3～5cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は黒褐色土である。遺構からは、土師器片が少量出土している。

時期：出土遺物が小片のため、時期を特定することは困難であるが、ここでは古墳時代以降とする。

遺構と遺物



第73図 SD 3測量図

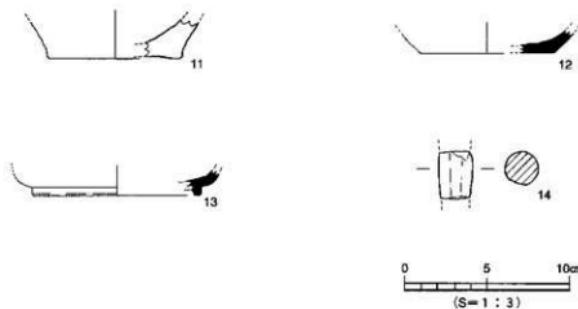
SD 4 (第59・75図)

調査区東部、B～E10区～E13区に位置し、北から東に「L」字状に走る溝である。遺構は、第VI層黄色粘土上面で検出した。規模は検出長南北7.4m、東西検出長29m、幅80～150cm、深さ10～30cmを測る。断面形態はレンズ状～逆台形状を呈する。埋土は黒褐色土で、黄褐色粒が混入する。断面観察では、砂や礫の堆積はみられず、流水溝ではない。遺構からは弥生土器、須恵器、土師器、土釜の小片数点が出土した。

出土遺物 (第74図)

11は弥生土器。平底の底部である。12は須恵器の底部である。底部は回転糸切り痕が残る。13は須恵器高台付きの坏である。高台の接合部は胴体部と底部の境付近に付く。14は土師質の三足付土釜または鍋の脚部である。

時期：出土遺物から、遺構の時期は14～15世紀代である。



第74図 SD 4 出土遺物実測図

SD 5 (第59・76図)

調査区東部、E11～E13区に位置し、SD 6を切って東西に走る溝である。遺存状態は悪く、ごく浅い溝である。規模は幅10～40cm、深さ2～5cm、検出長7.5mを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は黒褐色土である。遺構からは、須恵器片と瓦器底面部片が少量出土している。

出土遺物 (第76図)

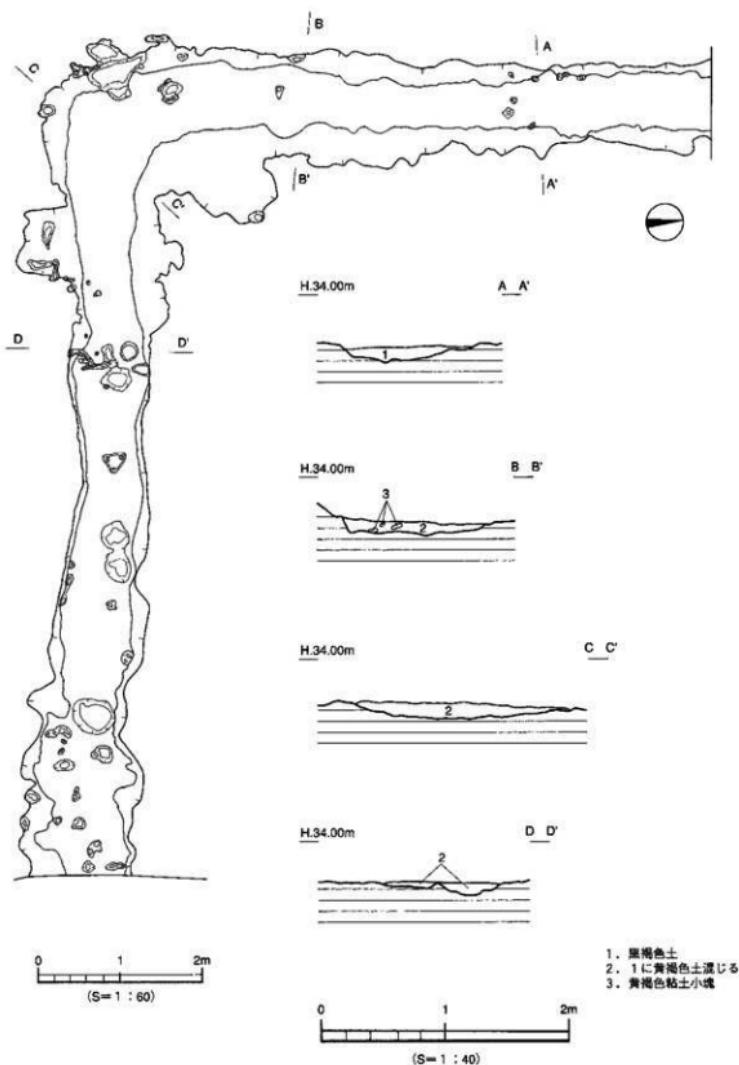
15は土師皿の底部である。底部に回転糸切り後の、板状圧痕が見られる。

時期：出土遺物から、遺構の時期は13世紀代である。

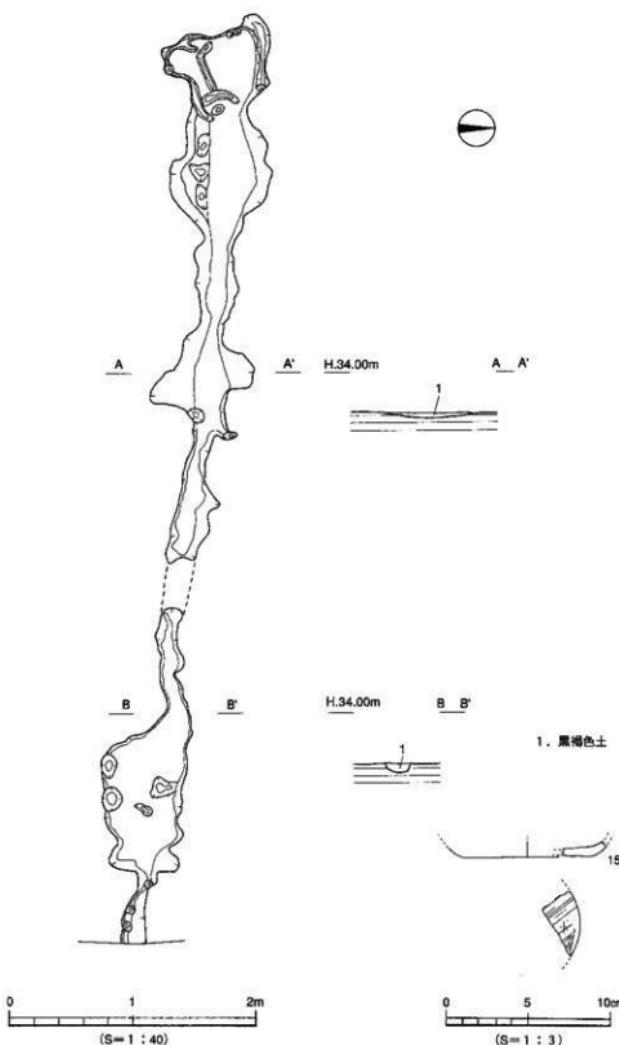
(2) 土 坑

SK 1 (第59・77図)

調査区中央部、D 8区に位置し、SK 3に切られる。平面形態は不整形な円形である。規模は東西2.10m、南北1.65m、深さ16cmを測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は上部が褐灰色土で、下部が淡黄色土である。遺構からは弥生土器、須恵器、土師器、瓦器の小片が数点出土している。



第75図 SD 4 測量図



第76図 SD 5測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第77図）

16は壺形土器の口縁部である。端部には、凹線文を3条施す（弥生中期後半）。17は土師器の坏である。底部に回転糸切り痕を残す。18は須恵器坏身の口縁部である。19は和泉砂岩を石材とした砥石である。一面はやや凹む。

時期：出土遺物17の特徴から、遺構の廃棄・埋没時期は中世にする。

S K 2（第59・78図）

調査区中央部、D 6区に位置し、掘立3を切る。平面形態は不整形な楕円形である。規模は長軸1.90m、短軸0.65m、深さ14cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は褐色土である。床面では掘立3の柱穴1基を検出した。遺構から遺物の出土はない。

時期：遺構の埋土がS K 1に類似することから、遺構の廃棄・埋没時期は中世とする。

S K 3（第59・78図）

調査区中央部、D・E 8区に位置し、S K 1を切る。平面形態は南北に長い楕円形である。規模は東西0.5m、南北1.0m、深さ14cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は褐色土である。遺物は弥生土器、土師皿の細片が少量出土している。

時期：遺構の切り合い関係と出土遺物から、遺構の廃棄・埋没時期は中世になる。

[4] その他の遺構と遺物（第79図）

調査地内からは、87基の柱穴及び小穴が検出された。柱穴からの遺物の出土は少ない。ここでは表掲の資料も合わせ、図化できる土器に限り資料の提示を行う。

(1) 柱穴出土遺物

20はS P 51出土で、弥生時代の壺形土器口縁部片である。頸部内面に稜をもつ。21はS P 26出土で、土師器の坏で体部下半に稜をもつ。底部は回転糸切り。13世紀代。

(2) 出土地不明遺物

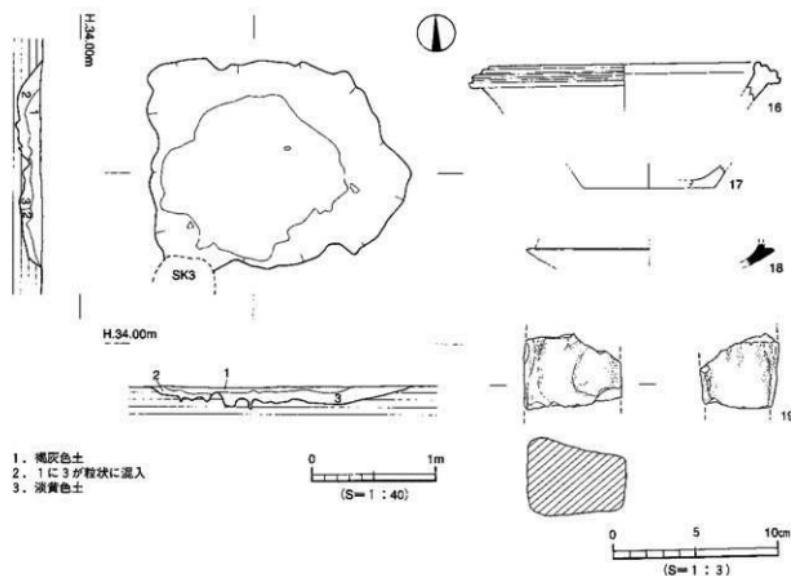
22は須恵器高坏形土器の脚部である。透かし孔の一部が残る。据部は短く内湾する。23は土師質碗の底部である。高台は断面三角形を呈し、胴部と底部の境付近に貼り付ける。24は肥前系皿の口縁部である。灰オリーブ色の釉がかかる。25は龍泉系青磁碗の底部である。内面見込みには花文のスタンプが見られる。高台断面は四角形で削り出す。26は土師質三足付羽釜の口縁部である。口縁下に丸みを帯びた「コ」の字状のタガが貼り付く。27は土師質三足付羽釜の口縁部である。口縁下に断面三角形のタガが貼り付く。

4. 小 結

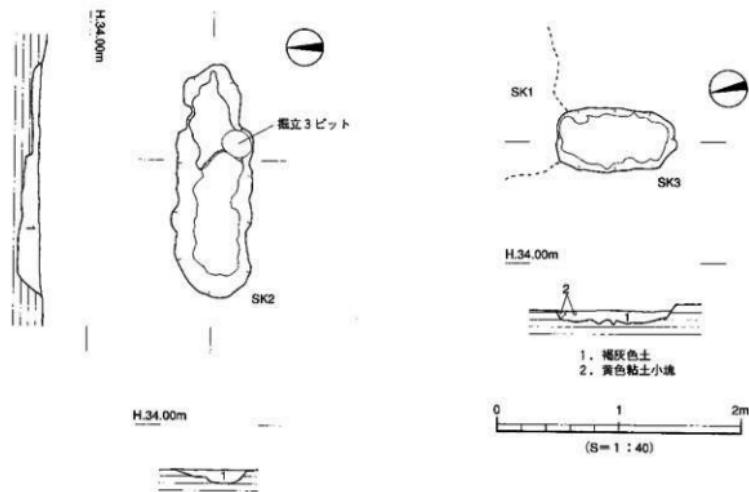
今回の調査では、弥生時代から中世までの遺構を検出した。

弥生時代：弥生時代の遺構にはS K 4、S D 6・7、S X 1がある。遺物は少なく、ピット内出土

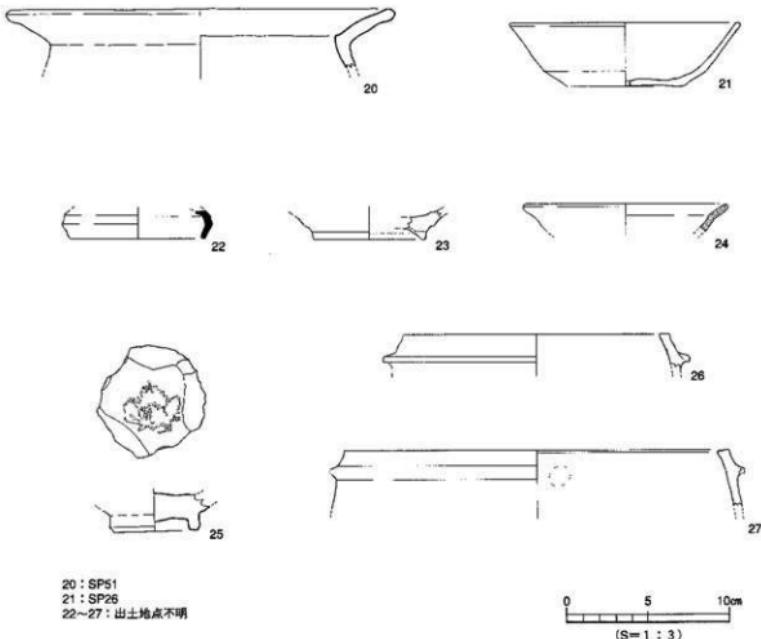
久米才歩行遺跡 5 次調査地



第77図 SK 1 測量図・出土遺物実測図



第78図 SK 2・SK 3 測量図



第79図 柱穴及び出土地点不明遺物実測図

品や表探資料が多数をしめる。久米才歩行遺跡では、これまでに南側の2~4次調査地で弥生時代の遺構と遺物を確認している。今回の資料は、弥生集落の範囲が、遺跡の北東部にも広がることを知る資料になった。

古墳時代：S B 2は5世紀代の堅穴式住居址で住居内部に小溝をもつ。堅穴式住居址内に間仕切り状の小溝を持つ住居址は、東本遺跡4次調査地2区で検出された円形の大型堅穴式住居址 S B 203や、北久米常埋遺跡の方形堅穴式住居址 S B 1等があげられるが、平野内での資料数は少ない。堅穴式住居の構造研究にとっては貴重な資料である。

6世紀代の掘立2は、南部から東部に横列(S A 1)を付設している可能性が高い。6世紀代の横列を伴った掘立柱建物址の検出は希少であり、注目される。

総柱建物址の掘立3と掘立4は、建物の軸方向や南北の柱間がほぼ同様であることから、同時期の建物址と思われ、集落構造が知られる良好な資料である。

中世：中世の溝SD4は、調査区内東部を北から東へ「L」字状に走る溝である。内部施設は確認できなかったが、区画溝の可能性が高い。なお、近隣の北久米町屋敷遺跡からは、出土遺物や方位がSD4と同じ溝が検出されている。

東西に平行して走る溝SD1及びSD2は、出土遺物の内容から同時期の遺構といえる。SD1は

55m以上、SD2は38m以上となり、その性格は、区画溝または道路が考えられる。

今回の調査では、久米才歩行遺跡の古墳時代と、中世の居住域を特定する資料が得られた。くわえて、わずかではあるが当時の集落構造を解明する資料が得られている。今後は、同時代集落の範囲確認と、古代の来住台地上に展開する官衙遺跡群や、中世の北久米町屋敷遺跡との関連を検討する必要がある。

表36 積穴式住居址一覧

積穴 (SD)	時 期	平面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋 土	床面積 (m ²)	主柱穴 (本)	内部施設			周壁溝	備 考
							高床	土坑	炉		
1	5世紀代	隅丸方形	280×2.20	黒色土	6.16	2+α				○	SB2に切られる。
2	5世紀代	隅丸方形	4.00×3.30	黒色土	13.2	4				○	SB1を切る。

表37 据立柱建物址一覧

据立	規模 (間)	方 向	桁 行		梁 行		方 位	床面積 (m ²)	時 期	備 考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
1	2×2	東西	3.8	1.9・1.9	3.6+α	1.75・1.85	E-12°-N	12.96+α	5世紀以降	
2	2×2	東西	3.8	1.85・1.95	3.4+α	1.8・1.6	E-11.5°-N	12.95+α	6世紀代	
3	2×2	南北	4.0	1.95・2.05	3.9	1.9・2.0	E-17.5°-N	14.44	6世紀代	
4	1×1	東西	2.4	2.3-2.4	2.1	2.0-2.1	E-25°-N	5.04	6世紀代	

表38 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規格(m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	E1-H19	舟底状	55.0×0.1~0.6×0.08~0.1	東西	黒色土	弥生・須恵 土師・瓦器 衛前	15世紀代	
2	E6-E10 F10-F13	舟底状	38.0×0.05~1.3×0.2~0.25	東西	黒色土	弥生・須恵 土師・瓦器 衛前	15世紀代	SD6を切る。
3	D3・E4・E5	レンズ状	65×0.3~0.65×0.03~0.05	北西~南東	黒褐色土	土師	古墳以降	
4	B10-E10~ E13	レンズ状~ 逆台形状	36.4×0.8~1.5×0.01~0.3	東~北	黒褐色土 (黄褐色粘土)	弥生・須恵 土師	14~15世紀	SD6を切る。
5	E11-E13 F12・F13	レンズ状	7.5×0.1~0.4×0.02~0.05	東西	黒褐色土	須恵・瓦器	13世紀代	SD6を切る。
6	D12・E12	レンズ状	9.0×0.2~0.65×0.02~0.05	南北 東西	黒褐色土	弥生	SD2・4・5に 切られる。	
7	C12・D12・ E12	レンズ状~ 逆台形状	33×0.16~0.34×0.02~0.04	北東~南	黒褐色土	弥生		

表39 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規格(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (m ²)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	D8	不整円形	舟底状	2.1×1.65×0.16	2.8	褐灰色土	弥生・須恵 土師・瓦器	中世	SK3に切ら れる。
2	D6	不整形~ 椭円形	皿状	1.9×0.65×0.14	0.9	褐灰色土		中世	掘立3を切 る。
3	D-E8	椭円形	レンズ状	1.0×0.5×0.14	0.5	褐灰色土	弥生・土師	中世	SK1を切る。
4	B9	円形	舟底状	1.2×0.8×0.6	0.75	黒色土	弥生	弥生以降	

表40 性格不明遺構一覧

性格 不明 遺構 (SK)	地区	平面形	断面形	規格(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (m ²)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	C13 D13	不定形	不定形	4.3×2.5×0.4	5.7	黒色 オリーブ色	弥生 石製品	弥生	SD6を切る。

遺物観察表

表41 SX1出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
1	石盾丁	ほぼ完形	緑色片岩	15.2	4.8	1.2	141.7	未収集	

表42 SB1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土成	備考	図版
				外面	内面				
2	壺	残高 3.1	貝殻施文。	マメツ	ナデ	乳灰色 乳灰黄色	石・長(1~4) ○		22

表43 挖立1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土成	備考	図版
				外面	内面				
3	坏壺	口径(13.0) 残高 3.2	口縁はほぼ直に下がる。端部は凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		

表44 SA1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土成	備考	図版
				外面	内面				
4	坏壺	口径(13.8) 残高 2.6	口縁はほぼ直に下がる。端部は凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	暗オリーブ灰色 灰色	長(0.5) ○	自然釉	

表45 挖立3出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土成	備考	図版
				外面	内面				
5	坏壺	口径(12.8) 残高 1.8	直に下がる口縁部。端部は凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		

表46 SD出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土成	備考	図版
				外面	内面				
6	壺	残高 3.9	口縁部片。口縁端部は面をなし、1条の田字が巡る。	マメツ	ヨコナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1~4) ○	SD1	
7	窯壺	口径(10.8) 残高 2.5	窯林の口縁部片。端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	黒褐色 灰黄褐色	密 ○	SD1	
8	こね鉢	口径(29.7) 残高 3.3	こね鉢の口縁部。束縄系。	ココナデ	ココナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	石・長(0.5~1) ○	SD2	
9	高台付碗	残高 2.3	高台部は剥落。	回転ナデ	回転ナデ	灰色・灰白色 灰白色	密 ○	SD2	
10	壺鉢	底径(14.5) 残高 6.0	壺前縁・壺鉢の底部。内面に9条の脚柱条線が、放射状に施される。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 灰色・にぶい黄褐色	石・長(1~3) 砂 ○	SD2	
11	壺	底径(7.9) 残高 2.3	平底の底部。	マメツ	マメツ	にぶい黄褐色 浅黄色	石・長(1~4) ○	SD4	
12	壺	底径(8.2) 残高 1.4	回転糸切りの底部。	ココナデ	ココナデ	灰色 灰色	密 ○	SD4	

SD 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内面)	胎 燒	土 成	備考	国版
				外 面	内 面					
13	坏	底径 (10.0) 残高 1.5	高台付坏。高台は底部と胴部の 境付近に付く。	ヨコナデ	マメツ	灰白色 灰白色	密△		SD4	
14	土釜 (鍋)	残高 2.9	三足付土釜 (鍋) の脚部。	マメツ		にぶい黄褐色	石・長(0.5~2) ○		SD4	
15	皿	底径 (7.5) 残高 1.0	土脚皿の底部。底部は板状工具 による調整有り。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石 (1~5) ○		SD5	

表47 SK1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内面)	胎 燒	土 成	備考	国版
				外 面	内 面					
16	壺	口径 (16.2) 残高 2.4	弥生型土器の口縁部。縁部に 四線文3条。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(0.5~2) ○			
17	坏	底径 (7.8) 残高 1.4	回転条切りの底部。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密○			
18	坏身	受部径 (14.9) 残高 1.3	坏身口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 暗灰色	密○			

表48 SK1出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	国版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
19	砥石	一部	和泉砂岩	4.5	5.9	4.7	159.9		

表49 柱穴及び出土地点不明遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内面)	胎 燒	土 成	備考	国版
				外 面	内 面					
20	壺	口径 (23.0) 残高 3.6	頭部内面に棱をもつ。	マメツ	①マメツ ②ナデ ③マメツ	橙色 明赤褐色・灰黃褐色	石・長(0.5~2) ○		SP51	
21	坏	口径 (14.0) 残高 3.8 底径 (7.1)	土脚坏。底部は回転条切り。	ヨコナデ	ココナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄色・墨褐色	石 (1~2) ○		SP26	
22	高坏	口径 (8.0) 残高 1.7	高坏脚の裾部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密○			
23	碗	底径 (6.8) 残高 1.8	土脚質。底の底部。貼付けの輪 高台は断面三角形。	ヨコナデ	マメツ	にぶい黄褐色・灰黃褐色 にぶい黄褐色	密○			
24	皿	口径 (12.2) 残高 1.7	肥前系皿の口縁。	施釉	施釉	灰オリーブ色 灰オリーブ色	密○			
25	碗	底形 5.0 残高 2.3	青磁の綫。見込部に花文スタン プ。	施釉	ナデ 無物	明オリーブ色にぬ褐色 明オリーブ灰色	密○			
26	土釜	口径 (16.0) 残高 2.3	土脚質。三足付釜の口縁部。口 縁下貼付けのタガの断面形は丸 味をおびた「コ」の字状。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(0.5~2) ○			
27	土釜	口径 (23.4) 残高 3.6	土脚質。三星付釜の口縁部。口 縁下貼付けのタガの断面形は三 角形。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1~4) ○			

第5章 おわりに

これまでに、久米才歩行遺跡3～5次調査地の調査報告をしてきた。最後に、報告した3ヶ所の調査成果と、既に調査報告が刊行されている2次調査地を含めて、久米才歩行遺跡の調査成果を整理して本章のまとめとする。

1. 遺跡の概要

久米才歩行遺跡は、昭和63年に遺跡として認知された。遺跡は、久米官衙遺跡群のあるいわゆる「米住台地」の北を流れる（区画する）堀越川の北岸に位置する。遺跡の範囲は南は堀越川、北は北久米町屋敷遺跡、西は現在の国道11号線を境に南久米片廻り遺跡、東は南久米町遺跡までとなり、東西340m、南北160m、約54,400m²となる。遺跡地内では、縄文時代晚期の土器片が最も古い遺物となり（4次調査地）、遺構では弥生時代前期後半が最も古く、以降は中世までに何某かの生活関連遺構が存在している。居住を示す竪穴式住居址や掘立柱建物址は弥生時代前期末～中期初頭、古墳時代巾～後期、古代、中世の各時代にあり、この地が居住空間として土地利用されていたことが明らかになってきている。また、遺跡の南境となる堀越川は古代まで久米才歩行遺跡3次調査地内の南半分を河川域としていたことも今回の調査成果である。以下、時代毎に遺構と遺物の整理をしてみたい。

2. 縄文晚期～弥生時代

縄文時代晚期の土器片数点が4次調査地で出土している。西の南久米片廻り遺跡からは突帯文期で器種構成が判明する土器片を確認しており、才歩行遺跡～南久米片廻り遺跡一帯に同時期の集落が存在していたことは確かであろう。しかしながら、未だに遺構の確認はなく、今後の調査に期待したい。

弥生時代では前期末～中期初頭の竪穴式住居址と土坑、中期中葉の土坑が2次調査地で検出されている。前期末～中期初頭の竪穴式住居址は検出例が当平野で数少なく、稀少例として貴重である。遺物では5次調査地で前期後半のタマキガイ系の貝殻施土器片が出土し、下関地域との関係が知られる資料である。4次調査地では自然流路の堆積土から前期末の土器や石器が出土し、当平野における弥生時代石器研究の検証をする資料が得られている。詳細は第3章4小節を参照していただきたい。担当者の加島は平野内の石鎚を集成し、定着期を推定した。当平野の石器研究が一步前進を見せてくる。

3. 古墳時代

5世紀後半の竪穴式住居址が5次調査地、6世紀前半の竪穴式住居址が2次調査地で検出されている。竪穴式住居址はいずれも平面形状が四角形で、5次調査地の住居址SB1には間仕切り溝があり、平野では数が少ない例となる（第4章4小節を参照）。出土品では、2次調査地SB1から白玉が出土しているが、当平野の5世紀後半～6世紀前半の住居址には散見される事例であり、廃棄時の祭祀行為の典型例といえる。掘立柱建物址は6世紀代の建物が5次調査地で4棟検出されている。5次調査地では総柱構造と側柱構造とが見られるが、資料の制約から新旧関係や組み合わせが明確に出来なかつた。集落構造の変遷を考える資料のひとつになり得るので、今後の周辺調査に期待したい。

4. 古代

7世紀前半の掘立柱建物址1棟と、古代に比定される掘立柱建物址1棟とが3次調査地で検出されている。方位や柱穴形状は久米官衙遺跡群の建物と共に通しており、それとの関係が注目されるが、現状では位置付けが難しい。また、4次調査地の南半部分はこの時期まで自然流路の影響が強く残っており、7世紀代の掘立柱建物（3次調査地の掘立1・2）は流路に近い位置に建築されたことが知られる。

5. 中世

久米才歩行遺跡では、中世の遺構が最も多く検出されている。

3次・4次調査地は東西に隣りあう調査地で、掘立柱建物址3棟、井戸1基、溝1条、土坑1基が検出されている。遺構の詳細な時期は明らかでないものもあるが、判明している遺構から時期を絞り込むと15~16世紀の遺構群と考えられる。それを前提に集落構造を見ると、南北に走る溝を境に、西側に建物2棟と土坑1基、東側に建物1基と井戸1基が配置されることになる。ただし、集落内を溝で区画することになり、検討の余地がある。

当平野における中世の集落構造は不明な点が多く、ここでの結果は基礎的資料の増加として評価されよう。

久米才歩行遺跡は、久米高畠官衙遺跡群の周辺地の景観を考える資料として、重要な遺跡である。今回の結果で課題となるのは、古代の建物の位置付けである。官衙遺構との関係は重要事項であり、今後の調査で解決しなければならない。

【文献】

田城武志・梅木謙一編 2004『来住・久米地区の遺跡Ⅳ』松山市教育委員会

写 真 図 版

写真図版データ

1. 造構は、主な状況については、 4×5 判や 6×7 判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、 35mm 判で補足している。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパー・アンギュロン90mm他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67 55mm他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール28~85mm他
フィルム	白 黒 プラスXパン・ネオパンSS・アクロス		
カラー	エクタクロームEPP・RDP III		

2. 遺物は、 4×5 判または 6×9 判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビューア-45G・69ロールフィルムホルダー
レンズ	ジンマーS 240mm F5.6他
ストロボ	コメット/C A32・C B2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	白黒 プラスXパン・ネオパンアクロス

3. 単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキーMD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードIV RCペーパー

4. 製版 写真図版175線

印刷 オフセット印刷

用紙 ニューVマット 菊版93.5kg使用

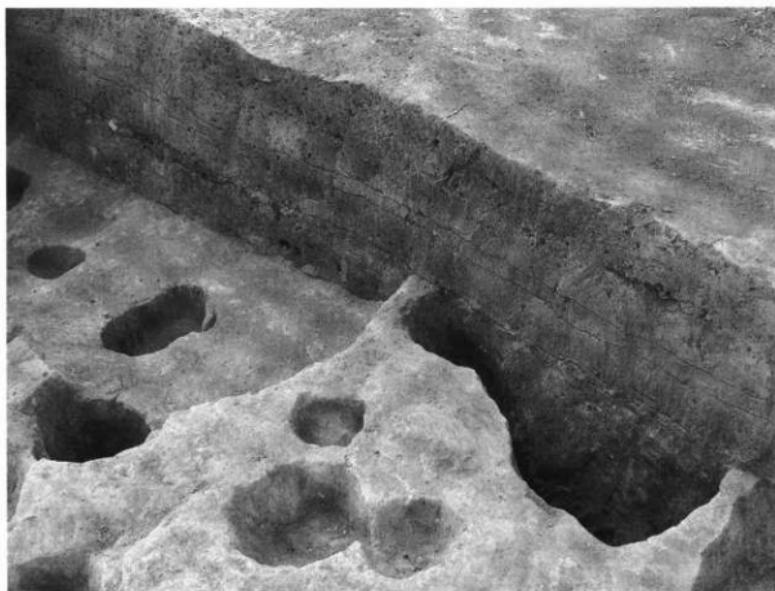
【参考】『埋文写真研究』vol.1 ~13 「報告書制作ガイド」

[大西朋子]

久米才歩行遺跡 3次調査地



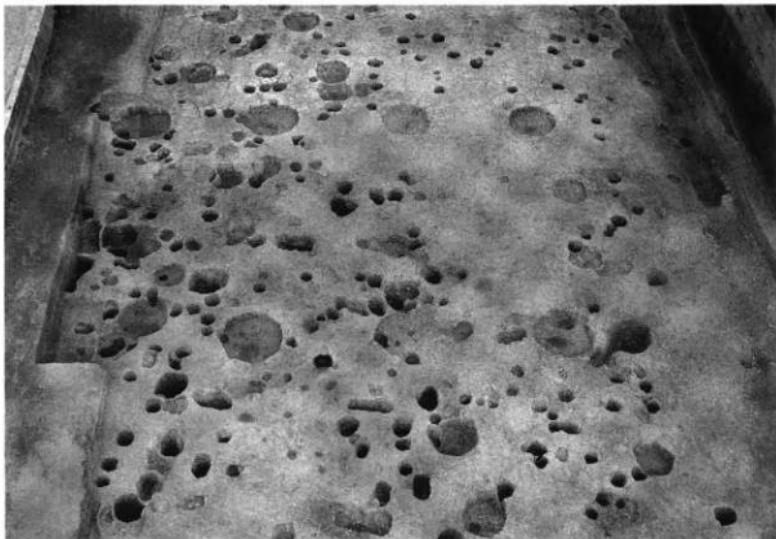
1 調査前の全景（北より）



2 西壁土層（北東より）



1 調査地全景（南より）



1 挖立 1 棟出状況（北より）

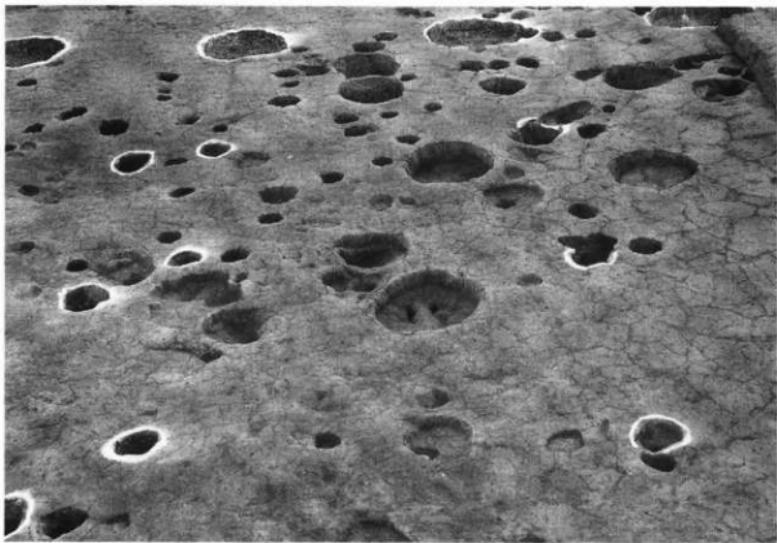


2 挖立 2 棱出状況（西より）

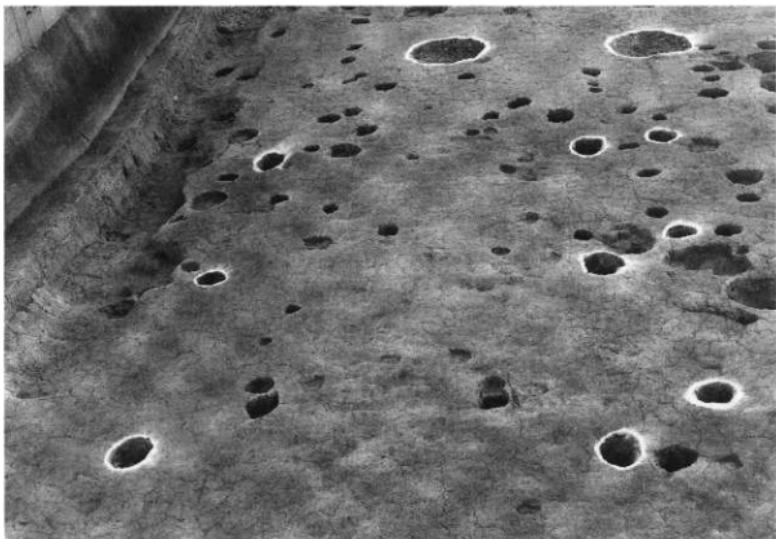
図版四



1 SK1 完掘状況（北より）



2 堀立4 完掘状況（北より）



1 挖立 3 完掘状況（北より）



2 S P 94 遺物出土状況（北より）

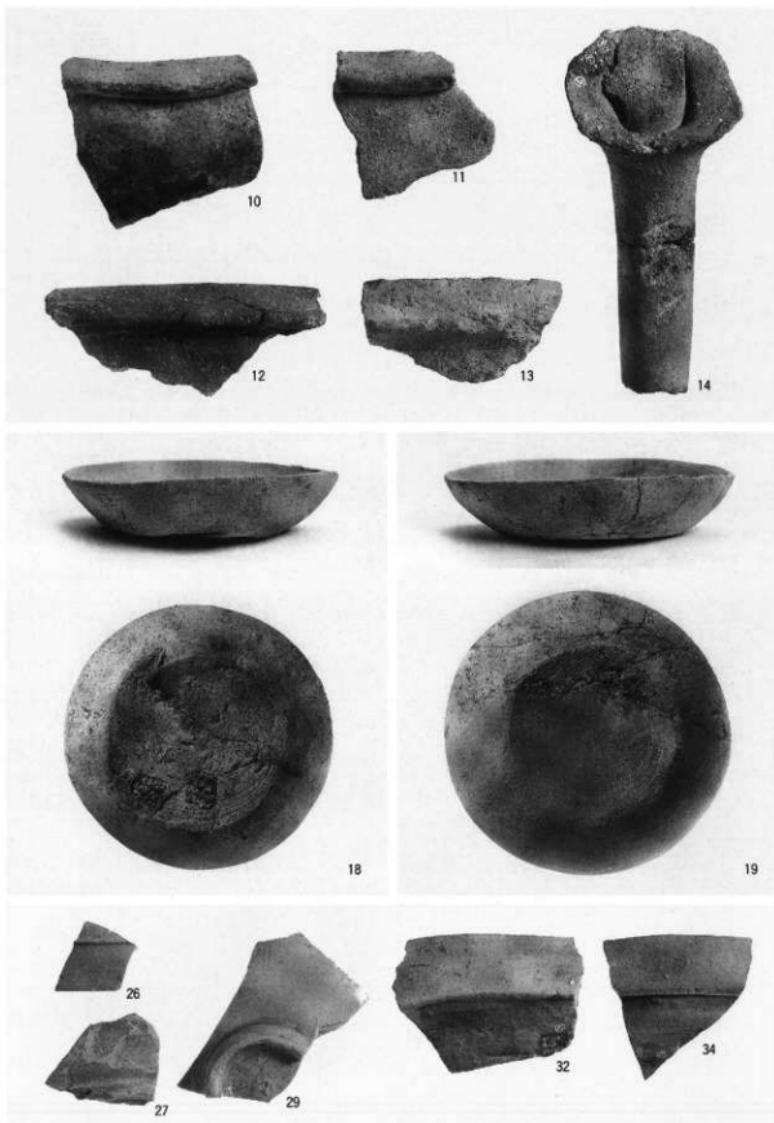
図版六



1 SD 1 検出状況（南より）



2 SD 1 遺物出土状況（北西より）



1 出土遺物 (SD 1・SP 94・SP 4・SP 345・SP 256・第III層)

図版八



1 調査前の全景（南西より）



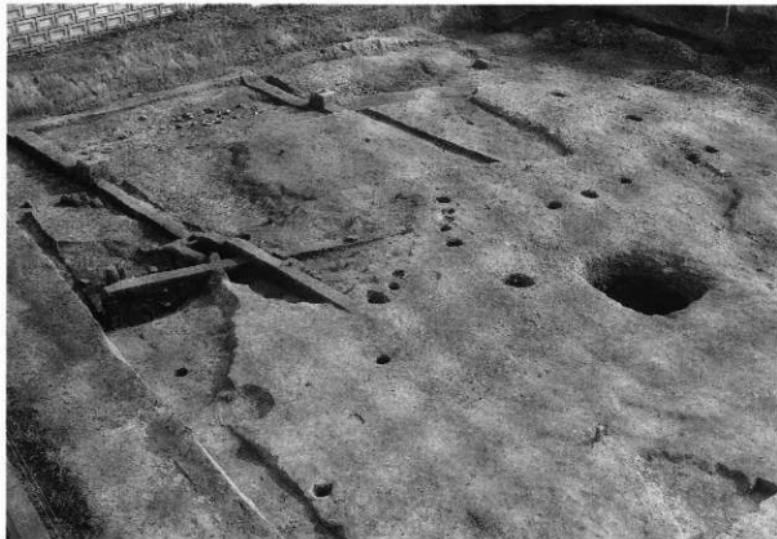
2 南壁土層（北より）



1 I区遺構検出状況（西より）



2 I区遺構完掘状況(I)（西より）



1 I区遺構完掘状況(2) (北西より)



2 II区S R201完掘状況 (北東より)



1 SR 201埋土④石鎌出土状況（東より）



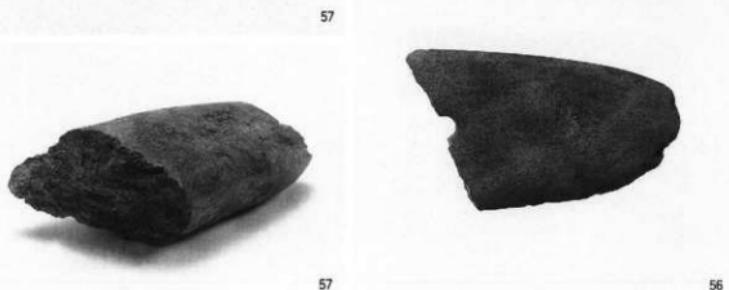
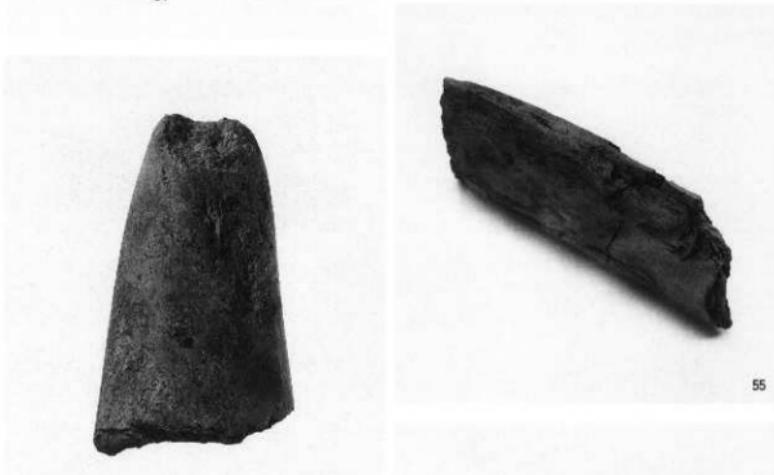
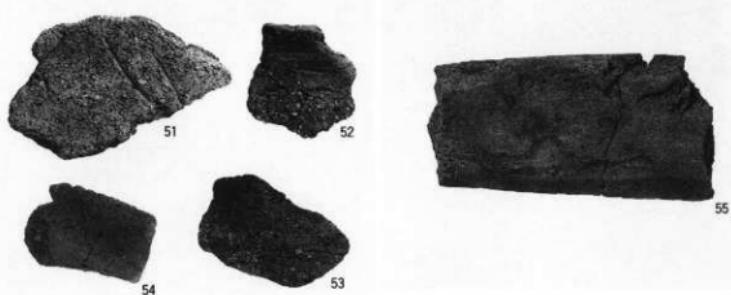
2 SR 201埋土③両刃石斧出土状況（北より）



3 遺構完掘状況（北西より）

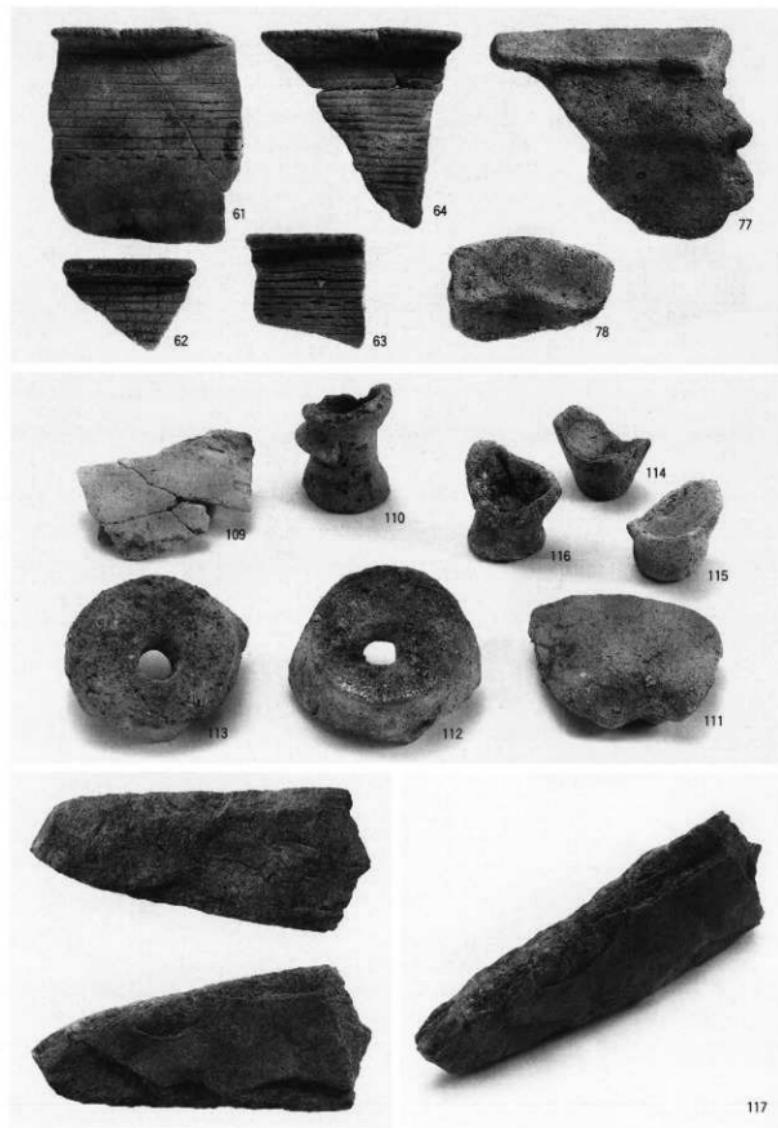


1 SR 201出土遺物（埋土④・埋土③(1)）



1 S R 201埋土③出土遺物(2)

図版一四



1 S R 201埋土②出土遺物(1)



118



118

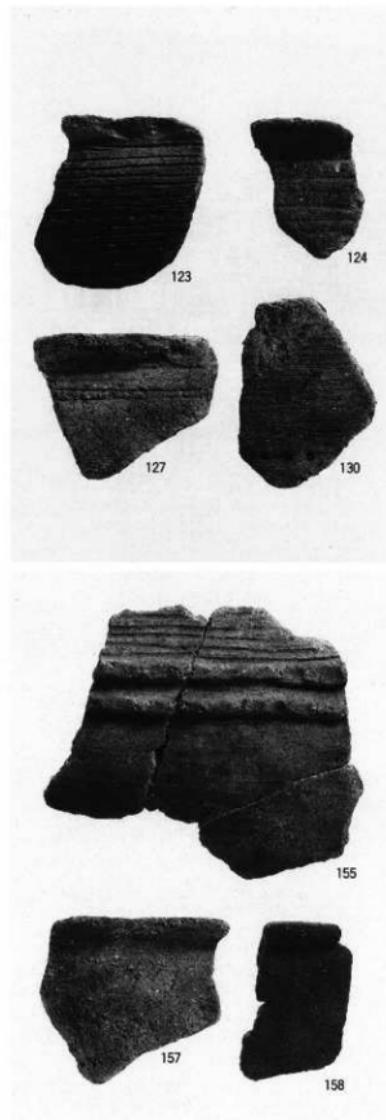


119

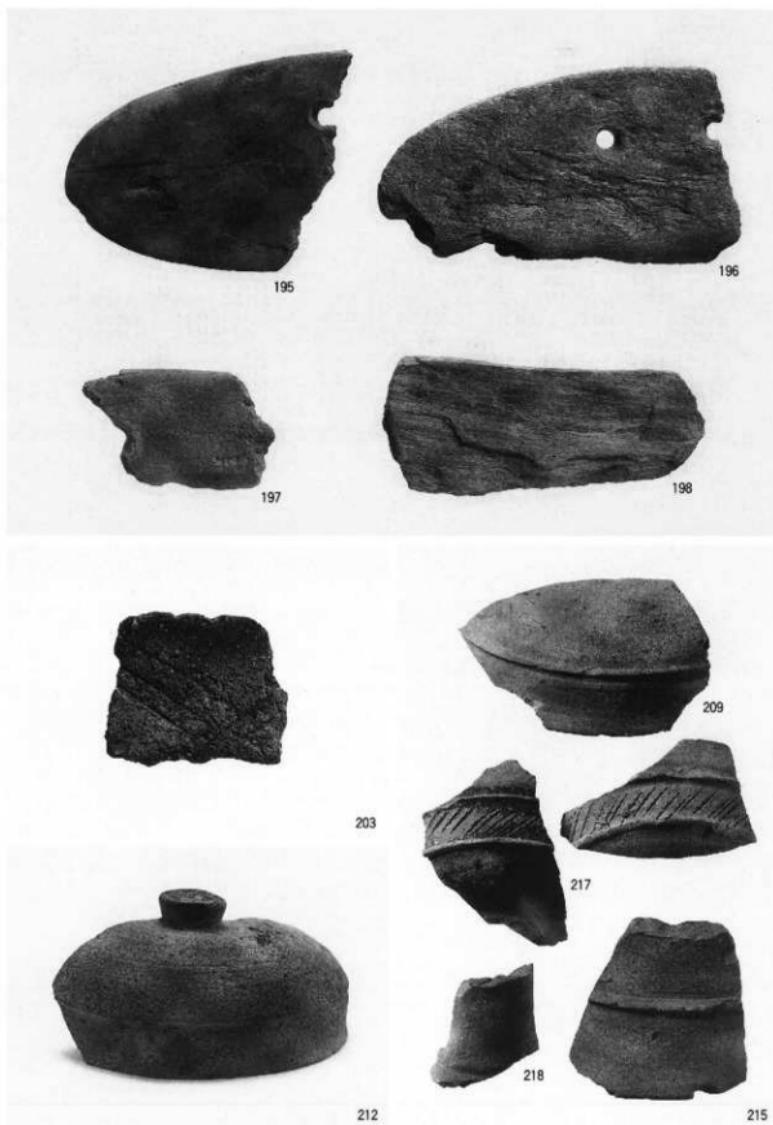


120

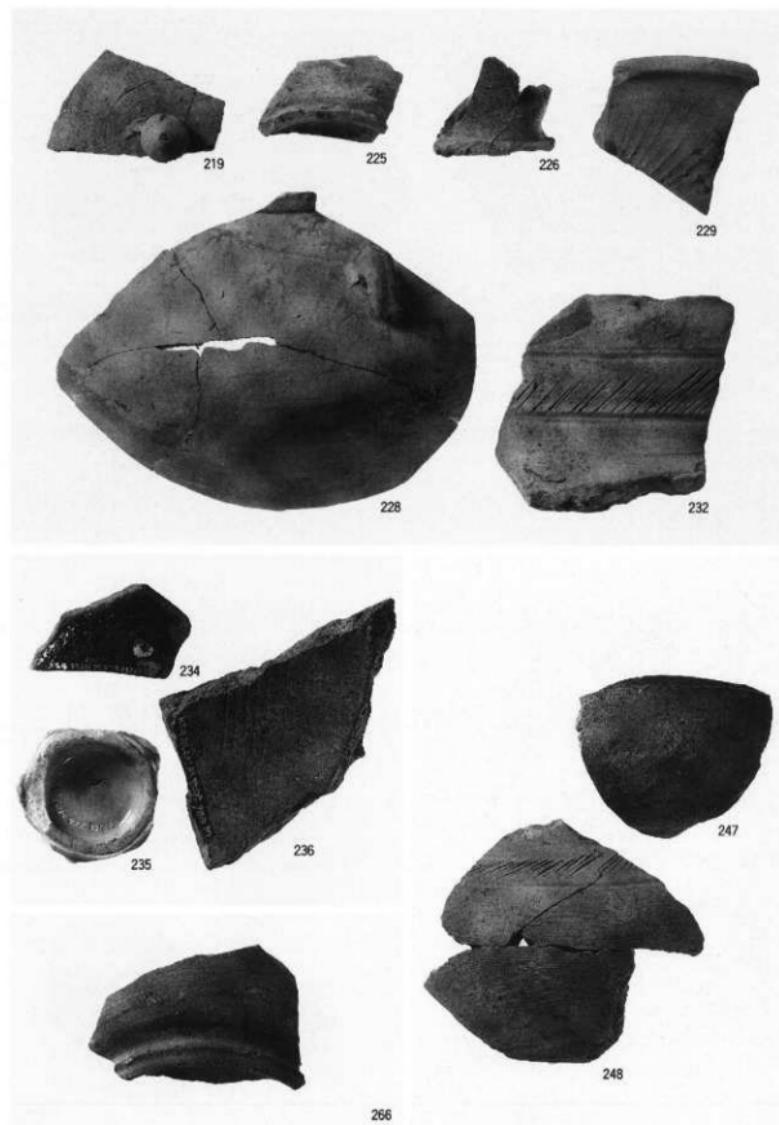
図版一六



1 S R 201埋土①出土遺物(1)



1 SR 201埋土①出土遺物(2)



1 S R201埋土①出土遺物(3)・S X101出土遺物・包含層出土遺物



1 調査区西部遺構検出状況（東より）



2 SB 1・2 検出状況（北西より）

図版二〇



1 SD 1・2 完掘状況（西より）



2 調査区西部完掘状況（東より）